
ハンコくださいっ！

楽山やくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハンゴくださいっ！

【Zコード】

Z3721Z

【作者名】

樂山やくら

【あらすじ】

それぞれ異なる理由から、魔符術学校を卒業できない危機に立たされているリューイとローディナ。そんなふたりに校長先生が与えた最後のチャンスは、協力して『いちばん強い魔符術』をつくりだすこと！しかし、正反対の性格を持つふたりは早々にケンカ別れをしてしまつて……！？ まっすぐな少女と捻くれた少女の友情×魔符術ファンタジー。

【プロローグ】癒しの大樹にて

セルミア魔符術学校の中庭には、なんの根拠もなく『癒しの大樹』と呼ばれている老木がある。

テストの点が悪かつたり、通知表の評価が低かつたり、先生から叱られたりしてかなしみのどん底にいる生徒たちが、一方的にその木に話しかけることによって、勝手にストレスを解消して去っていくんだ。

別に、木がなにかをしてくれるわけじゃない。

けれど、なぜか自然と足が向いてしまう。

学年順位では明らかに下から数えたほうが早いあたし リュー
イールーンも、そういう生徒のひとりだった。

（常々やばいやばいとは言われてきたけど、まさか卒業までやばいなんて！）

まったく、自分で自分に呆れるよ……。

さつき先生から聞かされたばかりの衝撃的な事実に頭を抱えながら、あたしは今日も『癒しの大樹』へと向かっていた。

廊下を歩くその足取りがいつもよりずっと速かったのは、それが絶対にあつてはならないことだったからだ。

（これじゃあ、ギヒシー（パパ）とバートチャ（ママ）が帰ってきても顔向けできないよ～）

あたしの両親は高名な言語学者だった。しかも専攻は、古代語。それははるか昔に使われていた言語で、魔力のない者が魔術を行使するための『魔符』をつくるには欠かせない要素だった。当然このセルミア魔符術学校でも、いちばん力を入れて教えられていた。

そしてやつぱり当然、古代語の専門家を両親に持つあたしは期待され。

その期待を ことごとく裏切りづけてきたんだ。

（単語力だけなら誰にも負けないのに……！）

赤ちゃんの頃から、なにか言葉を覚えるときは現代語と古代語をセットで覚えさせられてきた。両親を呼ぶときも古代語で呼んでいたくらいだ。だからあたしは、他の人がまったく知らないような、どうでもいい単語までたくさん覚えていた。

おそらく、きっと、それらがあたしの脳みそのほととぎを止めてしまっているんだろう。

この学校に入つてから教えられた古代語の文法は、少しも頭のなかに入つてこなくて、あたしはうまく文章を組み立てることができなかつた。テストのときには毎回、単語問題の点数しか取れなかつた。

(情けなかつた)

両親が単語しか教えてくれなかつたからなんて、理由にならない。ちょうど文法を教えはじめようとしていたその頃、急にいなくなつてしまつたなんて

「……あつ、ごめんなさい！」

早足で歩いていたくせに「考え」としていたせいで、他の生徒とぶつかつてしまつた。立ちどまつたあたしが慌てて謝ると、「ぼーつとしながら歩くなよ、バーカ」

男子生徒はそう罵倒して、あたしの横をすり抜けていく。

(ほんと、バカだな)

そのあいだにも脳裏に浮かぶのは、両親のやさしい笑顔。その目尻が少しずつつりあがつていくのを想像して、あたしはぶんぶんと頭を振つた。後頭部に高く結つてこいる髪の毛も、一緒に揺れて否定する。

(ダメっ、たとえ頭のなかでだつてこんな顔させられない！ なんとかしなきや)

焦燥感があたしの心を支配して、再び歩きはじめた。中庭への出入り口はもうすぐそこだ。

(なんとかして、卒業しないと…)

必死の思いで、足を動かす。

そこに行けば、きっと落ちつける。

そうしたらなにか、妙案が浮かぶかもしれない。

あたしは期待していた。

常連の仲間がいたら相談してみようなんて、考えてもいた。
けれどその日、強い風にあおられ緑の葉が舞い飛ぶなか、さらり
と長い黒髪をなびかせて立っていたのは、絶対にそこにいるはず
のない人物だった。

「！ あ、あなたは……」

発見したとき、息を呑んだ。あたしはそれ以上言葉を続けられな
い。

それが誰なのかは、知っていた。

彼女は学校始まつて以来の天才として有名だったから。

それに、あたしと彼女はとある理由で周りから勝手な比較をされ
ていたんだ。

あたしは、『成績が悪いほうのルーン』と。

そして彼女は、『成績が良いほうのルーン』と。

そう、彼女の名はロディナ・ルーン。

名字が同じだけの、赤の他人だ。

当然お互い存在は認識していたけど、まだ直接話をしたことにはな
かつた。

（なんで彼女がここに！？）

天才なら、こんな場所に用事なんかないはずだ。まさか、からか
いにでも来たの？

あたしはかける言葉を見つけられなかつた。思いがけないロディ
ナの登場に動搖し、見つめるのが精一杯。

そしてそんなあたしを、ロディナも見つめ返してくるだけだった。
向こうから話し出す様子もない。

（変なの……でも、やっぱり美人だな）

こんな状況下なのに、あたしはつい見とれてしまう。

そう、ロディナが有名だったのは、なにも頭が良いからだけじゃ

なかつた。あたしとは違つて、切れ長の大人っぽい目に、形の良い上品な鼻、柔らかそうな厚い唇。おまけに、制服のスカートからスラリと伸びた長い脚が、まるであたしと年齢差があるかのように見せていたけど、安易に比較されるところからもわかるとおり、あたしとローディナは同じ十六歳だった。

あたしは密かに、彼女に憧れていた。

だからこそ簡単には、言葉を続けられなかつたんだ。

「あ、あのっ」

それでもなんとか選び出し、自分が焦つていたことも忘れて、あたしは口を動かす。

「ここに来るつてことは、もしかして、なにか嫌なことでもあつたの？」

（成績では用のない彼女でも、それ以外のことでなら）
なにかつらいことがあつたのかもしれない。

そう思つて訊いてみたけど、ローディナは相変わらずあたしを見返すだけで、息を吸う素振りも見せない。それどころかやがて、すいと顔を背けて幹のほうを向いてしまつた。

（あれえ？）

その背中は、すべての問いを拒絶しているように見えた。
（なにか悪いこと訊いちゃつたかな……）

予想外の反応に、戸惑つたあたしはそつと手を握りこむ。もし悩みがあるのなら、誰かに話すだけでもすつきりすることがあるんだ。それは相手が木であつても有効なことだけど、人間であれば当然もつと効果が高いもの。あたしはこれまでそうやって何度も、仲間に助けられてきた。

励まされてきた。

（でもローディナは、ひとりのほうがいいのかな）
ひとりになりたくて、ここに来たのかな。

それなら

（常連のあたしが、譲つてあげなくちゃ）

ロディナがここを訪れるのは、これが最初で最後になるのかもしれない。それなら、情けないことに今後もお世話になりそうなあたしが、今無理に邪魔することもないんだ。

まだ動かないロディナの背中に、決心したあたしは足を動かそうとした。

そのときだった。

「リューイー やつぱりここにいたかっ」

突然の声に振り返ると、校舎の出入り口から走つてくる人影があった。

「げつ、ジノラット」

シルエットだけでも簡単に誰だかわかりそうなツンツン頭のそいつは、あたしの幼なじみ・ジノラット=ダクシャン。あまりにもやんちゃが過ぎて、いつも身体のどこかに包帯を巻いている。本人は「ファッショニだ！」と言い張つてゐるけど、絶対に違うとあたしは思つていた。

「『げつ』ってなんだよ『げつ』って」

今日は左の一の腕のあたりに包帯を巻いているジノラットが、あたしから一歩離れた位置でとまる。まずはあいさつがわりの口ゲンカ。

「だつて、あんたが来ると話が長くなるんだもの
「なんだとー？ それはおまえが話をややこしく
でもそれがあつさり途中で終わつたのは、ジノラットの視線があたしを通り越したからだつた。

(?ああ、後ろのロディナに気づいたのね)

さつきのあたしみたいに、ジノラットも見事に固まつてゐる。ついでに頭の先からどんどんと赤くなつていつて、やがて口をパクパクはじめた。

(まつたく、ジノラットつたらわかりやすいんだから)

そう、ジノラットはあたしとはまた違つ意味で、ロディナに憧れていた。

「な、な、な、なんで……なんで、ロティナがここにいるんだよ！？」

「あたしに訊かないでよ。それよつどつ？『覗き屋ジノラット』くん。双眼鏡じゃなくて裸眼でロティナを見た感想はー？」

「うわああ、なに言つちやつてんだよつ、聞こえる聞こえる！…」焦つたジノラットは、素早い動作であたしと身体を入れ替えると、通せんぼするように両手を広げた。もしロティナが振り返つても、常に首から掲げている双眼鏡を見られないうにしたかつたんだろう。

「あたしのこど、こつも『成績が悪いほう』ってバカにしてくれるから、お返しよー。」

「く……つ」

あたしが両足を広げ胸を張つて告げると、ジノラットは文句を言いたそうに眉をひそめたけど、それでも後ろにロティナがいるからなのか、口をひらくことはなかつた。

（よしつ、今日は早く切りあげられそう）

あたしは心のなかでほつと息をつく。なにしり、じんなといひで時間を使つている場合ではないんだ。『癒しの大樹』をロティナに貸している以上、他に落ちつける場所を探す必要があつた。

「で？ あたしになんの用？」

「あ、そうだつた！」

促してみると、ジノラットはまんと手を叩く。

「俺、一応おまえに良い話持つてきたんだぞ……なんか癪だけど、まあいつか

そう前置きしてから。

「卒業が危ういおまえに朗報だ！ なんでも、国王陛下が『いちばん強い魔符術』を欲しがつてゐるらしい。それをつくれたら、願いごとをひとつ叶えてくれるつてよー。」

「えつ！？」

「それ、本当？」

(一)

驚きの声をあげたのはあたし。でもそれに続けたのは、意外にもロディナだった。

太い幹の前で、ロディナはいつの間にかこちらを向いていてその瞳は、息を呑むほどに真剣そのものだ。

「あ、あの……？」

それだけ返すので精一杯なジノラットの声は、乾いてガラガラだ。ロディナはその返答に不満だったのか、ツカツカとジノラットに近づきその両肩をつかまえると

「その話は本当かと訊いているの。どうなの？」

「は、はいっ！ 本当です。この学校からも挑戦者を募るって、さつき校長先生が城の人と一緒にポスターを貼つてしまシたっ！！ 骨のない人形のように首を振りながら、ところどころ豪快に声をひっくり返らせながら、ジノラットは一生懸命に答えた。

「そう

それを聞いたロディナは一言呟くと、そのままぐことジノラットを押しのけて、校舎のなかへと走つていってしまう。

(どこか様子が変だわ)

(そこにいたさつきまでは、むしろ落ちつきすぎるのはじだつたのに。やつぱりなにかあつたの？)

心配になつたあたしは、ロディナを追いかけようと地面を蹴つた。

「あつ、リューイー！」

すると押し倒されて地面に座りこんでいたジノラットが声をかけてきたから、一瞬だけ立ちどまつて。

「校長室よ！」

「来る気があるなら来なさい」という意味をこめて、言葉の置き土産を投げてから再び走り出す。

(そう、きっと校長室。だってロディナ、さつきの話に興味がありそつだつたもの！)

国王陛下が願いを叶えてくれるところ、まるでおどか話のような

話に。卒業がかかっているあたし以上の興味を持つて、ロディナは食いついていた。

（なにか叶えたいことがあるの？）

だから、『癒しの大樹』に来ていた？

ロディナほどの人物が、一体なにを望む？

あたしは気になつた。

半分くらいは羨望で、半分くらいは僻みだつたかもしだれない。

授業が終わつてからしばらく経つてゐるため、ほとんど人の気配のない校舎のなかを、ばたばたと駆け抜ける。そのたびに床板はひどく軋み、建物全体が少し揺れたけど気にしない。築百年の木造校舎を心配するよりも、ロディナの秘密（？）が知りたかつた。

いつも比べられてきた。

いつも、憧れていた。

ああなりたいと思つていた。

そんな相手が、心に抱える悩みつてなに……？

目的の校長室は、校舎のいちばん奥にある。たどり着いた頃には息が切れていた。

「 校長先生！」

それでもそのまま校長室に飛びこむと、そこにはやはりロディナの姿があつた。

あたしを振り返つたロディナは、大きく目を見ひらいていて。それとは対照的に、校長先生は変わらず穏やかな笑顔を浮かべていた。ふんと、大人の男性がよく使う整髪料のにおいが漂つ校長室内に、校長先生の低い声音がやさしく響く。

「リューイさん、あなたもこの話に興味があるのですかな？」

「えつ！？ あ、はい、まあ……」

『この話』が、さつきジノラットが言つていた話だとあたりをつけたあたしは、戸惑いながらも頷く。もともとあたしの卒業のためにジノラットが持つてきた話だつたんだ、興味がないわけがない。（どんな成績でもいい、とりあえず卒業だけでも！）

できる可能性があるならば、あたしはすがりたかった。

自分はどんなにバカにされてもいいけど、両親だけはバカにされ
たくなかつたから。

そんな想いのあたしと、啞然とした表情のまま固まつているローテ
イナを、交互に見つめた校長先生は、やがて「いいでしょう」と深
く頷いて。

「国王陛下が求めている『いちばん強い魔符術』。きみたちふたり
で力を合わせてつくつてみなさい」

「!?

当然顔を見あわせる、あたしとローテイナ。

「発表大会までは七日間あります。そのあいだに完成させるのです。
出場の申し込みは私のほうでしておきましょう。ただし、これも課
外授業の一環ですから、制服で行動するようにしてくださいね」
すらすらと続ける校長先生に、耐えかねたのかローテイナが口を挟
んだ。

「待つてください校長先生！ ひとりずつではダメですかっ？」
校長先生のすべてを包みこむような視線が、再びあたしたちをと
らえる。

それからにこりと、目尻にシワを寄せて。

「ローン同士です、きっと仲良くできますよ」

なんの根拠もないのは、『癒しの大樹』だけではなかつた。

【第1章】 それぞれの理由・1

丸襟がかわいいまつ白なブラウスに、映える真紅のリボン。そして青が基調のタータンチェック・プリーツスカート。

（着てる制服は同じなのに、なんでこんなに違うのかなあ）
学校から西に延びる、林に囲まれた国道をふたり並んで歩きながら、あたしはそんなことを考えていた。

（ジノラットじゃないけど、遠目に見る分には良かったのよ）

でも隣に立たれると、外に向いていた憧れや羨ましさが、内に向いた落胆や恥ずかしさに変わってしまう。

それでもさいわいだったのは、ロディナの中身が見た目ほど完成されていないこと。

そう、ロディナはまだ一言も、あたしと口をきいていなかつた。

あたしがなにを言つても、だんまりを決めこんでいたんだ。

（性格が悪いなんて噂、聞いたことなかつたんだけどな）
もしかしてロディナ、あたしのことが嫌いなのかな……？

無表情に覆われた横顔を見ながら、あたしは少し沈みこむ。

卒業できるチャンスをもらえたことも、密かに憧れていたロディナと一緒に挑戦できることも、あたしにとつては嬉しいことなのに。でもロディナに嫌われたまま進むとなると、話はまったく別だ。
雲のほとんど見えない空は高く、昨日よりも幾分落ちついた風があたしたちのあいだをすり抜けていく。あたしの視線は何度もそこを行き来してしまつけど、ロディナの視線は相変わらずまっすぐに前をとらえたままだつた。

道の両脇に伸びている木々を？

それとも、これから先に待つている想像もできない未来を？

「 なに

「 えつ？」

不意に、初めてロディナが唇を動かした。

「さつきからわたしのほうを、チラチラ見てるでしょう
さすがに気づいていたんだ。そして居心地の悪さを感じたんだろう。

その声は低く、あからさまに機嫌の悪さが窺えたけど、あたしはチャンスだと思ってローディナの前に躍り出る。

「う、うん！ これからどうしたらいいかなって、相談しようと思つて」

集合場所も集合時間も、校長先生が勝手に決めて、あたしたちはそれに従つただけだつた。今西に向かつて歩いているのだつて、なにか目的があつてのことじやない。たまたま見送られたのが西門だつたからだ。

あたしに行く手を遮られ、ローディナは歩く足をとめた。目を細めて、もう一度あたしの顔をとらえる。

「じゃあ訊くけど、リューイールーン。『いちばん強い魔符術』には、なにが必要だと思つ？」

「え？ つと……」

突然の問いに、あたしは言葉を詰まらせた。

それをつくらねばならないことになつて、あたしだつて昨日からずっと考えてはいたんだ。

（そもそも魔符つて、魔力に命令を『えて自在に操作するためのもの、なのよね）

学校で習つた歴史によると、昔々の古代人は誰もがあたりまえに魔力を持つていて、魔術は決して不思議なものではなかつたという。でも時代が進むにつれ魔力を持つ人が減つていつて、魔力を持たない人でも魔術を使えるようにするために、魔符が生まれたんだつて。魔符に魔力への命令を織りこみ、魔力を持つ人『魔力士』のハンコをもらうことで、そのハンコから繋がつてている魔力士の魔力を借りて魔術を発生させるのが、魔符術の仕組みなんだ。

そして今現在、魔力士はこのアステイヌ王国内でも五人しかいない。でも魔符術そのものは、國中はおろか世界中に広く漫透してし

まっていたんだ。今さら魔符術のない不便な生活には戻れないって、各國は魔符をつくる技術を保存する試みを始めた。そのなかのひとつが、あたしたちの通うセルニア魔符術学校というわけ。

（だから、強い魔符術をつくるためには）

まとめてきた考え方を、少しずつ引き出しながらあたしは口をひらいた。

「魔力がすごく強い攻撃をしてくれるよつて、強力で正しい命令文を構築することと、すごく強い力を持つ魔力士にハンコをもらつこと…じゃないかな？」

あたしの、自分でもそうとわかるほどつたない言葉に、ロディナは口もとだけで「ふつ」と笑い。

「そうね、『優れた魔符』と『優れた魔力士』が必要ね」

それ以上ないくらい短い言葉でまとめてくれた。

思わずあたしは「ぐう」と唸る。

（さ、さすが文章構築の天才つー）

現代語も完璧だわ！

魔符は通常、古代人が使っていた古代語で書かれる。魔符に古代語で命令文を書きこむことを専門用語で『織る』といい、古代語に精通していなければ思いどおりの魔符を織ることはできない。さらに、魔符の発動には魔力士のハンコをもらつたあとでそれを読みあげるという行為も加わるんだ。つまり古代語を正しく読む力も必要で、「魔符術は難易度が高く技術の保存が難しい」と言われる所以はそこにあつた。

学校一の天才と言われるロディナは特に、その古代語による文章構築能力に長けていた。それは実のところ、現代語の文章構築とはなんの関わりもないことなんだけど、あたしにとつては『すごい』ことにはかわりなくつて、感心してしまつたのだつた。

「『優れた魔力士』はねつ、このまま西にまっすぐ行くと、『国一の魔力士』って言われてるガイト＝チャードのお屋敷に着くの！そこがいいんじやないかしら」

ロディナの冷たい雰囲気にもめげず、校長先生から預かってきた『アステイス王国魔力士マップ』をひらきながら、あたしは提案する。そのマップには、国内に存在する五人の魔力士の現在地が記されていた。ついでに、×がついているのも気になるけど、意味がわからぬから今はおいておこう。

ロディナはこのマップがすでに頭のなかに入っているのか、こちらに目を向けることもなくすぐに切り返す。

「ガイト＝チャードのところまで、六マスもあるでしょ。歩いていつたら一マス一日、往復で十二日もかかるじゃない。乗りものだつてそうそう乗れるお金があるわけじゃないわ。宿泊代と違つて学校からは補助が出ないしね。なに？ あなた、もしかして最初から諦めているの？」

最初に世界地図をつくりた人が、一日で歩いた距離の一乗が一マス。この世界ではどこでもそれが基準になっていて、マス目の境は視覚的にもわかるようになっている。あたしたちのやや前方にもひとつ、淡い光で区切られたような境目が見えていた。

「ち、違うよっ、ちやんと考えがあるから！」

焦つたあたしは、マップをロディナのほうに向けて無理やり見せてやる。

「ほらここ一マス先にもエイラ＝ポットっていう魔力士がいるのよ。この人に、三マス移動できる魔符にハンコを捺してもらえば、歩きでも往復六日で行けるでしょー？」

「その魔符は誰が書くのよ？」

「それはもちろん、ロディナが……」

「自分が」と言いたいところだつたけど、あたしにそこまで高度な魔符を織る技術はない。だからこそ案だけでも出そうと、昨日から必死に考えていたんだ。

マップからふいと顔を背けたロディナは、大袈裟でわざとらしいため息をひとつつき。

「まあいいわ。それ以外にも気になることはあるけど、他に方

法があるわけではないし

よけいに気になる言葉を吐き出してから、あたしの横を通して再び歩きはじめた。

（つべ、ロティナつたらちよつといじわるだわ……）

でも、頼りになるのも頼りにするしかないのも事実で。あたしはすぐにその背中を追いかけていった。

（せめてこの、まくしゃくした空気だけでもなんとかならないから……）

あたしは盛りあげるのが得意なほうだけど、ここまで相手のノリが悪いとそれも難しかった。もし「ジジノラット」がいてくれたら、もう少しマシだつたかなあ？　「ううん、むしろ泥沼になりそうだわ。やっぱりいなくて良かった。

あたしがひとり思案するあいだにも、ロティナは会話など不要とばかりにどんどん歩いていく。

「ねえ、待つてよロティナ！　急ぎすぎよ」

後ろを歩きながら声をかけてみても、足をゆるめる気配はない。

「そんなに急がなくても大丈夫よ。だつて『優れた魔符』のほうはできたも当然じゃない？　学校一の天才・ロティナ＝ルーンがいるんだもの！」

あたしが本気で期待して告げたら、今度はぴたりと足をとめたロティナ。ぐるりと鋭い動きでこちらを振り返ると、再び自分の足を動かした。

「わたしは、書かないわよ」

「え？」

あたしがその言葉の意味を一瞬理解できなかつたのは、なんだかんだ言つてもロティナ自身も本気で『いちばん強い魔符術』をつくろうとしてくれるだらうと、思つていたからだ。あたしが卒業をかけているように、おそらくロティナもなにかをかけている。だからこそ態度は頑なでも、協力はしてくれるだらうつて。

（ロティナの魔符が、いちばんの近道だと思ったのに……）

勝手な期待ではあつたけど、拒否されたのはショックだった。

「書いて、くれないの？」

自然と声も震える。

そんなあたしの様子にはさすがのローディナも表情を崩し、もてあましていた腕を組んで。

「協力しないとは言つていないわ。ただ、魔符はあなたが書いて。わたしが読みあげるから」

「へ？」

また妙なことを言い出す。

「あなたが読んだのを、あたしが織るの？ なんでそんな面倒なこと……」

正確に書き取るためには、正確なつづりを知つていい必要がある。単語ならわかるけど語尾変換などに自信のないあたしに、それができるとはとても思えなかつた。まして、ローディナの知識レベルのほうがはるかに上なんだ、書き取るにしても時間がかかるだろう。それよりなら、ローディナが自分で書きこんだほうがはるかに早い。あたしはつい、疑問全開の瞳でローディナを見つめてしまった。するとローディナは、

「じゃああなた、この魔符が読める？」

肩から斜めにさげた魔符専用のファイルブックから、一枚の魔符を取り出してあたしに渡してきた。

戸惑いながらもおとなしく受け取つて、それに目を落とすと。

（えつ！？）

そのまま凍つてしまつたのは、そこにまったく知らない言語が書かれていたからだ。

少なくともあたしには、そういうふうに見えた。

「これ、古代語？」

「アオマ・シャオアラビコオスモライフレ（魔符・術炎よ、たわやかななる光であたりを照らせ）」

「！」

それは日常生活のなかで、最もよく使われる魔符だ。ランプに灯りをつけるときはもちろんだけど、料理をするさいの火種としても使われる。それくらい一般的な魔符術だつた。

あたしはもう一度、手のなかに視線を落とす。その命令文が書かれていると思つて見れば、かるうづじてそう読めなくもないような気がしなくもない。

けど

「あの……」

「わかつたでしょ？ 恥ずかしい話だけれど、わたし、字がとても下手なの。だからあなたが書いてよ。じゃないと、魔力士たちがて読めないわ」

少しだけ目を伏せて、ぱつが悪そうにロディナはロにする。でもそれは、あたしにとつてはたいした問題ではなかつた。だからつい、言つてしまつたんだ。

「なんだ、そんなことね。気にしなくていいのに」
字が下手でも、ロディナの頭脳が優れていることにかわりはない。それに、魔符がちゃんと発動するなら字の上手に下手なんて、言つてしまえばどうでもいいことだ。

あたしは心からそう思つていた。

それでも羨ましいつて。

ロディナの手が素早く伸びて、あたしの手もとにあつた魔符を掴んだ。

「そんなこと！？ そうね、あなたにとつては些細なことかもしけないわね。でもわたしにとつては、この世の終わりかと思つくらい大問題なのよ……つ！！」

「キツ」と至近距離であたしを睨みつけてから、方向転換したロディナは走り出す。まるで昨日と同じ場面をくり返しているようだつた。

ただ、昨日と違うのは

「ロディナ、待つて！」

(怒らせちゃった！？)

これまで、無表情だったり機嫌が悪かったりしたものの、ひとつ感情をここまであらわにしたことはなかったロディナ。それが、今は明らかに『怒つて』るわかるほどの強い瞳を見せつけてきたんだ。

思つてもみなかつた[反応]に、あたしもどこか混乱してすぐには動き出せなかつた。

(ロディナ……)

もしかしたら、ラブレターの字が下手だつたつて原因で、振られたりしたのかしら？

そんな相手ならこいつちから振りつてやればいいのと、あたしが勝手な妄想まで膨らませていると。

「ふたりのルーン、たつた一マスも持たずにケンカ別れ、か」また昨日をくり返すかのように、突然後ろから聞こえたなじみのある声に、あたしは反射的に振り向いた。

「ジノラツト！？」あんた、いつから見てたの？

今日は左手首に包帯を巻いているジノラツト。林の陰に隠れて見ていたのか、ニヤニヤ笑いを口もとに浮かべ、双眼鏡に手をあてて立つていた。

「まあこうなると思つたよ。おまえとロディナじゃタイプが違いすぎるもんなあ。ロディナが耐えきれないわけだよ」

わかつたふうな口ぶりで話すジノラツトに、あたしはだんだんと腹が立つてきて。

「うるさい！ なによ、字が下手なくらいどうしたことないじゃない。頭良いんだから、それくらいの愛敬でしょ！ あたしなんて、あたしなんて……」

しまいには泣きたくなつてきた。

(たとえ古代文字がうまく書けても、頭が悪かつたら意味ないのよおおおっ！—)

幼なじみにでもそんなに情けないとこは見せられないよ、あた

しは心のなかでだけ続きを叫んだ。

そんなあたしを見るジノラットの目が、なぜかキラリと光る。

「なんだおまえ、地雷、踏んじゃったのか」

それから不意に表情を硬くして、目を細めた。

なんの話だか、あたしには全然わからない。

「地雷？ 踏んでないよ、踏んでたらとっくに死んでるでしょ？」

だいいち、この国に地雷なんて……」

「いやいやいやいや、本物の地雷じゃなくてさ。ローティナの感情が爆発するようなこと、言つちまつたんだな」

「なに？」

ジノラットがなにを言いたいのか、やつぱりよくわからなかつた。ただジノラットは、いつも覗いている分ローティナのことに詳しいはずだつたから、あたしは身体をまつすぐに向けてジノラットの続きを待つ。

ジノラットも、真似をするように姿勢を正してから。

「成績上位五名は、魔符術協会に卒業論文を提出しなきやならないつて、知つてるだろ？」

「うん」

そしてそれが認められない、卒業できないといふことも知つていた。セルミア魔符術学校の卒業生代表として、それくらいの責任があるんだ。

「それがどうしたの？」

軽く訊いてしまつたあたしは、

「ローティナの論文、『字が汚くて読めない』って理由で突つ返されたんだってさ」

その答えに後悔した。

「え」

(だから……だから昨日、あんなに焦つてたんだ)

卒業できないかもしれないことに、強いショックを受けていたあたしと同じで。天才と呼ばれるローティナですら、なんの根拠もない

『癒しの大樹』にすがらねばならなかつた。すがりたかつた。
それくらい、追いつめられていたんだ。

「でも、そんなのおかしいよつ。ロティナの字は汚いんじやなくて
下手なんでしょ？　きれいに書いたつて下手なものは下手じやない
？」

「……おいリコーや。それがフォロードってのはわかるけど、話が
こじれるからロティナの前では言つなよ？」

「なによー、事情通な振りしちやつて。わかつてるけど、だつて、
内容は間違いなくすばらしいはずなのに、かわいそつじやない」
「だから今回のことじで、国王に認められて論文を受け入れてもうらう
ようにお願ひするつもりなんじやないのか？」

「あ、そつか」

内容に絶対の自信があるならば、願うのは卒業そのものではなく、
論文の受理になるだろ？

（なんだ、ロティナだつて充分に本氣だつたんだね）

『いちばん強い魔符術』を、絶対つくりだしたいと思つたからこ
そ、あたしに魔符を織つてほしいと願つたんだ。それなのにあたし
は、深く考へないまま応え、ロティナを怒らせてしまつて

「うん、あたし、ロティナを搜して謝つてくるよ」

あたしたちに残された時間は、たつたの七日間。それを有効活用
するためにも、早めに関係を修復しておく必要があつた。

「居場所はわかるのか？　なんなら俺がこの双眼鏡で搜して

「いいよ、自分で搜すから。距離的に考えたら、隣のマスの宿に泊
まるしかないしね。片つ端から搜してみる！」

「そ、そつか」

おそらくジノラットは、なにか理由をつけてついてこないとして
いるんだ。でもそれに甘えるのは、あつと得策じやない。
(あたしが自分で見つけなきや)

そうして謝らなければ、その謝罪に意味などないよつて思えた。

「ありがと、ジノラット。あんたもたまには役に立つのね

そんな言葉を残して、今度こそあたしは走り出す。

「『たまには』はよけいだ！」

後ろから届いた声は、しかし少しも怒っているふうではなかつた。

【第1章】 それぞれの理由 - 2

結局あたしがローディナを発見できたのは、日付が変わる寸前のことがだった。

しかもローディナはなぜか酒場にいて、顔をまつ赤にしながら大量の酒をあおり、ぐだを巻いていたのだった。

「どーせわたしは字が下手ですよおおお。だからってなによ、いい大人がそれを理由に突っ返さなくってもいいじゃない!? それくらい根性で読みなさいよ! 学校の先生たちはみんな頑張って読んでくれているのよおおおお!」

「ローディナ……なにしちゃってるのよ……」

そのあまりの惨状に、あたしは言葉を失う。

ローディナの周囲ではたくさんの人たち やはり男性が多いが無責任に盛りあがっているけど、ローディナ自身はずつと泣いていたのだろう、その目蓋はなかにものが入っているのかと錯覚するほどに腫れていた。

「お嬢さん、彼女の友だちかい?」

入り口で棒立ちになっていたあたしに、声をかけてきたのはエプロンをしたひとりの男性、どうやらこの酒場のマスターらしかった。もともと垂れているのだろう皿をさらにして垂らして。

「だいぶ前からあんな調子なんだ。部屋は二階に用意してあるから、良かつたら連れていつてくれないかな」

「えつと……あたしも泊まつていいんですか?」

「もちろん。請求は学校のほうにあげればいいんだろ?」

「あ、はい。そうです」

セルミア魔符術学校は国の機関であり、その在校生はいずれ国を未来を担う存在になる。そういう認識が国内に広く伝わっているため、制服で行動している限りはその恩恵を受けることができた。あたしたちが制服で行動していたのは校長先生に指示されたからだつ

たけど、それにはちゃんとした理由があつたんだ。

お酒のにおいが充満した薄暗い店内を、あたしは一步一歩ローティナへと近づいていく。

「お？ またまた制服の女の子が来たぞ。いやあかわいいねえ」
そのあいだにも酔っぱらいが絡んでくるけど、無視をして進んだ。当然のことだけど、あたしは酔っぱらいの扱いになんて慣れていな。ただ、絡まれると先が長いらしいことは、たまに酒を飲んでいたギヒシー（パパ）の姿を思い出せばわかつた。

「おいおい、無視しちゃうのかい、ねーちゃん？ こいつの子は気持ちよく騒いでくれるのになあ」

ローティナの近くに座っている男が、気分が悪いのか伏せついているローティナの肩に手を置いた。

「！ ローティナに気安く触れないでっ」

あたしは慌てて残りの距離をつめると、男の手を払いのけローティナの上半身を起こしてやる。

「ローティナ、しっかりして！ ほら、上で休もうよ」

「うーん、もう食べられなーい……」

「なに言つてるのよ、ほら！」

仕方なく、ローティナの腕を無理やり自分の首の後ろにまわして、立たせてやつた。

（ローティナがこんなになるなんて……）

普段のローティナは、おいそれと人を近づけないような雰囲気を持っていた。こんなふうに酔っぱらいに気軽に触らせる」となんて、考えられないんだ。

（よっぽど傷ついているのね）

『天才だから』

『頭が良いから』

自分たちとは違うのだと、心のどこかで考えていたあたしは。

それが間違いであつたことを、今、強く感じていた。

「歩いて、ローティナ。さすがにあたしだけの力じゃ、上まで連れて

いけないからっ」

支えながら身体を揺すつて、ローディナを起こそうと試みる。

（あら……？）

そのときあたしは、ローディナが左手になにかを握っていることに気づいた。細い鎖が「ぶ」しから垂れているところを見るに、ペンダントだらうか？

やがてローディナは、その握りしめた手をそのまま上にあげ、甲で「じじ」し田をこすると。

「あれ？ リューイ＝ルーン……なぜあなたがここにいる……？」
まだ頭はぼやけているようだけど、意識は少しあはりしてきたみたいで、やつと自分で足を動かしてくれた。

「話は部屋に行つてからよ。ほら、歩く歩くー！」

あたしは必死にローディナを酒場から連れ出そうとする。

でもそこに、

「待てやねーちゃんたち、夜はこれから長いんだぜー？ もう部屋に行つちまうのかよ」

「そーだそーだ！ 酒場には華が必要だ！」

ローディナの退場を残念がる酔っぱらいたちが、容赦なく邪魔をしてきた。

「あ、こらーー ローディナ、お酒受け取らないのつ。置いてつて！」

「ううーん」

「唸つてもダメ！」

ぐいぐい引っぱって、なんとかドアの前までたどりつく。

それでもまだしつこくローディナに絡んでくる酔っぱらいに、成り行きを見守つていたマスターが声をかけてくれた。

「そのへんにしておいたほうがいいですよ。彼女たちは、まだ勉強中とはいえ魔符を持つていますからね。我々が想像もつかないようなすごいものを隠し持つているかも知れないです。朝起きて大事なものが縮んでいたら、どうしますか？」

「うげつ！？」

実際にはそんな魔符あるはずもないんだけど、みんな酒が入っているためその言葉で静かになつた。

(今のうちに)

あたしはマスターにペコリと頭をさげたあと、ローティナを引きずるようにして酒場を出る。このあたりは夜の街なのか、まだ灯りのついている店が多く、それほど暗さは感じなかつた。でもだからこそ、長居するとまた酔っぱらに絡まる危険性がある。

あたしは急いで左右を見まわすと、この酒場と同じ建物の横から階段が飛び出しているのを発見した。

(あそこから入るのかな)

「ローティナ、もう少し歩いて。頑張つて！」

「う……ん

眠くて仕方ないのか、完全に身体を預けそうになるローティナをなんとか励まして、階段のほうに近づいていく。木製のそれを必要以上に軋ませながら段をあがつていき、やつと最後までのぼりきつた頃、その先のドアが勝手にひらいた。

(えつ?)

「ご苦労さん。悪かつたね、手伝つてやれなくて」

顔を出したのは、さつきのマスターだった。

それからはローティナを部屋まで運ぶのを手伝つてくれて、やつとあたしはすべての荷物をおろすことができた。

「私が彼女を部屋に連れてこいつとすると、見てのとおり酔っぱらいたちが散々に絡んでくるものだから、なかなか連れ出せなかつたんだ」

「だからお嬢さんが来てくれて助かつたよ」と、苦笑したマスターは部屋を出ていった。

(そつか、そよね)

男の人気がひとりで女の子を部屋まで送り届けるなんて、ロマンチックで怖い出来事だ。酔っぱらいたちにとつては格好のからかい草になつてしまつだらう。

あたしはそこまで考えると、ベッドの上で気持ちよさそうに眠りはじめたローディナに目を向け。

「 良かった、無事で」

心から、呟いた。

（昨日までは、ほんと赤の他人みたいな相手だつたけど）探ろうとして、ケンカして、弱みを見てしまつて。自分が漠然と憧れていた存在とのギャップを感じて。

でもそれは幻滅の材料になるどころか、あたしが最初から見ようとしなかつた、ローディナの人間らしい部分を見させてくれた。天才でも凡人でも、きっとみんな同じように悩んで、あがいでいるんだ。（あたしたちは決して敵じやない、力をあわせて難題に立ち向かう仲間なんだから）

明日から、やりなおそう。

最初から。

そう決意したあたしは、ベッドのなかへともぐりこみ、意識を手放す準備をする。ローディナを捜して走りまわつた一日だつただけに、眠りにつくのは早かつた。

だから、

「ヴァンさん.....マリルーゼさん.....」

ローディナが寝言であたしの両親の名を呼んだような気がしたのも、夢か現実かわからなかつた。

【第1章】 それぞれの理由・3

いつも笑顔を浮かべ、すべてを受け入れるやわしさを持っていたギヒシー（パパ）・ヴァンティリス・ルーン。

ときにはあたしを叱りつけ、善悪を厳しく教えこんでくれたバトチャ（ママ）・マリルーゼ・ルーン。

それは、世界を代表する古代語の研究者であつたあたしの両親。古代語研究の未来を憂い、積極的にセルミア魔符術学校へとおもむき、生徒たちに古代語の奥深さと味わい深さを教えこんでいたと

いう。

（あたしもちゃんと教わりたかったな……）

思わずにはいられない。

あたしがふたりに古代語を教えてもらえたのは九歳までで、そこから先は自力で覚えるしかなかつた。

ふたりはなんの前触れもなく、忽然と姿を消してしまつた。

国王陛下をはじめ多くの国民が、國中ふたりを捜しまわつてくれたけど、見つからなかつた。やがて、どこかの国が強い魔符をつくるために連れ去つたのではないかという噂が立ち、それを耳にした国王は外部にまで捜索隊を派遣してくれた。

でもいまだに、ふたりは見つかっていない。

だからこそあたしは、いつかふたりが帰つてくる日を心待ちにしていたんだ。

笑顔であたしの前に現ってくれるのを。

手を伸ばして、「ちゃんと勉強しているか?」って頭をなでてくれて。

手を伸ばして、「卒業おめでとう」「つて抱きしめてくれる。そんな両親を妄想していた。

絶対に卒業しなければならなかつた。

できるのは単語問題だけで、応用力は微塵もないなんて悲惨な現

実を、知られてはいけなかつた。

(あたしが両親の評判を落とすわけにはいかないのよ

ー.)

目が覚めたとき、あたしは自分の枕が濡れていることに気づいた。
最近ずっと見ることのなかつたあたたかい夢。

……もしかしたら、かなしい夢。
さみしい夢。

それを、昨日今日と連続で見てくる。

(フレッシュナーのせいかな……それとも、ふたりがどこかで応援してくれてるのかな?)

わからない。

でもあたしのやる気を奮い立たせるには、充分な笑顔だった。
ふと、ローディナは起きただらうかと隣のベッドに手をやる。

「えっ?」

あたしが思わず口に出してしまつたのは、ソレにローディナの姿がなかつたからだ。掛け布団は少しも盛りあがつていなくて、まるで昨日誰も寝ていなかのようシーツのシワも直されていた。

(ローディナ、どこに行つたのかな)

まさか、あたしをあいて先に行つちやつた?

とたんに不安が募る。

(もういえばあたし、まだ謝つてない……)

謝りうと思つてずっとと搜していたのに、ローディナが酔つぱらつていてそれどころではなかつたんだ。

あたしは急いでベッドから抜け出ると、身なりを整えた。いつもどおりに髪を高く結いあげ、大事なファイルブックを肩から斜めに提げる。

部屋を出る前に、ローディナの忘れものがないかとぐるり見まわして、

「……直しとこ」

忘れものはなかつたんだけど、ロディナのベッドと比べて自分のベッドがあまりにも汚かつたから、あたしはベッドのそばまで戻るとめくれた掛け布団を丁寧に戻した。

それから部屋を出て、昨夜はのぼつた建物横の階段をくだる。

（お店に顔出したほうがいいよね。朝だけどあいてるかなあ）

下の入り口のほうにまわりこむと、昨日見た看板とは違う看板がかけられていた。どうやら、酒場なのは夜のあいだだけのようだ。ドアに手をかけそつと押しこむ。「キイ」と、甲高い音が鳴った。店内がうるさかつた夜はまったく氣にならなかつた音だけど、静かな朝にはまだ寝ている人たちが起きてしまうのではないかと思うほどに響いた。

その音に、カウンターに腰掛けっていたひとりの人物が振り返る。

「！　ロディナ……」

つんとすましたロディナの顔が、そこにはあつた。

（ちゃんと待つてくれたんだ！）

たつたそれだけのことなのに、あたしの口もとは自然とほころんでしまう。

駆け寄つていって、すすめられてもい Kushnerに勝手に右隣の椅子に腰掛ける。

「おはよう、お嬢さん。朝食はできてるよ」

「えつ？　あの、そういうつもりで座つたんじゃないけど……でもいただきます！」

「はつはつは。じゃあ少し待つてて、今出すから

マスターの笑顔に微笑み返してから、あたしは横目でロディナの様子を窺つた。

（ロディナ、顔色が少し悪いみたい）

もともと色が白くて、顔色が変わるとわかりやすいロディナ。昨夜はそれこそ絵に描いた太陽みたいな赤さだったけど、今日は死人のように青かつた。しかしロディナ自身は必死にそれを隠そうとし

ているのか、平然とスープを口に運んでいた。もしかしたら、昨夜の醜態を恥ずかしがっている部分もあるのかもしれない。

でもあたしは結局我慢できなくて、

「あの、ロディナ？ 具合が悪いんだつたら、無理しなくても大丈夫だよ」

声をかけると、ぴたりとロディナの手がとまつた。

「 なんで、そんなことわかるのよ」

「えー？ だつて顔色が悪いし、それに、脛間にシワが寄つてゐるのよ」

「…」

ロディナはさつと、スプーンを持つていない左手でそのあたりを隠す。

「やつぱり頭が痛いのかい？ 一日酔いか、それともスープがまずいのか、どちらかだらうとは思つていたがね」

どう見てもおいしそうにしか見えないスープを運んできながら、あたしたちの会話が届いていたんだろう、マスターがそう笑つた。ロディナは気まずそうに、左側の壁にかけてある絵画に目をやる。かわりに、少し赤みをおびた右の耳が主張していた。

「あ、あなたひとりで、なにができるつていうのよ」

「うん、できない」

「……は？」

マスターからスプーンを受け取りながら、あたしは正直に告白する。

今どん底にいることを直覺しているあたしには、ロディナのよう取り繕うものなどなにもなかつた。

「あたしが今できるのは、ロディナに命令文を構築してもらつて、それを魔符に織りこんで、エイラにハン」をもらつてくることよ。最初にロディナが協力してくれなかつたら、なんにもできないんだ」

「あなた……」

今日初めて、ロディナがまっすぐにあたしの顔をとらえた。

そこにチャンスを見出したあたしは、スプーンを握りしめ熱をこめて伝える。

「『みんなさー、ロディナ。あたし、『天才』と呼ばれるあなたには、あたしたちのような悩みなんてないんだって勝手に思いこんで、あつさり頼んであつさり断つた。それなのにあなたが断つたことに勝手に腹を立てて、ひどいこと言つたわ。まさかあなたも、あたしと同じように卒業をかけているなんて思わなかつたから」

「…………」

あたしの視線の先で、ロディナの瞳が少し揺れる。

「でも今は、一緒に卒業したいと思ってるの。だからね？ 昨日のことは忘れて、今日からまた改めて始めるつていうのはどう？ あたしは夜のことを忘れるから、ロディナは昼のことを忘れて！」

ロディナの頬に一瞬朱が走つたのは、昨夜の自分を思い出したからだらうか。

「 すいぶん、勝手なことを言つたのね」

それだけ呟いたロディナは、再び前を向きスプーンを動かしはじめる。

「ロディナ？」

「その話、のつてあげるわ。でも、こゝを出たあとからね

「！ ええ！」

許してくれるらしい。

（そうと決まれば、急いで食べちゃわないと…）

あたしもスープに向かいはじめた。

追加で運ばれてきたパンとサラダにも手を伸ばしながら、作戦会議は続いていく。

「それで？ わたしはどんな命令文を構築すればいいのよ

「そうね、とりあえずロディナと一緒にエイラのところまで行ければいいんだから、あたしが先にエイラのところに行つたあと、そこからロディナのところに戻るためのが一枚と、ロディナと一緒にエイラのところに戻るためのが一枚ね」

「一度手間だわ」

「いいのよ、体調悪いのに無理することないんだから」

「わたしなら大丈夫よ。無理して動く」には慣れているから」

「え？」

「それにね」

ロディナはそこで一度とめると、チラリ上田遣いにマスターを見やつて。

「マスターには悪いけれど、眉間のシワはスープの味のせいや」

「あちやー」

大袈裟に頭を抱えたマスターがおかしくって、あたしはつい笑つてしまつたのだった。

【第1章】 それぞれの理由・4

あたしたちがエイラ＝ポットの屋敷へとたどり着いたのはそれから一日後、学校を出てからちょうど二日後のことだった。

「うわー、立派なお屋敷～」

あたしが思わず声をあげると、ローティナが「恥ずかしい子……」と呟く。

あたしの背丈の三倍ほどもある格子門の隙間から、それは見えていた。普段見慣れているセルミア魔符術学校の校舎より大きく、しかしそれほど古くもない、美しく整備された豪邸。門から屋敷までの距離は長く、そのあいだには整然と並んだ花々が揺れ、客人の来訪を歓迎しているかのようだった。

格子門の両脇には槍を手にした兵士がふたり立っていて、あたしたちをジロジロと眺めている。頭を覆う防具に國紋が見えるのは、魔力士はみんな國の宝だからだ。

「きみたちはセルミア魔符術学校の生徒だね。どうしたんだい、こんなところまで」

門の右側にいた兵士が声をかけてきた。

そちらに近づいていたあたしは、まだハンコの捺されていない魔符を一枚取り出して。

「エイラさんに、ハンコをもらいに来たんです！」

「ハンコを？ 学校用のおつかい？」

「違います、わたしたちが個人的に使うものです」

補足したのはローティナだ。

するとふたりの兵士は顔を見あわせ、頷きあう。

「捺すかどうかの判断は、エイラさまが直々に行う。まずはその魔符を見せてもらおう」

「はいっ」

普段王国直属の兵士となんてあまり接する機会のないあたしは、

ひどく緊張して手のなかの魔符を差し出した。その魔符は、ローティーに一枚だつた。

受け取つて、さつと田を落とした兵士は、

「ほう、きれいに書いてあるな」

まずそう褒めてくれた。

それから、

「これ、本当にきみたちが書いたのかい？」

書かれている内容にも驚いてくれた。

その反応が気になつたのか、もうひとりの兵士も近づいてくると、その手もとを覗きこむ。

「ふむ、ニマス先、と書いてあるのかな。もしかして、本当の田的はガイントさまのところか？」

「やうなんです。でも時間制限があるから、良かつたら協力してもらおうと思つて……」

「ああ、陸トガ探していアレをつくるつもつなのか」

ふたりの兵士はもう一度顔を見あわせると、思わせぶりな様子で魔符を返してきて、再び門の両側に戻つてしまつた。

(あら?)

それからおのの、腰にさげてゐるファイルブックのなかから一枚の魔符を取り出し、宙に掲げる。

「アオマ・レツ・ヴィジ・パイ・ネイ・オ・エ・イ・ラ・ゲー！（魔符術・門よ、エイラの名において来訪者を通せ！）」

(ー)

そりつて読みあげられた古代語に、反応した魔符は輝き、その光が格子門へと伸びていつた。

「あ……！」

そして門の中心に描かれた、光の輪。

「さあ入りなさい。この、決してひらかない門に」

兵士の言葉に促され、あたしとローティーも額をあつてから、光の

輪をぐぐり抜ける。

その瞬間、ずんと重くなつた空氣に、あたしは魔力士の存在を実感した。

（エイラさんはもう、ほとんど魔力の残つていない低位の魔力士つて言われてるのに）

これほどの力を感じるなんて。

そう、魔力士の持つ魔力は、無限のものではないんだ。そもそも、どういう基準で魔力を持つて生まれてくるのかもわかつてない。ただ、魔力を持つ人は普通の人間に比べ成長・老いが遅く、また、圧倒的な美しさを有していた。そのためある程度早い段階から魔力士として保護されることが多く、そうして国王のもとに入つた魔力士たちは、魔力の強さによつて役目を振り分けられている。

たとえば、ガイト＝チャードのように強い魔力を持つた高位魔力士は、国を守り維持するために使われるような魔符を託されるし、逆にエイラ＝ポットのように魔力の弱まつてしまつた低位魔力士は、国民が普段使うような威力を求められない魔符を託されるんだ。

だからこそあたしたちも、エイラに『いちばん強い魔符術』のハンコを捺してもらおうとは考えなかつた。エイラはアステイズ王国内にいる魔力士のなかでは、間違いなく最も力の弱い魔力士だつたからだ。

それでも全身にぶつかつてくる空氣の重さ・圧力には、ロティナも意外だつたようで目を大きく見ひらいていた。

「まっすぐ歩いていくといい」

後ろからかけられた兵士の言葉を頼りに、強風のなかを歩くよくな足取りであたしたちは進む。

（風なんて吹いてないことは、周りの花を見ればわかるわ）
花は美しいまま、あたしたちの足もとで笑つていた。ロティナの長い黒髪も、歩くことで揺れているだけ。

（気楽に「ハンコを捺してもらえばいい」なんて考えてたけど）
「捺してくれるかなあ、ハンコ」

あたしが怖じ氣づいて呟いたら、すでに無表情の仮面をつけなおすていたロディナは。

「頼んでみるしかないわ」

そう答えると、先に歩み出て屋敷の扉に手をかけた。

（「ういと、頼りになるなあロディナ）

「この屋敷を見ても全然驚いてなかつたみたいだけど、やつぱお嬢さまなのかな？」

その後ろ姿にすがりつくようにしながら、どうでもいいことを考えるあたしの目に、複雑な模様を織りこんだ赤い絨毯と輝くシャンデリアがまぶしい、外觀から想像したとおりの玄関ホールが飛びこんでくる。中央には一階に続く幅の広い階段があつて、その手すりに施された彫刻がまた、めまいがするほど細かくすばらしいものだつた。

「うわあ……」

キヨロキヨロとあたりを見まわすばかりで、足を動かせないあたしをおいて、ロディナは堂々と踏み入つていく。

そのまま、階段に足をかけた。

「ちょ、ちょっとロディナ！？」勝手にあがつていつていいの？

あたしが慌てて声をかけると、ロディナは優雅な動作で振り返り。

「あそこに、『ハン口を』希望のかたは一階正面の部屋へどうぞ』つて書いてあるから」

すつと、上方を指差す。

「え？」

その指先を追つて視線を動かすと、シャンデリアからのびている銀色の鎖の先に、確かにそういう内容の紙がぶらさがつていた。

（シャンデリアの大きさにびっくりして、視界に入つてなかつたわ……）

その美しさもさることながら、「落ちたらどうするんだろ？」とか、「どうやって支えているんだろ？」とか、そういうことが気になつて仕方がなかつたのだつた。

あたしが納得したのを確認したロディナは、前を向き再び階段をのぼりはじめる。

「あ、待つてよロディナっ」

入つていくのも恐れ多いが、おいていかれても困るあたしが心を固めてあとを追つた。

そのとき、走ったのがいけなかつた。

「さやあつー？」

毛の長い絨毯にまつたく慣れていないせいで、豪快に転んでしまつたんだ。

突然の悲鳴にまた振り返つたロディナは、潰されたヒキガエルのようになつてゐるあたしを皿にして、思い切り眉をひそめた。

「……あなた、転ぶならせめて階段の上にしてつけつだいよ」

「つべ、だつて〜つ」

「結構がさつで大雑把なのに、なぜあんなに古代文字をきれいに書けるのか、理解できないわ」

続けて悪態をつきながらも、せつかくのまつた階段をおりてきてくれるロディナ。

そう、あたしは古代文字をきれいに書くのが得意なんだ。それは多くの単語を知つてゐる以外に、唯一褒められる部分だつた。

「正確に書かないと、バートチャ（ママ）に手を叩かれたのよ」

痛みをこらえて、あたしはやつと上半身だけ起こしながら答える。結局階段のいちばん下まで戻ってきたロディナは、手を差し伸べてあたしが立ちあがるのを手伝つてくれた。

「ありがと」

素直にお礼を口にするとい、すいと視線を外したロディナはかわりに口を動かす。

「『バートチャ』つて、お母さんのこと?」

「そう、ちなみにお父さんは『ギヒシー』よ」

答えた瞬間、ふたりのこと思い出して切なくなつた。

同時に、

(やういえばロディナ、寝言であたしの両親の名前呼んでたっけ？)
そのことを思い出して、訊いてみようかと思つたんだけど。

「……わたしも、呼んでみたかったな……」

「え？」「

ロディナがあまりにもさみしそうに咳いたから、訊き返すので精一杯だつた。

するとロディナはなぜか、怒つたような口調で。

「なんでもないわ！ ほら、早く行くわよ」

「わっ、そんなに引つぱらないでよロディナ！」

あたしを引きずるよつにして、再び階段をのぼりはじめる。

(どうしたのかな？)

考えながら、必死についでいきながらも、あたしの田まついつい階段の側面にまで丁寧に施された模様に向いてしまつ。おかげでそのあとも、何度も転びそうになつた。ロディナが手をつかんでいてくれたのは、ある意味正解だつたかもしれない。

長い階段をのぼりおえると、前に見えたのはこれまた豪勢な装飾に彩られた扉だつた。

さすがのロディナも気圧されたのか、ノックをしようか迷う仕草をしていると。

「入りなさい」

内側から声が届いた。まるで十日くらい休まずに喋りつづけたような、ずいぶんとしやがれた声だつた。

あたしとロディナは、自然と目をあわせる。本当に自分たちに言われたのかどうか、確証がないため簡単にはひらけなかつたんだ。するとまた。

「入りなさい」と囁つておろづがつ

少し怒氣を含んだような声が飛んできた。

「はっ、はい！ 入りますっ！…」

とつさに答えたのはあたしだ。

ロディナはそんなあたしに一度頷くと、扉にかけていた手をゆつ

くつと押し出す。

が、扉はなかなか動かなかつた。

「ローデイナ？」

「この扉、すこしく重いわ」

力をこめているからだろう、顔を歪ませて答えたローデイナに、あたしも慌てて。

「て、手伝う！」

ふたりがかりでなんとか押しあげた。

（これ、いくらなんでも装飾つけすぎじゃない！？）

相手が魔力士でなかつたら、思い切り怒鳴つていたところだ。せめて目でアピールしようと、あたしはきつく部屋のなかを睨みつけたけど、そこはひどくがらんとしていて、最奥に備えつけられた簡素な椅子にひとりの老婆が座つているだけだった。

思い切り拍子抜けしたあたしの横を、ローデイナがすいと通りすぎていく。

（そうだ、無駄に脱力してゐる場合じゃない！）

あたしも背筋を伸ばして、ローデイナのあとに続いた。

最奥の老婆は、部屋の外にまで届く声を発せられたのが信じられないほどやせ細つていて、ひどく小さな姿をしていた。骨に皮をかぶせただけ、と形容しても間違いではないその姿は、異様で、恐ろしくさえ見えた。

（この人が、エイラ＝ポット……？）

『国民のための細かな魔符にハンドを捺してゐる人物』って言うから、もっとやさしそうな人だと思っていたのに。今日の前にいる老婆は、結いあげている髪のせいだけではないつりあがつた目と、耳もとまで届きそうなほど大きな口が印象的で、どちらかと言えば物語によく出てくる『意地悪おばあさん』みたいだつた。服装だって屋敷ほど立派なものでなく、それこそそのへんにいる普通のおばあさんが着るような、地味な色のシャツにズボンをあわせたみすぼらしい格好だつた。

若く美しかった頃の面影はもはやほんとぞぞ見られず、じりじり向けられる眼力だけがやけに鋭い。

(「、怖いよーっ）

思わずロティーナの後ろに隠れて、袖をつかんでしまったあたしを、ロティーナは一警ただけで振りほどかなかつた。それどころか、あたしの手もとから魔符を奪うと、一步前に歩み出で。

「ヒイラ＝ポットさん、ですね。」の魔符にハンコを捺していただきたくて、寄らせてもらいました

まったく怖じ氣づいた様子もなく、交渉を始める。

(ロティーナ、すこーー)

学校でも先生たちと対等に渡りあつてこむせいが、言葉によどみも戸惑いもなかつた。

そんなロティーナと隠れているあたしに、なめまわすよつた視線を這わせたヒイラさんは、やがて

「おぬしら、セルミア魔符術学校の生徒じゅね？」

(……え？ あれ？)

「ほんなどころによく来たねえ。あそこの学校で使つたりる魔符も、わしがつくりてるんじゅよー。」

厳格で怖そうな雰囲気を一瞬にして思い切り壊したヒイラさんは、糸のように細めた目で血漫げに胸を張つたのだった。

(え、えーと……)

あたしはその流れにつけていけない。

しかしロティーナは相変わらずなようだ。

「そうですか、いつもお世話になつてこます」

ペコリとそう頭をさげてから。

「捺していただきたいのはこの魔符です」

思い切り話を戻して、魔符を手渡すために歩き出した。

袖をつかんでいたあたしはとつそに手を離し、ロティーナの後ろ姿を見守る。

と。

(あ……ロディーナの脚、震える？)

少し離れて初めて、気づいた。

屋敷を見たときも、入ったときも、ハイラさんを見たときも、近づいている今も。常に平氣であるように見せていたロディーナ。でもそれは、決して怖くないからではないのだと。

(強がりなロディーナ)

たとえ具合が悪くとも、平氣だと呟いた。

その言葉に、態度に、騙されとはいえないのは。

(今いちばん近くにいる、あたしなんだ……！)

気がついたあたしは数歩進み出で、ロディーナの手もとから魔符を奪い返した。

「えつ！？」

驚きの声をあげたロディーナの横をそのまま通りすぎ、ハイラさんの正面へ。

「お願ひしますつーー！」

挾むよつこ頭をさげながら、あたしは一枚の魔符を差し出した。

「ほつほつほ」

不敵に笑いながら、それを受け取ってくれたハイラさん。すぐに片目だけひらいて魔符に目を通すと、あたしたちを順番に比べるように見やつて。

「ふむ、面白い組みあわせじゃのう」

魔符に対することなのか、人に対することなのか、判断に迷うことを呟いた。

それから。

「ガイトのところへ行くのか？ 魔符が一枚なのは、行きと帰り？」
まだ近くにいるあたしに顔を寄せて訊いてきたから、逃げ出したい気持ちをぐつとこらえて答える。

「そ、そりです。国王陛下が探しているところ、『いちばん強い魔符術』をつくるために！」

魔符は一度使うと消えてしまうから、一枚必要だった。また、向

かう方向が違うところもある。

エイラさんは一度軽く頷いたあと。

「じゃが、その発表大会の会場は城じやうへ、おぬしら、城と同じ中央にある学校から来たならわかつちよると思つが、ガイツのところから城までは六マスもあるじやうへ。『減力の法則』がかなり影響するじやうへ、思つたほど魔力は得られんはずじや。ついでにわしのハンゴじやうへ移動は三マスがぎりぎりじやから

「わかつてします。もともと一枚はここからガイツ＝チャードのところへ、もう一枚は、ここに戻つてきてから学校まで帰るために、使うつもりでした」

続けたのは、あたしの隣までやつてきていたロティナだった。

（え？ え？）

一枚目を、ガイツさんとのところからここまで飛んでくるために使うつもりだったあたしには、ロティナの言つてこむことがよくわからぬ。

「えつと……そもそも『減力の法則』ってなんだっけ？」

あたしも聞いたことはあつたんだ。ただそれが関係するのは、魔符を使う側であつて織る側ではないから、あまりきちんととは覚えていなかつた。それは、あたしの将来の夢が『魔符術士』じゃなくて『魔符職人』になることだつたからなんだけど。今回の『いちばん強い魔符術』をつくるという試みには魔符術を使用する部分も含まれているから、それも重要な問題になつてしまつらしこ。

「ほつほつほ。さすがに『成績が良いほつのルーン』はよくわかつておるよつじやの」

「…」

血口紹介するのを忘れていたにも関わらず、エイラさんの口から発せられたロティナのあだ名。さすがのロティナも驚きを顔に表すと、「はつ」と息を呑んで。

「……そういえば、先ほど学校で使つてはいる魔符もここでつくつていふと、言つていましたものね」

「あ、そっか

(だから情報も入つてくるんだ)

からくりがわかつて、少し落ちついた。

普段魔力士との接点なんてまるでない生活をしていくだけに、魔力士が本当はどんな力を持つていいのか、あたしは理解していなかつた。エイラさんのちょっととした言葉や仕草に動搖してしまっては、そのせいもあるんだ。

同じように息を吐いたあたしたちを見やつて、エイラさんはニヤリと笑う。

「いいじゃらう、ハンドを捺してやる。ただし! ロディナ=ルーンはリューアイ=ルーンに、『減力の法則』の説明をきちんととする」とじや

「……わかりました

「クリと頷いたロディナに、今度は満足そうに微笑んだエイラさん。それから左手を掲げて、親指の先を器用にくるくるとまわすと、指先の下からなんとハンドが現れる。

(うわあ、魔力士のハンドって、指に直接ついてたんだ!?)
これまでハンドが捺される瞬間を見たことがなかつたあたしは、その不思議な光景に強く惹きつけられた。横を見るとロディナも、興味深そうにエイラさんの動作を見つめている。

エイラさんが右手に持つた魔符に左手のハンドを押しつけると、魔符は一瞬青白い光に包まれた。その光は、あたしたちがこの屋敷に入るとき門のところで見た色と同じで、あたしはそれがエイラさんの魔力の色であるのだと理解する。

同じ動作を二度くり返し、エイラさんの手もとに完成した一枚の魔符が。

「ほれ

左右に一枚ずつ持つ、それぞれ差し出したエイラさんと、あたしたちは戸惑いながらもゆっくりと手を伸ばした。

「ありがとうございます!」

「『』協力、感謝します」

そしてそれぞれに礼を述べると、ローティナは歯ぐきを見せるような笑いを浮かべて。

「ほんに、おぬしらは正反対、じゃの。ま、そのまづが仲良くやれることもある『』。せいぜい頑張る『』。わしはほしゃ、わくわくして疲れた、さつさと帰りな」

「はいっ、失礼しますー！」

「さようなら」

最後までそろわない返事をして、あたしたちは逃げるよつにそのまま部屋をあとにした。そしてあけるときも重かった扉を、臭いものにふたをするかの『』とく懸命に閉じようとする。

やつと完全に扉が閉まつた頃には、ふたりして肩で息をしていた。

「はつ……はあ……なんか、すぐ疲れた……」

あたしがぐつたりと苦げるヒ、ローティナも珍しく、

「同感」

と呟き、扉を背にして倒れるよつに座つこむ。

「さすが魔力士、というしかないわね。あの妙な圧力だけでもすこいのに、なに？あのわけのわからない雰囲気は」

「ぶつ」

あまりに容赦のないローティナの表現に、あたしも隣に座りこみながら笑つてしまつた。

「怖いんだが明るいんだがやさしんだが、確かにわかりづらかつたね。『』と『』がたまに『ちょ』になつてゐるところは、なんかかわいかつたけど」

「聞こえちよるぞー、さつさと行かんかつ……」

「さやあつ」

扉の向こつから飛んできた怒声に、あたしは驚いて飛びあがる。

まるでこの扉自体が震えたかのよつな、やはり圧力のある声だった。

「こじや休んでられないみたい」

肩をすくませてから、まだ座つたままのローティナに手を差し出す。

「行こ?」

ロディナは数秒その手を見つめたあと、なぜかあたしの顔をもつ一度見てきて。

「つかもうとしたら、引っ越しめたりしない?」「えー? ジノラッシュじゃないんだから、そんな意地悪しないよ」

「そう」

安心したようにひとつ息を吐き、それからやつとロディナはあたしの手を取った。

(ロディナ、なんか嫌な思い出でもあるのかなあ)

考えながらもぐいと腕を引いて、ロディナが立ちあがるのを手伝う。それでもなんとなく起き出したいくこのは、ロディナがあたしに対してまだ完全に打ち解けているわけじゃないのだと、はつきりと感じているからだった。

立ちあがつたあとやつと手を離したロディナは。

「落ちないでね、階段から」

ひとつ釘を刺したあと、先におりていぐ。

(多分心配してくれての言葉だつていうの、わかるんだけど)

できることなら、あたしはもつと仲良くなりたかった。

「平気よっ、あたしは手すりを滑っちゃうから!」

その背中に投げて、階段の端にある手すりに飛び乗る。やたらと細かい彫りものがあるせいであまりスピードは出なかつたけど、普通に階段をおりているロディナよりは早く下に着き、ロディナを下から見あげる形になる。

「ねえロディナ、『減力の法則』のこと、教えてよ」

「ああ そうだったわね」

それはエイラさんがハンコを捺す条件にも出していた。

応えたロディナは階段の途中で足をとめると。

「ちょうどいいから、ここで説明するわ」

まっすぐ下にいるあたしを見おろす。

「いい? わたしがいるこの六段目をガイト=チャードの屋敷があ

るマスとして、あなたがいるこちばん下をお城や学校のあるマスとするわ

(あ、それなら確かにわかりやすいかも)

あたしはおとなしく頷いた。

「『減力の法則』といふのは、ハンコを捺した魔力士から一マス離れるごとに、魔符に届く魔力の強さつまり魔力値が減っていくことを言つて。魔符がわたしと同じ段にいるひばり、最高に強い状態を保てるけれど、この段から離れていくに従つて力は弱まっていく

「えつと……それじゃあガイアさんにハンコを捺しても、ひばりでも、お城までの距離ではあまり強い魔力を期待できなーってこと? あ

自分でさう口にしてから、ハイラさんと似たようなことを言つて

いたのを思い出した。

(さつのはこいつの意味だつたんだ……)

「当然同じことはハイラ=ポットのハンコにも言える。彼女はひばり、『自分の力では三マスが限界だ』と言つていたでしょ? 」「うそ

」「うそ

ロディイナは三段分だけおりてみると、再び足をとめた。

「それはつまり、彼女がいるこの同じマスからでは三マス分飛べるけれど、他のマスからではそれほど飛べないと言つこと。まして限界の三マス先からであれば

」「

今度は今までおりてきて、さらに一歩だけ、先へ進んだ。

「きつとこのくらいしか飛べないはずよ。そんな状態で使うのはもつたといないじやない?」

「そつか! だからフルパワーで使えるこのマスまで戻ってきてから、学校までの三マスを戻るうつてことだつたのね

丁寧に説明してもらつたおかげで、あたしにもやつと理解できた。(あたしが『減力の法則』を覚えてなかつたのつて、もしかして理解を諦めてたからかなあ)

ふと、そんなことを思つ。

「日常的に使われている火や水の魔符は、魔力値が『一』に設定されているみたいだから増えようも減りようもないのだけどね。『いちばん強い魔符術』を田指すなら、そこは考えなければいけない問題よ」

「！ もしかして、最初にロディナが『気になる』ことがある』って言つてたのつて、このことだつた！？」

思い出して声をあげたら、外へ向かつて歩き出していたロディナは足をとめ。

「忘れるつて、約束だつたでしょ？」「

「そ、そうだけど、ロディナが最初からそのこと考えてたんだと思つたら、感心しちゃつて……怒つた？」

振り返らないで告げたから、あたしは心配になつて問い合わせた。

「別に、怒りはしないけれど」

返すロディナの声は、やはりどこかつづけんどん。

「ロディナっ」

前にもわりこんで、顔色を見てみたら

（え……？）

ロディナは確かに怒つてはいなかつた。

ただ顔を赤らめ、自分の足もとを見ていた。

（照れて、るの……？）

あまりにも意外な状況に動けないでいると、当のロディナは必死にあたしと目をあわせてきて。

「わ、悪いけど、あなたに褒められると、ビックムズガゆいのよ。だからあんまり褒めないでけようだい。むしろけなして」とんでもないことを言い出したのだった。

エイラさんからハンドを捺してもうつた一枚の魔符の「つか、あたしが受け取ったほうの魔符を使用し、あたしたちはガイト＝チャードのいる三マス先まで飛んだ。

飛んだといつよりも、正確には運んでもうつたんだけ。

「ああ怖かった……良かつた」、途中で落ちなくて」

やつと地面におりることができ、あたしは心から呟く。

あたしたちが相談して織つた魔符の内容は、『コントウウエオウイザツキヤシヤバスマリマバー（鳥よ、その輝ける翼で西へ三マス導け）』。それを口にしたとたん、魔力でつくられたまつ白に輝く鳥があたしたちを足（爪？）で器用につかまえ、そのまま飛んできたのだった。

「てつくり背に乗せてくれるのかと思つたわよね」

最初に案を出したロティナにも予想外なことであったのか、そう口にしたあと。

「まあ、ちゃんと田的の近くには来られたから、良かつたけれど

「あ、ほんと？」

続けたロティナの言葉に、あたしはキョロリとあたりを見まわした。

左手に隣のマスとの境界が見えるほど、マスの端のほうにやつてきたらしい。周囲にはぼつぼつと古い民家が建つていて、あとは雑草が伸び放題の更地ばかり。さらに西の奥には小さな森のようなものが見え、その一部に尖った屋根のてつぺんが顔を覗かせていた。

（あのちゅうじだけ見えてるのが、ガイト＝チャードのお屋敷なのかな）

あたしは例のマップを取り出して、位置確認をしようとしたのだけど、そもそも今自分がいる位置もわからなかつた。

「ねえローティナ、今あたしたちがこるのって、ソのマス内のどおりにあります？」

ローティナならわかるだろ？とかと、マップをローティナのほうに向かって訊いてみる。

案の定ローティナはあいつ、「ソリューション」とマスの中心あたりを指差した。

ついでに、

「あなたマップを持っていたから、てっきりわかつてこると思つていたわ」

半分呆れたような言葉まで。

「飛んでいるあいだどこを通りてきたのか、見ていいなかつたの？」

「怖くて見られなかつたのよ！」

（むしろ、ローティナつたらよくずっと田をあけていらされたわね！）

あたしにはそのほうが不思議だつた。これもローティナの強がりの一種であるな（ほり）が、本気で尊敬してもいいと思つてしまつぱい。

「自分が高所恐怖症だつたなんて、今まで知らなかつたんだから

……

「じゃあ今から、帰りの覚悟もしておくことね」

そう、ソイラのところから学校に帰るときも、同じ魔符を使う予定なのだつた。

「もうつ、ローティナのこじわるー！」

「ふふ。さあ、さつひと用事をすませてしまいましょ」

ローティナはなぜか機嫌が良じよ（う）で、軽い足取りで森のほうへと足を向ける。

（ローティナつてもしかして、高いところ好きなのかなあ）

あたしと逆な部分が多いみたいだから、そうなのかもしれない。

ひとり肩をすくめてから、あたしは駆け足でローティナを追つていった。

「おまえたち、なにをしにきた？ ガイトさんは国王陛下直属の魔力士であるぞ。小娘に捺してやるようなハン口は、いいこはない」「帰れ帰れ！ 警備の邪魔だつ」

エイラさんの屋敷同様、ガイトさんの屋敷にも見あげきれないほど立派な格子門があり、そしてふたりの兵士が立っていた。ひとつだけ違うのは、その兵士たちの態度だ。

彼らのあんまりな言い草に、あたしは声を荒げて抗議する。

「話も聞かないで『帰れ』だなんて、職務怠慢でしょ！？」

「バカなことを言つたな、おまえたちみたいなのを追い返すのが我々の仕事だ！」

「やうだやうだ！ それに、どうせくだらない用事なんだろ？」「…

「あら、国王陛下の望む魔符をつくるとする」とだが、くだらない」とじだつて言つた？

「…」

国王が『いちばん強い魔符術』を探していることは、さすがに知つてゐるのだろう。ふたりの兵士は顔を見あわせ、それから声をそろえて笑つた。

「ふつ、それでここに来たつていうのか？ だとしたらとんだ見当違ひだな！」

「確かにガイトさんはこの国で最も魔力の強いおかだが、その力はこのマス周辺で魔符を使つてこそ発揮されるもの。城ほど離れた場所で強さを競うのは愚か者のことだ」

「…」

あたしはぎりりと下唇を噛む。

(やつぱりそうなの？)

ロティナが心配し、エイラさんが釘をしていた可能性。せつかくガイトさんにハン口をもらつても、『減力の法則』によつて魔力は

失われ、他の魔力士のハンコが捺された魔符に負けてしまつかもしれない。

「見てわかるだろ？　おまえたち以外に誰もここに来る者がいないのが、いい証拠だ」

「いや待て、普通の国民ならあたりまえに来ないだろ？　ガイトさまの手を煩わせることが、国の損に繋がることをちゃんと理解しているからな」

「違いない」

再び大袈裟に笑うふたりに、あたしも負けじと声を張りあげる。

「普通じゃなくて愚かったわね！」

（どうせ卒業もできない落ちこぼれよおお～つ）

後半を心のなかにどめたのは、あたしなりの精一杯の強がりだつた。

すいと、それまでずっと後ろで会話を聞いていたロディナが、前へと進み出る。

（－ ロディナ……）

持ち前の賢さで、兵士たちをやりこめてくれるだろ？
あたしたちが決して愚か者ではないことを、示してくれるだろ？

か？

期待するあたしの視線の先で、兵士たちも笑いをやめた。

「な、なんだ？　おまえ」

「やる気かっ！？」

「ひとつ、訊きたいことがあるのですが」

凛と、落ちついた声音で語りかけるロディナ。

「単純計算で考えるなら、お城で最も力を發揮できるハンコの持ち主は、ナルス＝チュリオット。そういうことでいいのかしら？」
(ナルス？　つて、どのあたりにいる人だっけ……)

急いでマップを取り出すと、名前から位置を確認する。

（あつ、お城から北に二マスのところにいる魔力士ね）

魔力の強さで言えば二番田っぽいけど、お城までの距離を考えれ

ばナルスさんのハン口でつくりたほうが強いことこのことなのか。

納得したあたしが兵士たちの様子を窺うと、自信に満ちあふれたロディナの問いかけが意外だったのか、釈然としない面持ちで頭を搔いていた。

「なんだ、ちゃんとわかつてんんじゃないか。俺たちをからかつているのか？」

「今からもう少しに行けば充分間にあうだろ。さあ、行つた行つた！」それでも一言田には「帰れ」「行け」が出てきて、あたしの感情を刺激する。

「あんたたち、ちゃんと余話する気あるの？？」

「会話？ 下々の者となにを話すことがある？ 我々はそれほど暇ではないのだ」

「立つてたるだけのくせに、なに言つてゐるのよ？」

「おまえこそ、やつやつてケンカ売つていていいのか？ 賢そうな連れはもう歩き出しているぞ」

「えつ！？」

言われてとつそに振り返ると、見えたのはロディナの後ろ姿だった。来た道を戻ろうとしているんだ。

（なんでつ？ 一対一なら負けないとthoughtたのに）

「待つてロディナ！ セつかく来たんだから、ハン口もひつていこうよー」

まだ帰るつもりのなかつたあたしがその場から叫ぶと、足をとめたロディナは顔だけ振り返り。

「これだけバカにされたら、もうつ氣になれないわ

顔にかかる長い黒髪を、すつと耳にかける仕草をして、再び歩き出してしまつた。

（どこか諦めの早いロディナ）

感情を隠すのも。

無理にあがかないのも。

そのプライドの高さから来ているんだらうか ？

あたしには、うまく判断できない。

うまく理解も、できなかつた。

「バカにされたら、それ以上の結果出して逆に笑つてやればいいのよ！」

こぶしを握りしめて、ロティナの背中に想いを投げつける。

「それに、魔力値だけが魔符の強さを決めるわけじゃないって、教えてくれたのはロティナでしょっ？」

仲直り（？）してからエイラさんの屋敷へ着くまでの二日間、あしたちが織つた三枚の魔符のうち最後の一枚は、ふたりで散々意見を出しあつたなかで生まれた、これまでに紡がれた例のない命令だつた。だからこそあたしは自信を持っていたし、それに国一といわれるハンコを捺してほしいと思っていた。その結果たとえそれがいちばんになれなくても、あたしにとつては大事な証しだつたんだ。共同作業の集大成として。

両親が戻ってきたときの、笑い話として。

「絶えっ対もらつてやるんだから……！」

もうロティナの反応は無視して、あたしはぐるり身体を反転させると、そのまま格子門へと向かつて突撃を開始した。

「お、おいつ？ おまえなにをする気だ！」

見張つている兵士たちも無視して、堂々と格子門によじのぼりはじめる。自分が高所恐怖症であるとわかつてしまつた以上、怖い気持ちがないわけではなかつたけど、あたしの手足はとまらなかつた。

「バカ！ おりろつ。のぼつたところでどうせなかには入れないぞ！？」

「そんなのわかつてるよ……！」

エイラさんの屋敷でも、格子門は不思議な力で閉じられているようだつた。だからこそ出入りに専用の魔符が必要だつたんだらう。それにそもそも、あたしはなかに入ろうとしたのではない。

「ガイト＝チャード！ 聞こえてるなら出てきなさいよ……！」

あたしをおろそかに足を掴んでくる兵士を蹴り飛ばしながら、続

ける。

「ちょっとハン口捺してほしいうて言つてゐだけじゃないつ、簡単なことでしょ！？…………つてこら、スカート引つぱらひないでよ、Hツチツツ」

「いいからおりるー、あまり門に触れないと」

「！きやああつー？」

兵士が最後まで言いおわらないうち、あたしは手を離される見えなくなつた。一瞬、身体のなかを鋭いなにかが駆け抜けたんだ。それは痛みを伴い、あたしの握力を奪つた。

（落ちる……つ）

あたしはさらなる痛みを覚悟したけど、身体が地面まで届く前に素早く手を伸ばしてくれた兵士たちに受けとめられる。

「リューイ＝ルーン！」

この騒ぎにはさすがに黙つていられなかつたのが、まだ兵士の腕のなかにいるあたしのもとに、ロティナが駆けつけてきた。

あたしはその手を借りて、ゆっくりと地面に足をつけ立つてみると、まだ少し余韻が残つているようで、ふらりと視界が揺れた。

「大丈夫？ なにをしているのよ、あなたつたら」

きつい口調はいつものこと、しかし今はそのなかにちゃんとあたしを案じている気持ちが見えるような気がして、あたしの体温が少しあがる。

「い、ごめんなさい、呼んだら出でてくれるかと思つて」

「呼ばれなくとも、この騒ぎでは氣になつて仕方がないだろ？（えつ？）

不意に割りこんできた声は、間違いなく格子門のほうから聞こえてきた。

急いで視線をそちらに向けると、格子門を挟んだ向いの側に人影

が
「……つ」

その姿を視界にとらえた瞬間、あたしは自分の前に突然絵画が出

現したような、不思議な感覚に襲われた。

（なに、これ……）

なんて現実味のない人なの？

まるですべて計算されたつくりもののような、あまりにもきれいすぎる違和感。自然界に必ずといっていいほど存在する規則を外れた要素が、なにひとつ見あたらないんだ。

顔を形づくるパーティのひとつとつてみても、誰もが「美しい」と口にできるような、それでいて目を閉じるとすぐに忘れてしまえそうな、決して描くことのできない存在が、そこにはあった。

（これが、ガイト＝チャーデ？）

魔力士はみんな並外れた美しさを持っていると言われているけど、いちばん力を持つ魔力士は、いちばん美しくもあるようだった。

かなしいことに、ガイトさんは男だつたけど。

「お、お、男のくせにそんなにきれいだなんて反則よお……あたしを傷つけたお詫びに、今すぐこの魔符にハン！」捺しなきよおおおおつ！

半分悲鳴のような声音で叫んだら、同じようにガイトさんに見入つていたローディナも我に返り。

「ちょっとリューイ＝ルーン、さすがにそれは無理があると思うわ」「え、そう？　じゃあ……捺してくれなかつたら、この門の前で焚き火しちゃうんだから！」

「おまえたち、ガイトさまの前だぞ？　もつとかしこまらんか！」「しかも言つていることの意味がわからないぞ？」

「うるさい！　乙女の嘆きがオジサンにわかるもんですか？」

「オジサン！？　俺はまだ二十代だぞ！」

「こつちは三十代だ！」

「一体なんの話をしているのよ、あなたたち」

「何歳からオジサンなのは大事な問題だが、同様におまえたちが本当に乙女なのかも重大な問題だ！」

「そうだぞ、大体にして乙女はもつとおしとやかなものだろ？？」

一

ともすれば永遠と続きそうだったが、どうでもいい話題を、ガイドさんの鋭い声がとめた。

「普段静かなどこなにはひとりでいる私にはいい加減してくれ」

「……そりゃ、鑑音ですかーーー!?

その整いすぎた顔からは想像できない口の悪さは、兵二がたどりい勝負だつた。

()の上に立て、下ありつて感じね)

あたしは改めてガイトさん ガイトを睨み一歩

身体全体を一枚の大きな布で覆うよくな格好をしているため、体格はよくわからなかつたけど、高さと幅から見るに、取つ組みあいでならなんとか勝てそうな気がした。

そもそもきみたちはなにが目的なのだ?」

そんなあたしの視線をあざれりと涙に流し、涙しい声音で問いかけてきたガイトの顔は、なぜかあたしではなくロディナのほうに向いていた。

「わたくしたちは国王陛下が望んでいる『いちばん強い魔符術』をつくるために」

くるために

「違う。なんのためにその発表大会で優勝しようとしているのかを訊いているのだ。きみたちにはたいした野望があるようには見えないからな」

1

遮つて続けたガイトの問には、明らかにロディナには答えにくい

ものだつた。

（ダメな自分を肯定しないといけないものね）

察したあたしは、素早くふたりの視界のあしたに書りこんで答える。

「魔符術学校を卒業するためよ！」超個人的な理由で悪かつたわね

「

先手を打つて自虐に走つたら、ガイトは「ふふん」と鼻で笑い。
「まだ『悪い』とは言つていない。 間違いなく、言つはめこは
なつただろうがな」

（やつぱり腹立つな）

チラリとロディナの様子を盗み見てみたら、表情はえていなか
つたものの手を強く握りこんでいた。だいぶ我慢しているんだろう。
（あたしと違つて、バカにされることに慣れていないみたいだから、
きついだろうな）

さつきだつて兵士たちにバカにされたくらいで帰ろうとしていた
んだ。ロディナにとつては相当屈辱的なことだらう。

ロディナのためを思つなり、じいじで引きさがつたほうがいいのか
もしれない。

あたしは迷いはじめていた。

しかしそんなときに限つて。

「ふむ、だが待てよ。卒業もできない落ちこぼれが、一体どんな魔
符を書いて持つてきたのか、興味がわいてきたぞ。国一を田指す魔
符だ、さぞかしすごいものなのだらうな？」

ガイトが意外なことを言つてくる。どこか楽しそうに、田を細め
ながら。

「どれ、見るだけなら見てやるつ。よこせ」

（こ、こいつ、絶対さらばにバカにするつもりで見る氣だ！）
表情でわかつた。周りの兵士たちだつてニヤつてこる。
渡すべきか、渡さずべきか。

迷うあたしは、魔符を抱きしめるよつに胸もとにてた。

（あつ）

それを横からじりつたロディナが、格子門の隙間からガイトに差
し出してしまつ。

「ロディナ……」

名を呼ぶと、一瞬だけこちらを振り返つたロディナは。

「『』の魔符に自信があるのは、わたしも同じだから」

見られても恥ずかしくないと、強い言葉で言い放つてくれた。すぐ目の前で告げられたガイトは、唇の端でゆらり笑つたあと、視線を受け取つた魔符へとおとしていく。まるで細かい字を読むときのように、限界まで細められていた目が、やがて 大きくひらいた。

「ほつ……なるほど、二重連動詞を使用して威力強化をはかつてゐるし、発想も悪くない。少なくとも私は見たことがない命令だな。しかし、『落雷』という単語は魔符術学校で教える範囲には出でこないと思つたが？」

その魔符の出来がよほど意外だつたのか、ガイトの声音から毒が消えていた。

それに答えたのは、ロディナだ。

「だつてリューイ＝ルーンは、あのルーン夫妻の娘ですもの」

息を呑んだのはガイトだけではない。まだそばにいる兵士たちふたりも、驚きで飛びあがつていた。

実はあたし自身も。

（やつぱりロディナ、あたしの両親だつて知つてたんだ）

あのときの寝言も、きっと偶然ではなかつただろう。

確かにあたしがその単語を知つていたのは両親のおかげであり、その単語を発想したのも両親との思い出がきっかけだつた。

でもそれだけでは、当然『いちばん強い魔符術』なんてつくれない。

「あ、あたしだけの力じやないよ！ ロディナがそれを文章に組みこんでくれなかつたら、あたしは定型文しか織れないんだから」「リューイ＝ルーン……」

複雑な表情で見つめあつあたしたちを、ガイトも交互に見つめて。あたしたちのあいだにある理由と、感情を、おそらくいくらか読み取つたんだろう。

「ふむ、いいだろ？」「

「捺してくれるのー？」「

肯定的な頷きに、すぐ食いついた。

「もつと面白い魔符が、織れたらな」「

「えーっ？」「

条件をひとつ押しつけてきた。

「できたら呼べ。もとも、時間をかけすぎると城まで戻る時間が

なくなるだろ？がな」「

そこまで言いおえると、ガイトはひらりと布の裾をひるがえし、奥の屋敷へと歩き出す。

「ちよ、待ちなさいよ！ 面白い魔符つてビックリことよ？ あたしたちは『いちばん強い魔符術』をつくりたいんだけど、ビックリ！？」

格子門にかじりついて叫ぶと、ガイトは一度足をとめる。

「挑戦するもしないも、きみたちの勝手だ。ナルスのところに行きたければいつでも行けばいい」

振り返らずにそれだけ答えると、長い銀髪を優雅に揺らして遠ざかっていった。引きずつっている布の一部が、くねくねと手を振つているようにも見えた。

(一体どうじうつもりなのかしら？)

また身体に衝撃が走ることを恐れて、格子門から手を離したあたしは考える。

(あの魔符を見て、少しは認めてくれたみたいだつたけど……もしかして、あたしたちならもつとやれると思った！？)

だつたらどんなにいいことか。

自分で考えたことを、すぐに否定した。

あたしの腕を、ローディナが不意に引っぱってきて、格子門から少し離れた位置まで連れられていぐ。

「なつ、なに？ どうしたの、ローディナ！？」

(まさか本当に帰るつもつ！？)

「作戦会議よ」

焦るあたしとは対照的に、こつもどおりの落ちついた聲音でローティナは答えた。それからめいっぱいのため息を、肩で吐き出して。「正直言つて、あなたの強引さには呆れているわ。あなたにはプライドがないのね」

その言いかたには、さすがのあたしも眉を動かす。

「ないわけじゃないけど……自分のプライドよりもずっと大切なものがあるから。どちらかを犠牲にしないといけないのなら、あたしは自分のプライドを犠牲にする！」

次に眉を寄せたのはローティナだった。

「……バカにされても平気なの？」

「平気じゃない！ でも前に進むためなら、我慢できるよ」

「理解できない」

あたしの答えがローティナにとつてまっすぐすぎるからか、ローティナは首を傾げ肩をすくめた。視線を外し、地面を見やる。

まるでエイラさんの屋敷のなかにいたときのように、重苦しい空気があたしたちを包みこんだ、そんなとき

「はいはい、三日目にして再びケンカ勃発！？ ふたりのルーンに独占取材だつ！」

そばの木陰から飛び出してきたのは、またしても双眼鏡を手にしたジノラットだった。

「ジノラット！？ あんた、まだついてきてたの？ そんでなに気取つてるのよ」

「立派なストーカーね」

あたしだけじゃなく、ローティナにも冷たく言い放たれて、ジノラットはすでに涙目だ。

「ち、違う、俺はだな、女ふたりで旅をするのは危険だと思つて、陰から見守つてたんだ！」

「やつぱリストーカーだわ」

「ち、ちが」

「どうせあんたも『いちばん強い魔符術』つくれりうと思つてるんじ

やないの？ それでー、かわいい彼女が欲しいとか、バカなことお願いしようとしてるんでしょ！」

「ちが、ちが……違わないよー、うわああああん！！」

久々に顔を見せたばかりだというのに、耐えきれず泣きながら逃げていくジノラット。

「一体なにをしにきたのかしら？」

その後ろ姿を呆れたように眺めて咳くローディナの横で、あたしは笑いながら、ふと昔のことを思い出していた。

（そういえば、ずっと前にもジノラットがああして逃げ帰ったことがあつたっけ）

まだあたしの両親がいた頃、家に遊びにきていたジノラットが、洗濯の手伝いをしていたあたしを水路のなかに突き落としたんだ。そして怒ったあたしが、近くにあつたアレを手にジノラットを追いかけて

「ああああっ！？」

（そうだわ、アレがあつたじゃない！）

降らせるのに雷よりも最適なものが！

あたしはひとり興奮する。

「な、なによいきなり、大声あげちゃって。びっくりさせないでよ」ジノラットの登場のおかげで、再び空氣をやわらげたローディナが、今度は動搖の声をあげた。

「ごめんごめん。でも、良い案が浮かんだんだ！ ローディナ、これを使って文章考えてみてくれない？」

めげないあたしは無理やりローディナの耳に口をあてると、ひそひそ話を始めた。

（これは大発見よー）

誰にも聞かれてはいけない。

たとえ誰も、聞こうとしている人がいなくとも

おとなしく聞い入ってくれるローディナの眉間に、徐々に深いシワが刻まれていく。

「ちょっとリューアルーン、そんなもの落として本当に効果があるの？」

「絶対痛いはずよ！しかもね、精神的ダメージも相当大きいと思うんだよ。だからガイトだつて納得すると思うわ！別に見てくれるのは一回だけなんて言ってなかつたし、試しに考えてみてよ。ね？いいでしょ？」

手をあわせて必死に頼みこむと、ローティナは「やれやれ」と呟きながらも。

「まあ、いいけどね。落雷の命令文を少しアレンジするだけができるから」

「さすが天才！ ょつ、世界ー！」

「バカなあおりはやめて」

「ハイ、スマセンデシタ……」

それからあたしたちは再び協力して、新たな魔符を一枚織りこんだ。

「ん？ なんだこの単語は。以前見たことがあるような気がするが……」

今度はロティーナが率先して門に触れ、再び姿を現したガイトイにそれを見せるが、ガイトイは首を傾げて咳いた。それから記憶の淵をさまようように手をつむり、しばらく押し黙つたあと。

「ああ、そうか。アレか。なるほどな……魔符関連で使われる」となどまたくなかったものだから、すっかり失念していた

やつと手をあけたガイトイの表情は、どこか晴れやかだった。

「ふん、いいだろ。この魔符は、それが実行される瞬間を見たいと思わせる力がある。正直これが『いちばん強い魔符術』として認められるかはわからんが、約束どおりハン口は捺してやるわ

「やつた～！」

跳びあがつて喜んだあたしは、とつさにロティーナの手をつかもうとした。それと同時に、意外にもロティーナもあたしの手を取ろうとしていたから、手のひらはきれいに重なり喜びを分かちあつことができた。

でもそれは数秒と持たず、ロティーナはすぐ我に返つてしまつて、はしゃいだことを恥ずかしく思ったのか手を引いた。

その仕草が、あたしにとつてはかわいくて面白くて仕方がなかつた。

「なにを笑つているのよ」

「ごめん。だつて嬉しいんだもの！」

本当は違う意味も含まれていたけど、ロティーナの機嫌を損ねるのもうこいつごりだから黙つておく。

「どれ、では面倒だがハン口を捺してやるか」

格子門を挟んだ向こう側で、ガイトイがゆっくりと両手を近づける。

その様子に、あたしは思わず。

「えつ、」この場でやるの？」「

口に出してしまった。

「なんだ？ 不満か？」

動作をとめたガイトが不思議そつこりちらを見やつたから、あたしは頭の後ろを搔いた。

「いやー、ハンコを捺すときは屋敷のなかに入れてもらえるのかと

……」

「入りたいのか？」

「正直に言うと、とても！」

魔力士としての力がそれほどでもないエイラさんの屋敷でも、広くて豪華で圧倒されたものだった。ならば国一の魔力士と呼ばれるガイトの屋敷であれば、もう想像もできないくらいのすてき空間が広がっているのかもしれない。

（むしろそうに違いない！）

瞳を輝かせて「入れて」と訴えていると、ロディナが横から「やめなさいよ」と腕を引いてきたけど、「」で引きさがるわけにはいかなかつた。

その様子を見ていたガイトは、ふと口もとを緩ませる。「ではこちらも正直に言うが、無理だ」

「えーっ？」

「きみたち、エイラの屋敷に行つてきたのだろう？」エイラのハンコのにおいがする。そしてそれならばわかるはずだ。エイラの屋敷の内部では、全身になにか不思議な力を感じなかつたか？」「！」

あたしたちは顔を見あわせ、頷いた。

「確かに、なんだか押しつぶされそうな圧力が……」

「エイラ＝ポットの近くでは特に感じられました」

「それは魔力のせいでね。魔力を有している私たちでも、自分の力だけで完全に抑えることは困難で、こんな布切れや屋敷を取り囲む防壁でなんとか外には出さないようにしているが、魔力士でないも

のがこの内部に入りこむと相当きつこりしこ

「あ、そつか」

エイラさんの屋敷でも結構違和感があったのに、力が何倍もある
ガイツの屋敷では、一体どうなつてしまふのか想像できなかつた。
(魔力がたくさんあるといつても、いいことだけじゃないのね)
頭が良くても悩みのあるローディナのように、それぞれ違つた想い
があるんだ。

そう納得したものの、同時に氣になる」ともあつた。

「じゃあもしかして、あんたはずつとそのなかにひとりぼっちでい
るの？ さみしくない？」

その切り返しにはさすがのガイツも予想外だつたようで、初めて
目尻をさげると。

「私を何歳だと思つている？ きみたちの倍以上長く生きているの
だぞ。ひとりにはもう慣れた」

「！」

その答えに、あたしは心をつかまれたような氣がした。

(「さみしくない」つて、否定はしないんだね)

ひとりでいることにどんなに慣れたとしても。

そこに宿る、さみしさはなくならない。

それは、両親と理由もわからず離ればなれになつてゐるあたし自
身が、よくわかつてゐることだつた。まして、魔力士は通常の人間
よりも寿命が長いというんだから、よりひとりの時間が増えること
になる。自由に動きまわることもできず、王のため國のためハンコ
を振るいつづけるんだ。

「ねえ。良かつたらあたし、たまに来てあげよつか？」

「は？」

思いつきで口にしたことだつたけど、それは意外と良い案である
気がした。

あたしは続ける。

「だつてこの兵士たちは全然騒がないからつまんないでしょ？ あ

たしがたまに来て騒いであげる！」

「……そんなことをするといつのなら、ハン口を捺してやらないぞ
「えつ？ それは困るなあ……じゃあ嫌がらせの手紙だけにしてお
くわ

「まったく口の減らない むしろ減らす予定のないあたしに、つ
いにガイトも破顔して。

「わかつたわかつた、好きにすればいい。ハン口捺してやるからさ
つさと帰つてくれ」

「言つなり、素早いスピードで左手の親指にあるハン口を取り出す
と、魔符の下のほうにポンと捺してくれた。

「『減力の法則』にも実は一種類あつてな。耐届マス数 つまり
力の届く範囲のなかで、ひとマスずつ均等に魔力が弱まる『定力法』
と、ひとマスずつ同じ比率で魔力が弱まる『定率法』だ。頭のよさ
そうなほうは理解できるだらうが、頭の悪そうなきみのために説明
しておくと、『定力法』は同じペースで力が減つていき、最終的に
必ず魔力値が一残る。日常生活に使われているような魔符は、大体
こつちだな。それとは逆に、『定率法』は前半『定力法』よりも魔
力の減りが早くなるが、その分後半に強く最終的にもある程度の魔
力値が残る。こちらは攻撃用や防御用の魔符でよく使われる減力法
だ」

「 で？」

あたしがそう訊き返したのは、内容が理解できなかつたのはもち
ろんだけど、ガイトがなぜそんな話をし出したのかもわからなかつ
たからだ。

その反応は、おそらくガイトにとつて予想どおりだつたんだろう、
唇の端で意地悪く笑つと。

「私の耐届マス数は十一マス。きみたちがこれを使う予定の城はち
よつど半分にあたる。よつてそこで使う分には、どちらの方法を選
んでも同じくらいの強さになるのだが

「 が？」

次に先を促したのはローティナ。

（でもローティナはきっと、わかつてて訊いてるよな）
あたしが予想した、その証拠に。

「もしかして、『定率法』のほうを選んだのですか？」

ローティナはどこかトゲのある聲音で続けた。

（でも、『定率法』は前半に力の減りが早いつて、さつきガイツ自身が言つてたじやないの）

それなのにあえてそちらを選んだ？

あたしもつられて、ガイツを睨んでやる。

しかしガイツは、涼しい顔でそんなあたしたちの視線を受け流し。

「きっと感謝すると思うがね」

言いながら、あろうことか手にしていた魔符を紙飛行機のようこ折り曲げ、格子門の隙間をめがけ投げ飛ばしてきたのだった。

「ちゅっ……！？」

つまく門の外に抜け出た魔符だつたけど、そのまま風に乗つてどこかへ飛んでこいつとしたところを、飛びあがつてぎりぎりでつかまえる。

「なにするのよ！ どこかに飛んでいつしかつたらもつたいないじゃないつ」

文句を言つても、せりへ。

「ついでにこれもやるつ」

とガイツは、格子門の向い側から次々に魔符を飛ばしてくる。

「わわわっ」

「こんなに！？」

右往左往しながら拾い集めるあたしたちを、あわれに思つてか兵士たちも手伝つてくれた。

全部で十枚ほどだらうか。あたしが一枚一枚広げてみると、すべて攻撃用の魔符だった。

「……あたしたち、別に誰かと戦つ予定なんてないんだけど？」

「こりないなら返してもらうが？」

「いただきます！」

一言文句を言つてみたものの、返せと言われば欲しくなる。あたしは釈然としないものを感じながらも、ロティナと五枚ずつ分けてファイルブックにしまいこんだ。

「これでやつと帰れるわ」

せいせいしたといった感じで眩いたロティナに、あたしはこいつそりと苦笑する。

（なんだかんだ言つてもロティナ、最後までつきあつてくれたし…）魔符にも最高のハンコをもらえた。屋敷に入れなかつたのは残念だつたけど、あたしは結構満足だつた。

「一度と来るなよ」

そんな声に送られながら、ガイトの屋敷をあとにする。もう木々の隙間から夕口が差しこむような時間帯だ。早めに街のほうに出て、セルミア魔符術学校と提携している宿を探さなければならぬ。

「そういえば、ジノラットはどうしたんだる」

あたしはふと、新しい魔符を発想するきっかけをくれた幼なじみのことを思い出した。

「あの人気が、わたしたちの分まで宿を予約してくれるような人ならありがたいのだけど」

「あー、ないない」

むしろ覗き見するのに最高の場所を見つけるため、躍起になつていることだらう。

（ずっとロティナを見守つてたみたいだし、もしかしたらまだそばにいるのかなあ？）

歩きながらあたりを見まわしてみたけど、小さいとはいえた森のなか、木が多くて搜しきれなかつた。

その森を抜けて広い場所に出ても、人で賑わう街までは遠い。更地帯を抜けてさらに歩いていくと、今度はとにかく茶色く盛られた土地が見えてきた。

(あら、畠だわ)

この広い土地を利用して、作物などがつくられているんだろう。更地よりはよっぽど人が住んでいる感じがするから、なんとなく安心したあたしの足取りは軽やかだった。

(このまま進んでいけば街に着くよね)

さすがにこの時間畠仕事をする人は見かけなかつたけど、かわりに鳥の声や虫の声を相手にしながら、畠と畠のあいだにつくられた細い道を歩いていた。

そんなときだつた。

(ー、人だ……)

同じ道の前方から、歩いてくるのはふたりの男。

ひとりはあごヒゲを生やした、小太りな男。もうひとりは派手なバンダナを巻いた、ヤセ男。

おそらくそのふたりが、場にあつた服装をしていたら。

おそらくそのふたりが、手に魔符を持つていなかつたら。

あたしもロディナも、そう気にはなかつたんだろう。

「ねね、ロディナ。前から歩いてくるあのふたり」

「ええ、怪しいわね」

あたしたちの制服だつてこの風景からは充分に浮いているけど、向こうの服装も相当だつた。とても畠仕事をなんてできそうもない、前が大きくあいたシャツに、引きずりそうなほど裾の長いズボン。一体どこの地方で流行つてている服装なのか、問いただしたいくらいだ。

(それに、あの魔符は　　)

日頃から魔符と接しているあたしたちにはわかる。ふたりの男が手にしている魔符は、少なくとも魔力値一のものではなかつた。魔符からあふれ出た魔力が、微かに伝わつてくるんだ。

(家事用でも遊び用でもないのに手に持つて歩くなんて、どういうつもり!?)

日常生活で使われているような魔符であれば、魔力値が一しか残

つていいから、どう使つたとしてもある程度の安全が保証される。でもそれ以外の魔符を素のまま持ち歩くことは、自殺行為に他ならない。なぜなら、魔符の発動条件のひとつである『使用者の読みあげ』は、その魔符の持ち主でなくとも有効だからだ。声の届く範囲であれば、魔力自身が命令されたと理解できる範囲であれば、誰が読みあげても発動してしまう。つまり、偶然誰かが読みあげた魔符と同じ魔符を手に持つていた場合、勝手に発動してしまうことになるのだ。

あたしやロディナが使つている音声を遮断できる特殊なファイルブックは、そういう誤発動を防ぐために開発されたものだつた。そして、同じ魔符を使うことの多い魔符術学校の生徒には、携帯が義務づけられていた。もちろん一般向けの商品だつて開発されていて、かなりの数が出まわつてゐる。

（あのふたりも、腰にそれっぽいのつけてるんだけどな）

それでもあえて、魔符を手に持つてゐる意図は？

相手はただ、場違いな服装で魔符を手にしているだけで、攻撃的な視線をくれたわけでも挑発的な言葉を投げてきたわけでもなかつた。

それでもすれ違つとき、あたしたちはやけに緊張した。人通りがまつたくないからだろ？

細い道で、一列にならねばならなかつたからだろ？

それとも、ガイドからもらつた大切な魔符を、持つていたから？ オレンジ色の光の下で、一瞬だけ影を踏まれた、その瞬間。

「さあ、その魔符をもらおうか」

低い声が聞こえた。

どちらのものかはわからなかつた。

「アオマ・イツイエネルギー！ オクリヒーフレ！（魔符術・炎よ、
清き熱で敵を滅せ！）」

「！」

直後続いた魔符術に、あたしは振り向く余裕もなくロディナの手

を引いた。そのまま、斜め前方 少し低くなつて いる煙のほうへと倒れこむ。そのまま上を鋭い炎が通りすぎていったのは、背中や頭上に感じた熱さでわかつた。

(なんのよいきなりっ！？)

「警戒していく正解だつたわね」

眩いロディナは素早く立ちあがり、ファイルブックを左手に掲げ反撃の準備をする。

「ほう？ 戰う氣か？ イマドキの魔符術学校生は威勢がいいんだな」

あたしも慌てて身体を起こすと、唇の端をあげバカにしたように笑うヒゲ男の姿が見えた。手に持つていた魔符が消えているところを見ると、さつきの魔符術はこちらの男が発動させたようだ。

歩数にして五歩分くらいか、高さは違つものごく近い距離で向かいあう。

「一応訊いてあげるけど、目的はガイト＝チャードの魔符？」

ロディナがいつもどおりすぎる冷静な声音で問いかけると、その言いがたが気に障つたのか、バンダナ男が血管を浮き立たせ叫んだ。「俺たちは何度も頼んでも断られたのに、なんでこんなガキなんかに……！」

(なるほど、そういうことね)

ガイトのハンコは、本来であれば一般人が捺してもらえるようなものではない。それは兵士たちもガイト自身も言つていたことだ。でも、その強力さゆえに欲しいと思う者はあとを立たないんだろう。やつと理解が追いついて、体勢を立てなおしたあたしは言い放つ。「いきなり攻撃してくるようなやつに、誰があげるもんですか！ あたしたちだつて、これをもううのに苦労したんだから～つ それを横から奪おうなど、論外だ。

ロディナに負けじとあたしもファイルブックを構えた。

(ー！)

そこに並んでいる、普段は所持していない攻撃用の魔符を改めて

田にして、あたしはふと気づく。

（もしかしてガイツは、こうなることを予想してた？）

あたしたちにこれを持たせたのは、自分のハンコを捺した魔符が狙われることをわかつていたからなのか。

「なら無理やり奪うまでだ！」アオマ

バンダナ男が魔符術を唱え出したから、あたしたちは急いでそこから離れた。もっとも、それは逃げるためじゃない。魔符術対魔符術の場合、相手の魔符術に対抗するためにはこちらも魔符術を読まねばならなくて、あまりに近い距離にいるとよけることしかできないのだった。それくらいは、魔符術での戦闘経験がないあたしでも基礎として知っていた。

もしくは

「アオマ・ティアツエネバシャファウイ！（魔符術・風よ、鋭い牙で敵を切り裂け！）」

バンダナ男の声を遮るようにして続いたのは、あたしにとつて聞き覚えのありすぎる声だった。

「うわあ！？」

「なんだと……つ」

他人によつて読みあげられたバンダナ男の魔符は、その手もとで発動し、ヒゲ男も巻きこみながら切り裂いていく。

「ふたりとも、今のうちにこつち！」

そんなヒゲ男・バンダナ男の向こうから飛び出してきたのは、いつもどおり双眼鏡を手にしたジノラットだった。

「あんた、その双眼鏡でこいつらの魔符読んだのね？　まさか覗き以外で役に立つことがあるなんて……！」

「変なとこに感心してんなよ！　それより早く、ひとつ南のマスに行くぞつ、走れ！」

なぜ南に行くのかはわからなかつたけど、ジノラットの妙な迫力におされてあたしたちも走り出す。南のマスとの境界ならばずつと見えていたから、越えるだけなら簡単なんだ。

(煙の持ち主さん、ごめんなさいっ !)

心のなかで謝りながら、煙を思い切り横切つていった。

「 ま、待ちやがれっ …… ！」

受けた魔符のダメージからまだ立ちあがれない人たちを尻目に、やわらかい土のなか必死に足を動かす。

そのあいだにも、ロディナは器用に頭を回転させていたのか、「 もしかして、あの人たちの魔符に捺されていたハンコ、ナルス = チュリオットのものだった ? 」

「 ！」

南へ向かう理由を見事に弾き出していた。

(すごいっ、ロディナ)

あたしなんて逃げることで精一杯なのに。

いちばん前を走るジノラットも、驚きを隠せずに振り返る。

「 そのとおり ! だから、少しでも相手の魔符を弱くしておいたほうがいいだろ ? 」

(『 減力の法則 』 、ね)

北側にいるナルスのハンコは、南に行くほど弱くなる。

でも

「 それって、こっちの魔符も弱くなるんじゃないの ! ? 」

ましてガイトは、わざわざより多く減力される『 定率法 』を選んだと言つていたんだ。今のマスから移動しないほうが、より強い魔力を保てるだろう。

でも、珍しく口もとにやわらかい笑みを浮かべたロディナは、「 そう …… おそらくガイトは、それが狙いだったのね

「 えつ ? 」

意味深なことを告げた。

そのロディナの背景に、あたしは嫌なものをとらえる。

(やばっ、あいつら次の魔符を唱えてた !)

こちらに向かってくる魔力の波が見えた。

ファイルブックから一枚魔符を取り出して、一いちらも負けじと読

みあげる。ロディナと魔符を分けるときに、自分で読めるものだけを受け取っていたから間違えはしない。

「アオマ・ブレスルアーアンショエグソイ！（魔符術・土よ、大地を突き破りその存在を示せ！）」

水の魔符術には土の魔符術を。それはあたしでも知っている、最も簡単な対抗手段。また、ガイトからもらったこの土の魔符術は、攻撃だけじゃなく防御も行えるものだったから助かった。

あたしのすぐ足もとから、ひとつめの土トゲが出現する。その土トゲは次々に姿を現し前へ進んでいくと、こちらに向かってきました魔力の波を完全に吸収してくれた。

（さすが！ ガイトの魔符は効力ばつちりね～）

トゲは魔力を吸収するだけにどじまらず、ご丁寧にあいつらの足もとまで出現し、下から突き刺してやつたみたい。まるで熱い鉄板の上にのせられたように、片足ずつをあげて踊るふたりの姿が見えた。

「今のうちに行きましょ」

その様子がおかしくって、つい見入ってしまったあたしたち（ジノラットなんて双眼鏡で覗いていた）に、ロディナは呆れたような声をくれると先に走り出してしまった。

「あ、待つてよー」

そろわない足並みで、やつと南への境界を越える。ここからはガイトの魔符の威力も少し落ちるから、注意しないと。

「あの人たちをこちらのマスまでおびき寄せるには、魔符術が届くぎりぎりのところまで行かないダメね」

相変わらず冷静なロディナの分析に、あたしは走りながらもぐるりとあたりを見まわしてみる。

（こっちのマスでも、このへんはやつぱり郊外なんだ）

あちらこちらに見える石は、お墓だろ？

『癒しの大樹』に勝るとも劣らない巨木を中心に、それらは設置されているようだった。

「これ、お墓なのかな！？ だつたら巻きこむないよつてしないと
つ」

そろそろ息も切れてきて、語尾が自然とあがつた。

「そうね、あちらのほうに行つてみましょ」

答えたロディナが、方向転換をはかつた、そのとき

「！ ロディナ、前つ」

鋭く名前を呼んだのは、ジノラット。

そして言葉と同時に、ロディナの上に覆いかぶさるのが見えた。
(前からも魔符術が！？)

間一髪、ぎりぎりのところでよけたふたりが地面に転がる。

あたしはもう一枚魔符を取り出して、今度は前方に向かい素早く
読みあげた。

(もしかして、やつらの仲間？)

魔符術を放つてから確認してみたけど、やつらの男たちとはまた
服装が全然違つた。どうやら新手のようだ。

「狙われすぎだろっ！」

ロディナを助け起こしながら、ジノラットが呆れたよつて叫ぶ。
「リューイ＝ルーンもこつちに来て、周りに効果のある魔符を使つ
わ」

「んつ」

巻きこまれては困るから、あたしもふたりの近くに駆け寄る。
あたしがさつき前方に放つた魔符術は、相手が相殺しきれなかつ
たらしく、体勢を崩しているのが見えていた。どうやら向こうはひ
とりのようだ。

今度は後ろを見ると、ちょうど追いついてきたヒゲ男とバンダナ
男の姿が見える。

「アオマ」

そこでロディナが読みあげた魔符は、使用者の周囲に巻き起こ
し相手を吹き飛ばす術だった。その有効範囲は広いものの、相手の
動きをとめるのが主で、攻撃力はさほど高くないらしい。つまり時

間稼ぎの魔符術なんだ、次の展開を考える必要があった。

前後から挟まれたため、今度は横に進路を取りながら作戦を練る。煙の上とは違い、こちらの地面はからからに乾いていたから走りやすかつたんだけど、その分追うほうも追われるほうもスピードが出来るのでよけいに疲れる気がした。

「なんかしつこいんだけど、どうしよう！？」

（このままじゃいざれ捕まっちゃうよ～）

なにせガイトからもらつた攻撃用の魔符も残り少ないし、長引けば長引くほど、魔符術戦の経験がないあたしたちのほうが不利であることはわかりきつていた。

そんなあたしの弱音に応えて、

「ふたりは飛ぶ魔符持つてるんだろ？ 行つてもいいぞ、あとは俺がなんとかする！」

ロディナがいるからか、やけに格好いいことを言い出すジノラット。

でも簡単に頷けるわけがない。

「あんたなんか、頼りなくてひとりでおいてけないわよっ！」

あたしがそう叫んだときだつた。

「きやあっ！？」

声をあげたのは、いちばん後ろを走っていたロディナだ。振り返ると、巨大な光の手に掴まれていた。

「なつ……なによこれえ！」

「ロディナ！」

ジノラットとふたりがかりでその手を引きはがそうとするけど、感触がまるでなく、どうすればいいのかさえわからなかつた。そのうちに手がするりと動き出し、ロディナを逆方向へと引きずつていく。

（これ、誰かの魔符術！？）

（こんなの見たことない！）

巨大な手の戻る先は、おそらくその術を放つた人物のもと

「あいつ……あとから来たやつだなつ？」「

ジノラットが忌々しげに呴いた。

そう、引きずられていったロディナを手にしたのは、前方から現れたひとりの男のほうだった。ヒゲ男・バンダナ男とは違い、シャツの上からでも鍛え抜かれた体躯がわかる。

「放しなさいよつ、このバカ力！」

片腕で抱えられているロディナはかなり激しくもがいているんだけど、びくともしないようだつた。

そいつがゆつくりと歩いてくるのは、自信の表れか。（やつぱりこの人も、ガイトの魔符を狙つているの？）

そんなに、強い力が欲しいのか。

そんなに……魔符を悪用したいのか。

それならくれてやるわよ！

頭に血がのぼりまくつたあたしは、遠慮なく例の魔符を取り出し大声で唱えた。

「アオマ・クラエネブレバシバノーアピツ……（魔符術・金だらいよ、その高貴なる姿で敵を押しつぶせつ……）」

その瞬間、恐ろしく大きな　それで人間を煮こむなら、千人は入りそうな　光の金だらいがロディナを捕らえている男の頭上に出現し、容赦なく落下した。

（わああああつ、ロディナにも当たつちゃう！？）

心配するあたしをよそに、ゴンッと鈍い音を立てたそれは、次の瞬間に消え失せる。そしてこちらに駆け寄つてくるロディナの姿が見えた。巨大金だらいに潰された男は、どうやらたまらずに手を放したようだ。

「ロディナ……！」

勝手に使つてしまつた罪悪感と、ロディナが助かつた嬉しさで、名前しか呼べなかつた。

あたしに、嬉しさのあまりかロディナが抱きついてくる。（ロディナつたら、珍しいな）

そんなに怖かったの？

敵がまだ倒れたままなのをいいことに、あたしもさつとローディナの背中に腕をまわした。

その、耳もとで。

「アオマ・コントウイーオウイザックヤバスリマバー！（魔符術・鳥よ、その輝ける翼で東へニマス導け！）」

（えつ！？）

魔符を読んだのはローディナだ。

驚いて首だけ動かすと、ローディナは確かにあたしの頭の後ろで魔符を手にしていた。

エイラさんにハン口を捺してもらっていた、学校に帰るための魔符を。

当然ガイトのところに行つたときと同じように、魔力でできた光の鳥が現れあたしたちをそれぞれの足につかまる。

「ちよつ、待つてよローディナ、これ定員ふたりでしょ！？」

「ジノラットはどうするのよ？」とあたしが続ける前に、ローディナがそのジノラットに向かって。

「あとは頼んだわよ」

まるで最初から計画されていたかのように、声をかけた。

言われたジノラットも嬉しさを隠しきれないような、だけビビンが緊張しているような、上気した頬を緩ませながら。

「ああ、まかせとけっ！」

とんと自分の胸を叩いて、自信を見せた。

「ジ、ジノラット……？」

そこには、あたしがいつも見慣れていたおちやらけたような表情はなかった。

（一体、どういうこと！？）

ジノラットはローディナが気になっていたものの、ローディナのほうはつい先日までジノラットのことを知らなかつたはずなのに。今のがいからでは、まるでジノラットのことをよくわかっているかのよ

うな

「！ あやあつ！？」

あたしの混乱になど興味のない鳥が、不意に大きく飛びあがる。

「心配しなくても、たいした距離は飛べないわ」

同じようにくわえられているローディナがフォローの言葉をかけてくれたけど、どうせ飛ぶのだからあたしにひとつでは同じことだった。きつく瞳をつむつて、手探りで見つけたローディナの手を遠慮なく握りしめる。

もう闇色をまとこはじめている空は、来たときよりも風が強いらしく、魔力の鳥でもその影響を受けるのかひどく揺れた。そのせいで、身体に食いこんでくる爪が少し痛かった。

でも今ジノラットがおかれている状況は、そんな痛みよりもむつきついもの。

（大丈夫かな、ジノラット）

三対三が一対三になってしまったんだから、やつぱり気になる。実際、あいつらが狙っていた魔符はもうあたしが使ってしまったから、ジノラットを襲う意味なんてなにもないんだけど、もしかしたらそのことにすら気づいていないかもしれないんだ。

やがて、ローディナが言つていたとおり、鳥はすぐに下降を始めたたちを地面にあらしてくれた。くるりと来た方向を振り返つて見ると、ちょうどマス田の境界が見える。半マス分くらいしか進んでいないう�だけだ、今は充分だ。

このあたりは意外と民家が並んでいて、暗い空から光るものがありてきたからと、あたしたちを覗きにきた人までいた。

「あ、どうも。お騒がせしてすみません」

変に騒がれるのが嫌だったから、あたしがそう適当にごまかして笑つていたら。

「とりあえず、ひとつ北のマスに戻りましょ」

一方的に告げたローディナは、気にせず歩き出してしまった。

田をやると、北の境目もまだ見えている。だから戻るのは、簡単

なことだ。

だけどあたしは、そのあまりにも冷静すぎるローディナが気に入らなくて。

(ジノラットをあつせりとおいてしまったことも)
気にくわなくて。

「待つてよローディナ……せつかぐ、ガイトにもらった魔符を使っちゃつたのは悪かつたけど、なにもジノラットをおいてくることはなかつたんじゃない!?」

ジノラットは確かに「任せておけ」とは言つたけど、それはローディナの手前の強がりだったかもしれない。自分は男だからと、我慢したのかもしれない。

あたしの言葉に、ローディナは一度足をとめ振り返つた。意外にも、そこに浮かんでいたのは 笑顔だつた。

「魔符のことはいいわよ、捕まつたわたしも悪いのだし。それよりあなた、幼なじみなのでしょう? 気づかなかつた? あの子、魔符術戦に慣れているわよ。むしろわたしたちが足手まといだと思つたから、残してきたの」

「え

考えたこともなかつた。

(ジノラットが、魔符術戦に慣れてるつて?)

ほぼ直進しか知らないようなジノラットに限つて、そんなことは

「……あ

でも考えはじめたら、なんとなくわかつてしまつた。

(ファッショングだつて言つてたあの包帯も、やつぱりケガによるもので)

覗きのためと言われていたあの双眼鏡も、今回のように相手の魔符を見たりするためのもので。

あたしがよく覚えていなかつた『減力の法則』をしつかり覚えていたことといい、それを効果的に利用する方法を知つていたことと

いい、ロディナの推測を裏づけられるものはたくさんあった。

たんにあたしが気づかなかつただけで。

「行くわよ」とあごで促して、もう一度歩きはじめたロディナに、今度こそあたしもついていく。

あたりはもうすっかり暗くなつていたけど、丸くて大きな月があたしたちを照らしてくれていたから、灯りは必要なかつた。

「あの子の将来の夢つて、なんだつたの？」

確認するように訊いてきたロディナの言葉に、記憶を掘り起こす。

「……そういえば、『魔符術戦士』だつたかも」

魔符をより効果的に使い、戦う者だ。

「ちゃんと勉強してるみたいね」

苦笑するように笑うロディナに、あたしは頷いた。

「うん」

（そうよね、ジノラットにだつて、夢があるんだよね）

あたしは自分の夢 立派な魔符職人になること、そのためにちゃんと卒業すること に手一杯で、他の人がどんな夢を持つて生きているのかなんて、正直忘れていた気がする。自分のことにばかり一生懸命で。

今となりにいるロディナが、あたしと同じ『卒業』に向かつて頑張つているのは知つても、その先になにを見ていのかも知らない。

（そこにはあたしには関係ないから？）

「ううん、そんなことないよね。

ロディナにも目指しているものがあるのなら、無事に卒業できたときにはその目標により有利なよう、今からでも動いていけるんだ。あたしがそれを理解していれば。

「ねえ、ロディナ」

思い切つて、あたしはそれを訊いてみることにした。

「ロディナの将来の夢つて、なあに？」

背中に問いかけてから、隣に並ぶ。

「なによ、唐突に」

歩く前を見たまま応えたロディナだったけど、嫌がつてはいない
ようだったから。

「唐突じやなこよ。ちゃんと話の流れにのつてるもの」

「じゃああなたの夢は？」

逆に問い合わせられて、あたしは声を張りあげる。

「そりやあもちろん、魔符職人になることよー。」

ただ補足は、大きな声では言えなかつた。

「ほんとは、やつぱりオリジナルの魔符をつくつてみたいんだけどね。あたしの頭じや無理だつてのはわかつてゐから、せめて両親が戻つてきたときに、ふたりが考えた命令文をあたしが織れたらなつて」

それだつて、今回じつしてロディナと一緒に行動するまでは、自信の持てないことだつたんだ。言われた文章を記すだけなら誰だつてできる、そう思つと、自分の夢に価値なんてないような気がして。だけど

「ああ、あなた古代文字きれいに書くものね。それは向いていふと思つわよ」

さらりと、ロディナは言つてくれた。

「そうやつてロディナが褒めてくれたから、自信が持てたんだよ。

学校の先生なんて見慣れてるからか全然褒めてくれないんだ」

「それは、汚いきれい以前に、あなたの解答がひどすぎたからじやないの？」

「うーー

それも、まったく否定できなかつた。

そこからはしばらく、ふたりして無言で歩く。

(ロディナの夢は、やつぱり教えてくれないのかな)
まだそこまでの仲じやないから?

あたしに言つても、意味がないから?

もう一度訊いてもいいのか、迷つていた。

ちょうど北との境界を越えた頃、口をひらいたのはローディナのほうだった。

「 わたりの話だけれど」

「 え？」

どうやらローディナは、話す言葉をまとめいたらしく。

あたしが横顔を眺めても、決してこちらを見ようとはせぬ。

「わたしの夢は、あなたの『両親のよつたな言語学者になる』ことよ。

当然、古代語のね」

「 ！」

（ローディナ……）

「だからわたし、ずっとあなたのことiga羨ましかった。すばらしげ両親に囲まれて、古代語を小さい頃から教えてもらえて」

そこでローディナは、言葉とともに足をとめた。

数歩ローディナを追い越したあたしが慌てて振り返ると、やつとま

つすぐに視線を向けてきたローディナが。

「 でもそれは、今のあなたが抱えるさみしさを、すべて無視した感情だった。あなたがガイトに告げた言葉で、わたしはそれに気づいたの」

「 え？」

「『わみしくない？』なんて問はず、自身がさみしいと思つていなければ出でるはずのない言葉なのよ」

「 ！」

ずつとひとりぼっちだというガイトイに、思わずかけてしまつた一言で。

ローディナはそれに気づいてしまつたんだ。

「 あ、あたしだって！ ローディナのこと、こつそり羨ましいって思つてたんだよ？ 同じルーンなのに頭すじく良いし、大人っぽいし美人だしいつも冷静だし」

正面から交わしあう視線のなか、ローディナの口もとがふつとほころぶ。

「でもあなた、知らないでしょ？　わたしの家って貧乏の大家族なの。だから、さみしさは知らないけれど生活の限界は知っているわ」

「…？」

それはまつたくの初耳だつた。

「じゃあ、ロディナが古代語の言語学者を田指しているのつて……すつと、ロディナの長い黒髪が揺れる。

「そう、あなたのご両親に憧れていたというのもあるけれど、国王陛下に認められる言語学者になれば、家族も丸ごと保護してもらえるからよ。　今のあなたが、自由に生活できていって」

「……」

（ロディナにそんな事情があつたなんて　）

あたしの前でだけじゃない。

学校のなかでもずっと強がりを続けていたロディナに、誰も気づかなかつた。

抱えている問題の重さに、誰も気づけなかつたんだ。

（恵まれている）

あたしだつて、ロディナから見れば充分にそういう存在で。あたしたちはお互いのうわべだけを見て、指をくわえていた。バカなふたりだつた。

「エイラのところまで、戻るわよ」

なにも言えずに立ち去くすあたしの横を、ロディナが追い越していく。

「やりなおしましょ？……何度も…」

その力強い言葉に、あたしはまだ諦めていないロディナの意思を見た。

「うん…」

もう一度ガイツのところに戻るのは、簡単なことだつた。

しかしもう一度、ハンコをもらつてもきっと同じように狙われる。少なくとも今のあたしたちは、ハンコをもらつた魔符を最後まで守りきる自信がなかつたから、作戦を変えることにした。

一日かけてエイラさんのところまで戻り、もう一度、東へ三マス飛べる魔符にハンコを捺してもらつ。

「これからどうするつもりじゃ？」

一度目の協力要請にも快く応じてくれたエイラさんは、あくまで移動の助けしか頼まないあたしたちを心配に思つたのか、そう尋ねてきた。

あたしは持つていた魔力士マップを広げて、エイラさんに見せてみる。

「ロディナと相談してみたんですけど、お城にいちばん近い魔符術士が有利なら、このエムル＝トルドって魔力士はどうかな？ つて思つたんです。ただ、この人の名前の横に×マークがついてるのが気になつて……」

お城と学校があるマスの、左隣のマスにいるその魔力士は、魔力の強さは下から一番田（つまり、ナルスさんとエイラさんのあいだ）になつていただけど、ナルスさんよりお城に近い分同等の力を發揮する可能性もあつた。

チラリとこちらに目をやつたエイラさんは、どこか含みのある笑いをシワいっぱいに浮かべて。

「ああ、エムルは事情があつてハンコが捺せない状態じゃからな」「捺せない状態？ それはどういうことですか？」

「すごいケガでもしているとか？」

問い合わせたロディナに続けて訊いてみたものの、自分でも「それはないな」と思つた。だつて魔力士はこうして、エイラさんやガイ

トみたいに「ずっと守られて存在しているのが常なのだ。」「すればケガをすることができるのか、考へても思い浮かばない。（まさかお風呂場ですつ転んだなんて、ジノラットみたいなことはしないだろ？）」

気になる。

エムル＝トルドはなぜ、ハンコを捺せないんだ？

「まあ、行ってみるのもよからう。おぬしらなら、なんとかなるやもしれんしの」

その、なんとも煮え切らない答えに、あたしとローデイナは思わず顔を見あわせた。

ナルス＝チュリオットのところへ行って、他の挑戦者たちと同等の魔力を得るか。

エムル＝トルドのところへ行って、先の見えない可能性に賭けるか。

最後の選択を迫られていた。

あたしたちはエイラの部屋を出たあと、前の階段をくだりながらさつそく意見交換をする。

「『いちばん強い魔符術』の、いちばん強い魔符は、これで充分だと思つのよ」

ここに戻つてくるまでの一日間で、もう一度あたしが織りなおした魔符を、手もとで書いてあそびながら告げたのはローデイナ。さらに続ける。

「一マス移動していく、しかも魔力の減りが多い定率法だったのに、あの威力よ？ ガイドがわざとそちらを選んだのは、わたしたちが狙われることを予想していたからと、お城に至る前に使つてしまつたときに、うつかり人を殺してしまわないように、だつたのね、きっと」

「げつ」

言われて、ぞつとした。

（そういえばあの金だらいの下敷きになつた人、全然動かなかつた

もんね)

大丈夫だったのかなと、今さらながらに心配になつた。
襲われたからとはいえ、いきなり殺人犯になつてしまつるのは「冗談

じゃない。

「魔力が強ければいいつてものでもないんだね」

改めて感じたことを改めて口にしたら、ロディナに鼻で笑われてしまつた。

「なによ~」

ロディナを追い越し階段を駆けおりていつて、いちばん下で振り返る。

「ロディナ、どっちに行きたい?」

見あげて訊いたら、ロディナは。

「あなたは?」

「みんなが行かないほう

正直に答えたら、また笑われた。

「ロディナ?」

「仕方がないわね。おとなしくついていつてやるわよ

「!」

「エイラ＝ポットもはつきりと否定しなかつたのが、気にかかるから

ら

「『おぬしらなら、なんとかなるやもしれんしの』?」

エイラの真似をしてみたら意外に似ていたようで、ロディナは「

ふつ」とふきだしたあと。

「リューイ＝ルーン、あなた、ちゃんと他にも特技があるじゃないの」

喜んでいいのかわからない褒め言葉をくれた。

違和感は、きっと最初からあつた。

移動の魔符で学校のある中央のマスまで戻り、休む間もなく東へ一マス移動した、あたしたちを待っていたものは、森の木々でつくれた迷路に、巧妙な罠。

（どうしてここまで、人を寄せつけないようになつてゐるの？）

エイラさんだつて、ガイドだつて、確かに街からは離れた場所に住んでいたけど、こんなふうに隠されたりはしていなかつた。

何度も身の危険を感じながら進むうち、いつもは冷静なロディナも眉間にシワを隠せない。

「どうこじりとなのかしら？」

何度も同じ場所を通り、何度も同じ罠に引っかかりそうになりながら、少しずつ屋敷へと近づいてはいるんだけど

「もしかして、エイラさんに一回も頼つちやつたから、おしおき、とか？」

自分で口にしたくせに、身震いした。

「まさか」

応えるロディナの声も、しかし笑いきれていらない。

（まだ朝だから明るくていいけど、これ夜になつちやつたら普通に出られなくなりそうだよ……）

それまでにはなんとか、屋敷にたどり着いて目的を達成していたところだ。だつてこの森では、帰ることすら大変そうだから。

その後やつとあたしたちが屋敷へとたどり着けたのは、お昼をまわつてからだつた。

「あつた！ 門が見えてきたよ～」

他の屋敷同様立派な格子門が見えて、思わず指差し叫んだ。本当は飛びあがつて喜びたいところだつたけど、あまりにも長い時間森をうろついていたせいか、足の疲れがひどくてそんな余裕もなかつた。

（屋敷のなかでちょっと休ませてもらおうかな）

持つてきたパンとかも、食べる気になれず手をつけないままだ。休んだあとなら食べられるかもしれない。

勝手にそんなことを期待して、門のほうへと近づいていく。

また、違和感。

「待ちなさいリューイ＝ルーン。様子がおかしいわ」

「え？」

「門番がいな いいえ、門番が倒れているー。」

「！？」

さりに近づいたらわかった。ロティナの言つとおり、門番たちが門の脇のほうで倒れていたんだ。しかもその腰に、魔符を入れておくファイルブックは見あたらない。

「もしかして、襲われて魔符を盗られた？」

（だったら今、なかにいる人は……！？）

頭がまわらない。

とつさに状況を理解できない。

そんなわたしを嘲笑うかのように、さらなる変化が訪れる。

「……せつて言つてるべー？ わらなんか連れでつても、なんの得さもなんねえつてばー！」

最初に聞こえたのは、まだ幼い声。それから屋敷の正面玄関がひらき、複数の男たちが飛び出してきた。うちひとりの男の腕には、さつきの声の主だろう小さな子どもが拘束されている。

「もしかして、誘拐？」

大きく目を見ひらきながら、呴いたのはロティナだ。手は自然に、ファイルブックへと移動している。

「じゃああの男の子が魔力士！？」

あたしがあげた声に、格子門へと近づいてきていた男たちもこちらに気づいた。

「なんだっ？ おまえたちは！？」

向こうも興奮しているのだろう、走っているという理由以上に声がうわずっている。

「そ、それはこっちのセリフよ！ 国によつて保護されてる魔力士に、あんたたちにしちゃつてるのよ！？」

魔符術が格子門のなかまで届くのかはわからないけど、あたしも魔符を構えた。今ははつたりでも必要だ。

しかし、あたしたちがまだ若い小娘だからだろうか。相手は逆に冷静さを取り戻していくようで、やがて格子門を挟んだすぐ近くまでやつてきた三人の男たちは、ニヤニヤと嫌な笑みを浮かべていた。（なんなの、この人たち……）

この国ではまったく見たことのない服装だった。いや、服というよりもむしろ、生地を身体全体に巻きつけているような、どちらかというとガイツの服装に近かつた。

「邪魔をする気か？」

鋭い視線と低い声で訊かれ、さすがにたじろぐあたしの横で。「悪いけど、わたしたちもその子に用がありますので」

凛と答えたロディナは、そのまま魔符を読もうとした。

「アオマ」

「ダメっ、逃げで！！」

それを遮つて叫んだのは、魔力士の子ビも。

次の瞬間

「……あつ！？」

突然背後から襲われた感覚に、あたしたちはつまく対応できなかつた。

（なに、これ）

身体にまとわりついてくる、この妙な空氣は。

これも魔符術？

動かしにくい身体をそれでもなんとか動かして、振り返つたあたしが目にしたものは、誘拐犯三人と同じ格好をしたひとりの男だった。

（後ろにも仲間がいたんだ）

やがて、それ以上のことは考えられなくなつて。

視界の端で倒れるロディナを目にしても。

やがてあたしの意識も飛んだ。

ナビもの泣き叫ぶ声が、聞こえた気がした。

「 イ、リューイ＝ルーン、起きなやー。」

呼ぶ声はわかつた。

でもまどろみのなかにいるのが気持ちよくて、無視した。あたしの足もとを、ロティナが容赦なく蹴飛ばしてくる。

「いたつ……ちょ、スネを蹴ることないでしょ！？」

やつと田をあけたあたしは、やつと自分のおかれている状況を思い出す。

「…………」

「遅いわよ、まつたぐ」

呆れたように眩くロティナの顔が、すぐ近くにあつた。逆にいえば、近くにあつたからこそ薄暗くてもちゃんとわかつたんだ。

（手足ともに縛られている、か）

後ろ手に縛られた手は自分では見えないけど、おやじく足とロープで縛られているんだね。だとしたらふたりいればなんとか取れないこともないのに、あたしたちが同じ場所に閉じこめられているのはやはり、女ゆえに相手が油断しているせいなのかもしねない。

冷たい木の板に頬をあわせて横になつたまま、ロティナに状況を確認する。

「あたしたちつて、エマルくんを誘拐しようとしてたやつらに捕まつたんだよね？」

「おそらく、ね。催眠系の魔符術を使われていたことに気づかなかつたのが敗因だわ」

前にはばかり集中していたあたしたちは、後ろに相手の味方がいるなんて可能性をまったく考えていなかつた。ある意味それくらい気が動転していたんだ。

そして、

「でもや、一緒に連れてこられたんなら、まだ助けるチャンスはあるよね？」

「う、助けたいと思つてた。

（面識なんてなにもない、今日初めて見たばかりの間柄だけ）

それでもあの子はあたしたちに、「逃げて」つて言つてくれた。

「助けて」じゃなくて、「逃げて」と。

「ふつ」と、すぐ近くにいるからこそのローティナの息を吐く音が聞こえた。

「相変わらずあなたは、恐ろしいくらい前向きなのね」

褒めたんだけなしたんだかわからないう葉をかけてくる。

それから、

「いいわ、とりあえず手のロープを外しましょ。お互い後ろ向きになつて」

「うんっ」

ふたりして、転がつて、身体の向きを変えてから、上半身や膝をうまく使って再びすり寄つた。後ろ手にまわされた手と手が触れあつ。

「先にわたしがあなたのを外すわね」

「多分そうじやないと先に進まないと思つて…」

了承のかわりにそんなことを言つたら、からかうように指先をつかれた。

それから、ローティナが手を動かしているあいだ、あたしはやつと落ちついて室内を見まわすことができた。

（ここ）、別に牢屋つてわけじゃないんだよね

小さな灯りがひとつ、それも高い位置にあるせいで、部屋全体がはっきりと見えるわけではないけど。木目の床はひどく軋んでいてなんだかすぐに壊せそうな感じだつたし、部屋の隅には一般の家庭にありそうな机が置いてあり、牢屋といつよりも勉強部屋みたいな雰囲気だった。

（部屋が足りなかつたのかな？）

あたしたちと遭遇してしまったのは、明らかに予定外だったろうから。あの男の子用の部屋しか用意していなかつたのかもしれない。

（そうだ、あの男の子　）

まだ幼い魔力士の、エムルくん。

きつとこの国の出身ではないんだろう、燃えるような赤い髪をしていた。聞き慣れないなまりも使つていたつ。

（大丈夫かな）

乱暴なことされてないといいな。

そもそもなぜあの子が狙われたのか、あたしにはよくわからなかつた。

世界中で魔力士の存在が重要視されていて、『魔力士の数が国力を決める』とまで言われているけど、実際は低位の魔力士をいくら集めたつてあまり意味はないんだ。彼らの役目はエイラさんを見ればわかるとおり、一般国民が使う魔符をつくることであつて、国を助けることじゃない。国を守りたいなら、それなりの力を持つ魔力士でなければ。だから、エムルくんみたいにそんなに力のない魔力士を連れていつたつて、それが国のためになるとはとても思えなかつた。

（連れていくなら、ふてぶてしいガイトにすれば良かつたのに）
もつとも、力の強い魔力士であればあるほど、近づくことすら難しい。だからこそエムルくんを狙つたのかもしれないけど……なんだか納得がいかなかつた。

「よし、終わつたわよ」

聞こえた声に、あたしは我に返る。

同時に、手首に食いこんでいたロープがさらりとほどけ、あたしの両手は自由になつた。

「ありがと！　ロティナ」

「足のロープは自分で外してよ？　それで机から、なにかロープを切るのに使えそうなものを持つてきて」

やつぱりロティナも不自然な机が気になつていたんだ。

うう

ん、今こじで不自然なのは、むしろ囚われているあたしたちのほうか。

「ロディナ、そんなにあたしの指先が信じられない？」

自由になつた腕を使って、身体を起こしながら訊いてみたら。

「何日も一緒に寝泊まりしてれば、嫌でもわかるのよ。自分でボタンもとめられないくせに」

「うう」

またしても、全然否定できなかつた。

そしてやつぱり、自分の足首のロープすら、外せなかつた……。

「もううへへへへ、こうなつたら這つても行つてやる！」

仕方なく、足を拘束されたまま机のほうへと向かう。最初はぴょんぴょん飛び跳ねていこうとしたんだけど、音が立つと誰かくるかもしれないからとロディナにとめられたのだった。

なんとか机のそばまでたどりつづき、引き出しのなかをあさつてみる。

「あ、なんか文房具がいっぱい入つてるよー」

「紙とペンはある?」

「うん」

「じゃあそれも持つてきて。ファイルブックは取りあげられたようだから、念のため新しい魔符を織つておきましょ」

「え? でもハンコもらわなきや使えないじゃない」

「あなたねえ……」

そこでロディナが一度区切つたから、あたしは引き出しから顔をあげた。

「なに?」

「助けたいのは、誰なんですか?」

「誰つて、魔力士のエマルくん あ、そつか

(無事に助けられたら、その場でハンコをもらえばいいんだ!)

そんなことすらひとつに思い浮かばなかつた自分に、少しちまゝがした。

やがて引き出しの奥からペーパーナイフを発見し（さすがにナイフそのものはなかった）、紙とペンも携えてロディナのそばへと戻る。

「いい？ リューイ＝ルーン。まずはロープの先を見つけて、そこから結び田をたどつていいくのよ。ペーパーナイフがある分、指が入らないきつい隙間でも広げやすいはずだから、根気よく頑張つて！」

ロディナに励まれ、その手首に巻かれたロープ外しを試みる。あたしの足首に巻かれたものは、ロディナの手が自由になつてから取つてもらつたほうが早いということで、あとまわしになつたのだった。

（うひ、なんのこの結び田……）

複雑に絡まつたロープは、まさしく迷路だ。

「ロディナ、見えない状態でよくこんな解いたね」後ろ向きでやり遂げたロディナに、改めて感心する。するとロディナは、珍しくなにかを言いよどんで。

「……ロープで、よく遊んでいたから

「え？」

「手づくりのテントをつくつたり、ハンモックみたいなのをつくつたり、縄跳びをしたり、あやとりをしたり。お金のかからない遊びなら、家族みんなでなんでもやつたわ」

「そう、なんだ」

普段のロディナからは、まるで想像できない一面だつた。手を動かしながらも、あたしはロディナに続きを振つてみる。

「何人家族なの？」

「十人」

「うわっ、ほんとに多いね。ロディナは何番目？」

「こちばん上よ つて、ちゃんとやつてるの？ リューイ＝ルーン」

「大丈夫だよ！ ペーパーナイフのおかげでやりやすいから」

「そう、ならないけど」

ロディナは一度そこで切つたあと。

「それにしてもわたしたち、緊張感ないわよね」

「そんなことを言い出した。

確かに、襲われて知らない場所に連れてこられた割に、不思議と落ちついている。

あたしはそれに気づかないほど自然体だった。

それは考えるまでもなく、こうしてロディナと一緒にいるからだ。「ロディナが良い案を考えてくれるってわかってるから、あたしはそれを活かすように動くだけだもん」

「相変わらずの他力本願なのね」

「自分の役目くらいはわかつてゐつもつよ！ そういうロディナは、なんで落ちついてられるの？」

「わたしは」

時折言葉を切つて、続きを探すロディナ。

それはおかれている環境からついた癖なんだろ？

「あの人たちがわたしたちを生かして連れてきた以上、わたしたちに利用価値を見出しているのは明らかだから」

「うわ、全然良い理由じゃなかつた！」

「あたりまえでしょ。それにあなたには、もっとかなしいお知らせもあるのだから」

「え……な、なに？」

ロディナがそつと声をひそめたから、あたしはつい手をとめてしまった。

当然ロディナはすぐそれに気づいたのか。

「そのロープを外しあえたら、教えてあげる」

「ちょ、なによそれつ。怖くてロープと遊んでる場合じやない！」

「いいからさつさと外しなさいよ。そろそろいい加減手が痛いわ」

「う、わ、わかった。急いでやるからもうちょっと待つてつ」

そこからは会話せずに、必死に手を動かした。

そのおかげでやがて、ちゃんと外すことはできたんだけど

「じゃあ言つけど」

ロティナの続きが、怖い。

寝転がつたままぐるりといひながらに身体を向けたロティナは、やけに神妙な顔をしていて。

「ロ、ロティナ……？」

「いろいろと考えた結果、今わたしたちがいるここ、きっと飛行船のなかよ」

「な」

飛行船といえば、空気の力で空を飛ぶといつ乗りもののことだ。それくらいはあたしも知っていた。飛行船が空を飛ぶようになったのは、あたしが小さい頃の話で。初めてそれが空を飛ぶ日、あたしも乗る予定だつたんだけど、熱を出してお流れになつたのだった。それ以来、まるで縁のなかつた奇跡の乗りもの。

（じゃあ今、空の上にいるつてこと！？）

自分が高所恐怖症だなんて知らなかつた数日前なら、無邪気に喜べたかもしれない。

でも今は

「ごめんロティナ、泡ふきそつ……」

「そう、そのまま黙つてなさいな。今のうちにわたしが足のロープを取つてあげるから」

ロティナは当然この反応を予想できていたんだろう、あたしが静かになつたのをいいことに、身体を丸めてあたしの足のロープを解きはじめた。

（空の上、雲の上、地上の上……ほんとに浮いてるの！？）

まったくもつて信じられない。

そういえばたまに揺れるから、なにか乗りものに乗つているのかもとが、工場の近くにある建物なのかとか、そういうことばかり考えていたけど。もし本当にここが飛行船のなかならば、なるほど、人を閉じこめておくような場所がないのも頷ける。

そうしてあたしが放心しているうちに、さつやとロープを取りお

えたローディナは、今度は自分の足のロープを外はじめる。

「ね、ねえ……ローディナはどうしてここが飛行船のなかだってわかつたの？」

尋ねてみたら、一度だけチラリとこちらを見たローディナは、「答えるから、セレニにある紙とペンで簡単な攻撃魔符を織つてちょうだい」

それだけ言つと、再び手もとに視線を戻した。

（そうだ、なんかのんびりしちゃつてるけど、いつ人が来るかなんてわからないんだった）

あたしは慌てて自分の手もとにそれらを引き寄せるが、言われたとおり自分が記憶できている魔符を織りはじめる。魔符で大事なのは、織りこむ命令文とハンコだけであり、それ以外の素材はどんなものでも構わないから、いくらでも代用が可能なのだつた。いつも同じサイズの紙に書いていたのは、統一されていたほうが保存が楽だからだ。

薄暗いなか、田を凝らしながら一文字ずつ丁寧に織つていると。

「うんと小さい頃に、一度だけ乗つたことがあるから」

「ほつりとローディナが呟いた。どうやらわしあの問いの答えらしい。

「ふうん？」

（飛行船に乗るなんて、お金がかかりそうなことなの）

なんだか意外に思えたけど、今はそれどころじゃない。

ローディナの手もとを見ると、ロープ外しにすっかり慣れたのか、もう取れそうな状態だつた。あたしも早く魔符を完成させてしまわないと！

そうしてひとりに三枚ずつ、全部で六枚の魔符を織りこんだ。これらは魔力士にハンコをもらえなければなんの役にも立たないものだけど、あるだけで少し心が落ちつくから不思議だ。

（普段からずっと接してたからかな）
それとも、愛しい両親が残してくれた古代語が、ここにあるからだろうか。

なものにも代えがたい、お守りのよつて思えた。

ローディナの分である三枚を手渡すと、さつと皿を通したローディナは。

「もう一枚、今から書く魔符を書いてくれる?」

「いいけど、それじゃあ足りなかつた?」

「足りないというかね。これじゃあエムル=トルドを助けられても、この船から逃げる方法がないじゃない」

「あ

言われてから、気づいた。

(そうよね、今は空の上なんだから……)

逃げるには、それ相応の準備が必要だつた。

自分が空中に投げ出される場面を想像してしまつて、あたしは思わず震える。鳥に運ばれただけでもああのに、もつと高い場所から、しかも落ちるなんてありえない! 心臓が縮こまりすぎてビリにかなつちゃいそうだ。

(そつならないためにも、逃走用の魔符を織つておかないと…)

頭のまわるローディナに、心から感謝した。

それからふたりで相談しつつ、最後の魔符を織りこむ。これまでに何度も頭をつきあわせて文章を考えているせいか、お互の好みや考えがわかつてきだし、考える手順も共通のものが生まれて、以前よりずつと早く意見がまとまるようになつていて。

「うん、この魔符術なら、あたしでもロマンチックで耐えられそう

」「どうせずっと皿をつむいでいるくせに?」

「く……つ

ローディナはいつも、言に返せないことばかり突いてくる。

「ローディナつたらほんと意地悪なんだから」

それでも嫌いになれないのは、言つてしまつたあと瞳の奥でそつと後悔していることに、なんとなく気づいてしまつたから。

(何度も言われて)

そのあとも一緒にいて。

それを何日かくり返して。

やつとわかった。

そこまでつきあわなければ、わかるはずのなかつた、心の裏側「……！」

そのとき不意に、扉の外で誰かの足音が聞こえはじめた。廊下も室内と同じ木でできた床なのだろう、こつこつとノックをするような音が、少しづつ大きくなつてくる。しかも一ついや、三つか。もしかしたらあのときエムルくんを誘拐した三人かもしれない。

顔を見あわせたあたしたちは一度頷きあつてから、それぞれ魔符を服の内側に隠した。紙だからどこに入れても自然に隠せるのが、魔符の良いところもある。まだハンコを捺していないものなら、誰の声にも反応しないから問題もない。

それから部屋の奥にふたり身を寄せあつて、しゃがみこんだ。相手がひとりだつたらつかみかかるのも有効な作戦だつたかもしれないけど、三人ではさすがにきつい。

やがて足音は、予想どおりこの部屋の前でとまり、カチャリと鍵が外される音がした。

（あ……）

そういえばあたしたち、扉が閉まつてゐるかどうかも確認していなかつた。落ちつけているように見えて、やっぱり心の奥ではかなり動転していたんだろう。

ロディナに目を向けると、同じように苦笑していた。

ひらかれた扉から入つてきたのは、思つたとおり例の三人だ。

「さすがに起きていたか。どうだつた？ 深い眠りの味は」

あのときエムルくんを抱えていた、ひときわガタイのいい大男が顔を歪ませ訊いてきた。

（深い眠りの、魔符術だつたんだ）

どうりでまつたく夢も見ず、こんな場所に連れてこられても気づ

かないはずだ。

「あなたたちは何者なの？なぜ、低位の魔力士を狙うのです？」
相手の問いを無視して、声をあげたのはローディナ。相変わらずの
いい度胸だけど、怖くないはずがないことを、あたしはもう知つて
いたから。自分から手を伸ばして、そばにあるローディナの右手を握
つてあげた。

それに気づいたローディナの目が、一瞬あたしをとらえたけど
「ハッ、低位の魔力士だつて？もし本当にそつなら、そもそもて
めえらの国だつてあいつを受け入れたりしなかつただろ？」「さういふと
え？」

男の思いもよらない言葉に、あたしたちの視線は再び前へと戻つ
た。

（それって、どういふこと？）

エムルくんは低位の魔力士じゃないの？

他の国から、連れてこられたの？

エイラさんは、「エムルは今ハンコが捺せない状態だ」って言つ
てたけど。

そのこととこれは、なにか関係があるんだろうか？

（ダメ、あたしにはなにも思い浮かばない！）

だいいち、一言も言葉を交わせなかつた相手のことを、そつ簡単
に理解できるわけがないんだ。

ぎゅっと、今度はローディナのほうから手を握りしめてきた。

「いいねえ、その動搖した顔。どれ、じゃあ本題だ」

中央の大男はそこで一度切ると、両脇に控えているふたりにそれ
ぞれ目配せをして。

「てめえら、魔符術学校の生徒ならそれなりに魔符が書けるんだろ
う？ どちらが優秀だ？ エムルの力を試すための実験台に使つて
やうやく」

「！？」

告げたとたんに、両脇から下つ端の男たちが近づいてくる。捕ま

える氣だ！

（どつちが優秀か、ですって？）

そんなの、ロディナに決まってる。でもそんなふうに言われてロディナを出すわけにはいかないんだ。あたしはそれほど薄情じゃない！

「

息を吸つて、叫ぼうとした。

けれど意外にも、それを腕で制してきたのは

（ロディナっ！？）

「わたしのほうが優秀です」

ロディナは少しの戸惑いもなく繋いでいた手を離し、立ちあがつた。

「『成績が悪いほうのルーン』なんかと比べないでください。比べるまでもない」とですから

「ロディナ……」

確かにそのとおりだ。でも、実際にそれをロヒリ出されると、ビックりかなしい。

「ほほっ？」

興味深げに目を細める大男。そのあいだにもう一つ端の男たちがさらに近づいてきて、ロディナの腕を両脇から掴もうとした。しかし、

「触らないで！」

迫力のある声でロディナに制され、伸ばす手をとめる。

「抵抗なんてしません。自分でちゃんとついていきますわ」

氣取つてすらいるような、ロディナの後ろ姿。

（ロディナ、今どんな表情をしているの？）

無理に微笑んでいるんだろうか？

それとも、無表情を装つてているだらうか？

今あたしが「本当はあたしのほうが優秀です！」と言いく出すのはややすい。でもこのロディナの、凜とした氣高い雰囲気に勝てるは

ずもない。」「こいつらがどちらを信用するかは、他のなにを見るよりも明らかだった。そしてそれは、あたしがルーン夫妻の娘だと言ったところで同じだらう。証拠はなにもないのだから。ロディナを助けるための嘘と、思われて終わりだ。

でもやつぱり、おとなしく見送ることもできなくて

「ロディナっ！？」

半分は悲鳴のような声で呼んだが、ロディナは振り返ってくれた。

（えっ！？）

そこに浮かんでいたのは、今までになくやさしい笑顔。

「」めんなさ」「リューイ＝ルーン、わたくし、やつぱりプライドを捨てられない」

（どんな場面であれ、あたしより下に見られたくないって…）

ちくりと痛むのは、一体誰の胸なのか。

「あなたのよつて、がむしゃりにはなれないの」

「」

なにも言えないあたしの目の前で、ロディナは自分の首につけていたペンダントを優雅な動作で外した。

それから

「一度くらい、わたしにも良いこといろいろを見せるチャンスをちょうどいいな」

「」

終わる言葉とともに、ぽんと投げられたペンダントがあたしの胸もとまで飛んでくる。

（ロディナ………）

違うんだ。

自分のためじゃないんだ。

あたしのために、そのプライドを

「ふつ」ともう一度笑って、ロディナはくるりと向きなおす。

「あ、行きましょつ」

「お、おうつ」

ロディナの妙な迫力に圧されたのか、慌てたような返事をした大男がまず部屋を出ていった。その後にロディナ、その後に下つ端ふたりが続き、扉は再び閉められる。ガチャリといつ音も忘れなかつた。

薄暗い空間にひとりきりになつて、あたしは考える。

(さあ、どうする?)

ロディナは自分を犠牲にしてあたしを守つてくれた。きっとロディナはこうなることを予想していたんだなつ。

あたしがなぜ落ちついていられるのか訊いたとき、ロディナは言った。

『あの人たちがわたしたちを生かして連れてきた以上、わたしたちに利用価値を見出しているのは明らかだから』

つまりその利用価値が、『魔符術学校の生徒である』といつことだつたんだ。

そしてそれならば、優秀なほつがいいに決まつている。

きつと魔符を織らされるんだ。

エムルくんの力を試すと言つていたから、それにハンコを捺して

(……ま、待つてよ?)

そこまで考えて、あたしはひとつ肝心なことを思い出した。

『ロディナが織つた魔符つて、ロディナにしか読めないんじゃないの!?』

思わず口に出してまで確認する。

古代文字があまりにも下手すぎて、卒業論文を突き返されたほどのロディナだ、古代語を読み慣れていない人がそう簡単に読めるわけがない。でも威力を試すということは、ハンコを捺したあと誰かがそれを読むはずで。もしそれが読めない字であつたなら、最初からハンコを捺すとも思えないし、結果役に立たないということになるだろう。もしかしたら、ロディナがふざけて変に書いていると思われる可能性だつてあるんだ。

（やここまで先のことを、ロディナが考えなかつたはずはないよね…）

さつきロディナから受け取つた手のなかのペンダントを、ぎゅうと握りしめる。

握りしめてから、ふと。

「！」

そのペンダントが、ふたりで学校を出発したその日、酒場にいたロディナが握りしめていたものだと気づいた。

（寝るときも外さなかつたのに）

いつもは制服の内側に隠していて見えなかつたけど、着替えるときに何度も見かけていたんだ。だからおしゃれのためにしているんじゃないで、大事なものだから身につけているんだろうとは思つていた。

（どうして今、置いていったの？）

まるでお別れを告げられているようで、考えたとたんに涙がにじんだ。

少し厚みのある、橢円形の金のペンダント。

なかになにかが入つていいんだろうか？

横を見たらあけられそうな溝があつたから、爪を差しこんでみた。（そうよ！ ロディナのことだもの、ここに切り札になるような魔符が入つてるかもしれないじゃなにつ）

わざと明るい考えを思い浮かべながら、ひらく。

「えっ？」

なかから出てきたのは、ペンダントと同じ橢円型に切り抜かれた一枚の写真と。丁寧に折りたたまれた一枚の紙。

あたしの目を先に奪つたのは、小さな写真のほうだつた。

（これ……あたしの両親と、小さい頃のロディナ！？）

一体どうしてそんな写真があるのかはわからないけど、あたしの両親の真ん中に六歳くらいのロディナが立ち、こちらに笑顔を向けている写真だつた。しかも背景に映りこんでいるのは、小さいけど

飛行船だ……！

（一体どこのことなの？）

ロディナを飛行船に乗せたのは、あたしの両親？確かにあたしの両親は、古代語に関する新しい発見があれば、あたしをおいてどこにでも出かけていくようなふたりだつた。でもそれは大抵一・二日の話で、いつもお土産をたくさん買ってくれたから、最初はさみしくて泣いていたあたしも、だんだん帰つくるのを楽しみに待てるようになつたんだ。

そんな旅の途中で、偶然ロディナと出合つて、なにか縁があつて一緒に飛行船に乗つたのかもしれない。それをロディナが今も感謝しているとしたら、ロディナがあんなにもうちの両親を尊敬しているふうなのも頷ける。

勝手に納得したあたしは、今度は細かく折りたたまれた紙のほうをひらいてみた。

そこにあつたのは、見慣れたパートチャ（ママ）の字で『あなたの夢が叶いますように』古代語でそう、書いてあつた。

（ロディナ、……！）

ロディナはずつとこれを支えに生きてきたんだろうか？紙にところどころ水滴が落ちたようなシミがあるのは、つらさを外に出さずに、このペンダントのなかに隠していたから。

「ロディナの、プライド……」

部屋を出していくとき、ロディナがあたしに告げた言葉。簡単にそれを「捨てる」と言つていた自分は。

ロディナが自分のためだけにそれを保ちつづけていると、勝手に誤解していた自分は。

（なんて浅はかだつたんだろ？）

こんなときなのに、あたしは思つた。

あの凛とした姿に憧れていた自分は、決して間違いではなかつた、

၂၁

【第3章】誰のための「ライド・3

それからしばらくして、あたしも部屋から出されるときが来た。
(ローディナの字が読めない以上、そのつちあたしを迎えてくるだらう)

予想していたから驚かなかつたし、覚悟はできていた。
連れていかれるのはおそらく、ローディナがいるところ
つまり、エムルくんのいるところでもある。
(これはチャンスよ!)

そう自分に言い聞かせ、心を奮い立たせた。

今自分が空の上にいることなんて、もうどうでもよくなつていた。

そんなあたしを迎えてきたのは、大男ひとりだった。

「てめえもあつちの姉ちゃんも、おとなしく従いすぎて気持ちが悪い
いな」

そう言いつつも下つ端を連れてこなかつたのは、当然それを見越
してのことなんだろう。

「そんなの、エムルくんを助けたいからに決まつてるじゃない!」
小さな光が揺れる狭い廊下を、大男の後ろについて歩きながら背
中に叫んでやつたら、大男は飛行船が揺れそうなほど大声をあげて
笑つた。

「はつはつは、バカ正直だな。魔符を織れたといひで、ハンコがな
ければなにもできんくせに」
確かにそのとおりだ。

でも

「あんたは知らないかもしね! 魔力士だつて魔符を織
る人がいなかつたら役立たずなのよ!」
「!」
ぴたりと、大男は足をとめた。
(でもこれだつて本当なんだ)

魔力士は自分で魔符を織ることを許されていない。許していないのは国の定めでもなく世界の理でもなく、魔力そのものだという。

だから魔符を織れる人がいなくなれば、その時点でこの世界から魔符と魔符術が消えることになる。魔力士は確かに大切な存在だけど、彼らがいればそれでいいというものでもないんだ。

「あんたたちがなにを考えてるのかは知らない。でも、どんなに良い魔力士を集めたって、その力を生かせる魔符職人とか魔符術士がないなかつたら、宝の持ち腐れなんだからね！」

背中に言い捨ててやると、言い返すためか大男が右側からゅうくりと振り返つてくる。

（今だ！）

その隙にあたしは、左側から大男の横をすり抜けて走つていった。

「！ 待てっ！」

「待つもんですか！」

もちろん逃げようとしたのではない。早くローディナのところに行きたかつたんだ。

狭い廊下はずつと一本道で、迷うことにはなかつた。どうやらそれほど大きな飛行船ではないようだ。

（みんな一緒にいるならきっと、いちばん広い部屋よね）

だとしたら、廊下の突き当たりがあやしい。

すぐ後ろから大男が追いかけてきていることもあつて、あたしはひたすらまっすぐに走つた。そしてたどりついた扉を戸惑いなく押しあけて

「！ ローディナ！？」

さつきまであたしがいた部屋の、十倍ほどの広さの部屋があつた。部屋の壁にはいくつかの丸い窓もついていて、ここが間違いない空の上であることを教えてくれる。

そんな部屋の中央で横向きに倒れているローディナは、明らかにぐつたりとしていて、露出している脚や腕のあちこちにアザができる。ローディナのそばに立っている男がムチを持っていたから、そ

れで殴られたのかも知れない。

あたしは慌てて駆け寄ろうとしたけど、追いついた大男に腕を捕まえられてしまった。

「つ放してよ！ あんたたち口^ヒティナになにしたのよつ！？」

腕を振つて暴れるけど、当然のように大男はびくともしない。それどころかあたしを引きずるようにして部屋の中央まで運んでいく。部屋の最奥は少し高くなつていて、そこにまるで国王陛下が座るような、赤と金で彩られた立派な装飾の椅子が置かれていた。その上にちょこんとエムルくんが座らされていて、動けないようロープで縛りつけられているのが見える。おまけに口もとは、見たこともない装置でふさがれていた。

(ひどい！)

「ふたりが一体なにをしたっていいの?」

思わず叫ぶけど、室内にいる男たちはみんな一様に「ヤーヤ」と笑うだけで、誰も答えてくれなかつた。明らかにこの状況を楽しんでいるんだ。

本当に気持ち悪い。

同じ人間なのに、考えが理解できない。

リードイールン

ふとか細い声で名を呼ばれて、視線を左下に振った。
倒れたままのロティナが、身体を捻るようにしてこちらを見てい
るのが目に入る。

「口テイナ、大丈夫なの？」

大丈夫じゃないとわかっていても諒してしまった

力の答えを待つ。

すなど口元はなせが、血嘔氣味に「せどを亞あせで

「困ったな……わたしは本気で書いていたんだってさ、言じてもらえないのよ」

「一」

(やつぱりローディナの字が読めなかつたんだ……)

「キツ」と、ローディナのそばに立つ男に鋭い視線を飛ばしてやつたら、ムチを手にしているその男は「やれやれ」と大袈裟に呴いて。「何度も言つてもこちらが望む魔符を書いてくださいないのでね、私も叩きたくないものを叩くはめになつていいのだよ」

変に丁寧な言葉遣いなのがまた、逆に腹立たしい。

「わたしはちゃんと書いているわよ！ ただ極端に字が下手なだけだつて言つてるでしょ！？ その子に訊いてみればよくわかるわ」叫んだローディナは、身体が痛むのだろう、顔を歪ませて自分の身体を抱きしめていた。

不意にぐいと、あたしを捕まえている大男に前を向かされる。

「……というわけで、てめえをここに連れてきたというわけせ」

(一)

耳もとで呴かれて、寒気がした。

必要とされているのは、あたしの証言。

(正直に言つたほうがいいの？)

それともローディナには、なにか作戦があるのか。

脱出の相談はできていたけど、こんな相談はしなかつた。

(どうすれば　)

横田でもう一度だけ、ローディナを見た。

多分それが、ローディナの作戦だつたんだろう。音もなく、動いた口もと。

それが形づくつていたのは、まぎれもなくあたしにも覚えがあるもので。

(そつか)

ローディナが書いた魔符は、本当にこつらが望んだものじゃなくてさつきローディナが演じていたよつて、あたしも演じてみよつと口をひらいた。

「……そうよ、確かにローティナは字が下手なの。そのせいで卒業論文を突き返されたくらいね」

「ちょっと、そこまでばらすことないでしょーー?」

入ったローティナのあいの手も完璧だ。もしかしたら、かなり本気で言つたかもしれないけど。

あたしはもつともらしく、すぐに「フォローする。

「でも優秀なのも本当よ。そもそも論文の提出が許されるのは、成績上位五名だけだもの」

「 だそうだ」

大男が最後をしめると、エムルくんの隣にいるひとりだけやけに身なりのいい男は深く頷いた。

(あいつが首謀者なの?)

歳は四十前後だろうか、周りの男たちよりも明らかに上で、立ち姿にもどこか気品が見える。

「ではエムル＝トルド、この魔符にハンコを捺してもいいつか」

その男は落ちついた声音で、エムルくんに魔符を差し出した。

(あれがローティナの書いた魔符ね)

しかしエムルくんは椅子に拘束されていて、手も肘掛けに縛られた状態だった。当然魔符を受け取れるはずも、ハンコを捺せるはずもない。

そこで男は魔符をエムルくんの左手と肘掛けのあいだに挟みこみ、エムルくんの左手の親指から無理やりハンコを取り出した。

(強引に捺す気?)

その瞬間に備えてか、ローティナのそばの男がローティナの口を手で塞ぐ。ハンコが捺されたとき、万が一にでも唱えられることを恐れたんだろう。

だけどそれが、あんたたちの敗因よ!

ハンコが捺された魔符は一瞬、淡い緑色の光に包まれあたしたちの目を攻撃してくる。

みんなが目をつむつた、今がチャンス!

「アオマ・クラエネブレバ・シバノーアピフ……（魔符術・金だらいよ、その高貴なる姿で敵を押しつぶせつ……）」

そう、ロディナが誰にも聞こえない声で呴いたのは『金だらい』だつたんだ。そしてその魔符が最後までばれなかつたのは、ロディナが書いたものだつたから！

あたしが唱えた瞬間に光と魔符は消え失せ、かわりのように訪れる、魔符術の効果。

「！？ な、なんだつ？ 今船になにかがぶつかつたような衝撃がしたぞ！？」

「ぶつかつたというか、落ちてきたんじゃないか？」

揺れた衝撃に、焦りはじめる男たち。

「お、おいっ、窓を見ろ！ 高度が落ちてくるぞ……」

「なんだつて！？」

（ちょ、そこまでの威力はこっちも予想外だよ！？）

まさかこの飛行船を沈めてしまうほど大きな金だらいが落ちてきただとでも言つのだろうか。それほど、このエムルくんの力が強いということ？ これくらいそばにいても、エイラさんみたいな圧力はなんにも感じられないのに

「リューイ＝ルーンつ、ぼーつとしてないでエムル＝トルドを！」
ロディナに声をかけられて、はつと我に返つた。

男たちはみんな飛行船から逃げることに精一杯なようで、部屋の出入り口に殺到していたんだ。おそらくどこかに脱出するための乗りものがあるんだろう。あたしを捕まえていた男も、二つの間にかいなくなつていた。

あたしはロディナに言われたとおりエムルくんのほうへと駆け寄り、身体を椅子に縛りつけているロープを外してやる。ついでに口を塞いでいる装置も。

「大丈夫つ？ エムルくん」

「あ、ありがど、おねえちゃん」

「無理やりハン口出されてたみたいだけど、手は平氣なの？」

「ん、もどもど外れるよつになつてらして」

幼い声で繰り出されるなまりがなんともかわいくて、思わずなんどしまこななるけど、今はそれどじりじやない。

そうじつしてこむひち、飛行船も傾きはじめた。

「ちよ、ちよ、ちよ、斜めつてるよおおおつ」

「落ちつきなれこよ、リューイールーン。とりあえずじつに来て」

じつじつとは、冷静な声をかけてくれるロティナの存在が本当にありがたい。ただ、ロティナはその場で身体を起こしていたもの、まだ立てないよつで手招きをしていた。

あたしは両手でエムルくんを抱えこみ、ふらふらになりながらもそちらに戻る。

するとロティナは、手もとに一枚の魔符を用意していた。

(一 そうだ、脱出用の魔符は書いてあつたんだつた)

それにハンコを捺してもらえば、無事に帰るのは簡単なことだ。「エムル＝トルド、この魔符にハンコを捺してもらえないかしら?」ロティナに渡され、田を落としたエムルくんは、こんな状況なのにケラケラと笑い出す。

「これ、おもしれえ魔符だなあ。おねえちやんだけが考えだの?」

「そうよー、結構な自信作なんだから」

答えたあたしに、しかしエムルくんは。

「でも、捺されねえな。だつてこれだば、この船そのまま落ちてしまつべ?」

「え?」

「街にが森にがは知らねえけど、被害は出るべや。んだして、まずそろばくいとめねえと」

「でもそんなこと言つてる場合じや……あやああつ」

飛行船はさらに高度を落とし、落ちる速度も速まつてきた。これでは助けるのも助かるのも余裕がない。

ただわかるのは、魔力士の協力がなければどうにもできなこと

う」と。

「どうしようローディナ！？　この飛行船を消す魔符でも考えてみるつ？」

そんな時間があるとは到底思えなかつたけど、すがるよつた氣持ちで口にした。

すると、なにかを考えるよつぱつと押し黙つていたローディナが、「　！　飛行船を、消す……？　そうよね、それだけでいいのだわ！」

「え？　なに？　いいこと思いついたつ？」

「リューイ＝ルーン！　今すぐこの魔符の内容を床に書き写して…」

「！？」

それはあまりにも盲点を突いた方法だつた。

「すごい……すごいよローディナ！」

魔符を織る対象はなんでもいい。

ただし、魔符術を使用したさいにその対象は消え失せる。

それならこの飛行船本体を魔符にしてしまえばいい！

「褒めなくていいから早くつ！」

「まかせて！！」

ペンは念のため勝手に持つてきていたから、それを取り出して床に書き写す。

その方法にはエムルくんも納得したのか、ハンコを出して待つていてくれた。

（うう、床が傾きすぎて書きにくいや…）

氣を抜くと転がつてしまいそうだつたから、なんとかこらえて踏んばる。転がつてくる木箱やタルは、ローディナがふらふらになりながらも抑えてくれたから平氣だつた。

「よしできた！」

「あい、だば捺す！」

今度は目の前で、さつきと同じ白縁の光が。

（やつぱりエムルくん、もしかしてかなり力が強い…？）

それがガイト以上に強い光で、まるでそのなかに身体が消えていきそうな錯覚すら抱かせる。他国のやつらが狙っていたことといい、エルムくんきみ、本当は

「唱えるわよ、リューイ＝ルーン！」

「は、はいつ」

光のなか、三人で硬く手を繋ぎ、ロティナの合図で声をそろえた。「アオマ・ダンアイパツエアジエ！（魔符術・しゃぼん玉よ、我らを包みて宙に舞え！）」

そうして再び光に包まれる世界。

まぶしすぎてなにも見えないから、互いの手だけをきつく握った。（お願い、うまくいく！）

理論上はうまくいくはずだつたけど、これまでにこんな大きな媒体で魔符術を行つたことはないから。誰も試さなかつたからわからなかつただけで、大きさの限界がもしかしたらあるかもしれないんだ。

祈るしかなかつた。

ロティナの紡いだ古代語を信じて。

あたしはこの魔符を織りこんだときのことを思い出す。

『ねえリューイ＝ルーン。しゃぼん玉の古代語はわかる？』

もう一枚魔符を織るうつと言つてきたロティナに、訊かれたときは驚いたものだ。

大人びたロティナに『しゃぼん玉』なんて似合わないような気がしたから。

多分、そういう考へが顔に出ていたんだろう、ロティナは苦笑して。

『きょうだいのために、いろいろのものを我慢するしかなかつたわたしはね。妹たちが無邪気に飛ばすしゃぼん玉を見て、あれに乗つて自由に飛んでいたらしいのについて、いつも思つていたの。……わたしは、気づいていなかつたから。家族を守りたい、でも逃げ出したいと思つ自分の心と対峙することで精一杯だつた。家族もまた、

さみしさからわたしを守つてくれていたことに、気づかなかつた

『ロティナ……』

『だから今、生きて家族のそばへ戻るために、それに乗りたいと思うの。おそらく下は丸見えだらうから、あなたは怖いかもしれないけれど』

『「怖いだらうけど、きっと平氣! えつとね、しゃぼん玉のつづりは』

（「うん、こんなにやさしい想いで紡がれた魔符に、間違いなんてないよね!」）

やつと落ちついてきた皿蓋の向いの明るさに、あたしはそつと皿をひらいた。

まず見えたのは、虹色の輝き。

そしてそれを通り越して見える、あたしたちの大切な国。

きょろきょろと一周見渡してみたけど、飛行船が落ちて炎上しているようなところはひとつもなかつた。

「成功よ、リューアイ・ルーン」

「よ、良かつたあ」

あたしは全身から脱力した。不思議と、空の上にいるという怖さはなかつた。

虹色に輝く大きなしゃぼん玉は、ちゃんとあたしたちを守つてくれている。それに、いくつか見えるパラシューートみたいのは、きっと誘拐犯たちのものだろう。いくら悪人とはいえ、死なれたら後味が悪いし、殺したかったわけじゃないから助かってくれたほうが多い。

（こういうの、偽善的つていうのかもしれないけど）

あのガイト＝チャードだつて気遣つてくれたことだ、きっと悪いことじやない。

どんな人だつて、いなくなつたらかなしむ人がいるかもしれない。あたしにはわからないだけで、他人には見えないだけで、どうにもできない理由を背負つているかもしれないんだ。

ひょんなことからロティナと一緒に旅をして、あたしはそれを学んだ。

人のうわべしか見ないのは、愚かなことだと。

「わたしの下手な古代文字が、初めて役に立つたわ」

「なんとなく目があつたら、苦笑を浮かべたロティナが呟く。

「ありがど！ おねえちゃんだぢつ」

するとあたしたちふたりを捕まえるように手を広げて、エムルくんが抱きついてきた。見た目は九歳くらいだけど、寿命の長い魔力士だ、もしかしたらあたしたちよりも長い時間を生きているのかもしねない。

（自分の身の安全より、飛行船が落ちたときの被害を心配してた）
「この子は間違いなく、国を守る立派な魔力士だ。

思わずぎゅっと、その小さな肩を抱きしめる。

「おねえちゃん……？」

「エムルくんって、ほんとはかなり強い魔力を持つてるの？」

「…」

訊いてみたら、エムルくんは一瞬だけ下を向いて息を呑み、それでもすぐに戻して。

「おら、魔力強すぎで、ずっとひとりだった。だあれも寄れねぐで。ここよりずっと南のほうさいだけど、そこの国をはおらの魔力を抑えられる人、だあれもいねがつた」

「それで、この国に連れてこられたの？」

問い合わせたロティナに、エムルくんはぶんぶんと首を振る。

「連れてこられだんじゃね。ガイドが迎えさ来てくれだして、おら、自分の意思でこじを来たんだ」

「え

思いもよらない名前が出てきて、今度はあたしが息を呑む番だつた。

（なんでガイドが？）

あいつだってずっとあの屋敷のなかに閉じこめられてるんじや……

「ガイトは、おらがも「ちよ」じつと成長して、自分で自分の魔力をある程度制御できるようになるまでは、おらの力を封印しておいでけるつて言つて、この首輪ばつけてくれだ」

言いながら、エムルくんが服の下から出したのは、光でつくられた輪だ。おそらくこれも魔符術。それも、かなり高度な。ガイトの命令で誰かがつくれたのだろう。

「だからエムルくんは、そばにいても平氣なんだ。魔力士特有の圧力みたいなのが、感じないもんね」

「コクリと頷く姿はかわいくて、そのへんにいる子どもそのものなのに、それほどまでに強い魔力を有しているとは。

「だけどさ、みんなしておらの魔力怖がつて、結局誰も近寄つてこねがつたよ。ハンコの威力は抑えられねえして、ハンコ捺すのも禁止されだら、おらますますひとりだ」

「！ あの×マークつて、そういう意味だつたんだ……」

（エイラさんも、エムルくんは事情があつてハンコを捺せないつて言つてたつけ）

身体から漏れる魔力は抑えられても、ハンコを通して体内から届けられる魔力までは抑えられなかつたんだ。

「ガイトだつて、ガイト自身がひとりにされでるような状態だつたして、会いには来てくれねがつたけど……かわりにいつも手紙送つてくれだ」

「手紙つ？ へえ、意外なところもあるのね」

ロディナは心から驚いたように告げたけど、あたしはどうにか納得してしまう部分があつた。

（そつか……そなんだ）

ガイトはひとりでいることのさみしさを知つていたから。

どうやつてエムルくんのことを知つたのかはわからないけど、きっと放つておけなかつたんだろう。

だけど自分だつてそばにいてやることはできなくて。

歯がゆい思いを、していたのかもしれない。

「んでな？ こないだ来た手紙に、近々変なおねえちゃんがふたりおらを尋ねてきてくれるがもしれねえって書いてあつたして、待つでたんだ。それっておねえちゃんだちのことだべ？」

- 1 -

（行くなら行ってみればいいと、あたしたちを送り出したのも）

「ふーん、結構な策だ」と。

田を細めて感心しているローディナだけど、その田に少しの鋭さも

！あつ、あれ、アステイスの飛行船だつ

卷之六

あたしたちに抱きついているため、ひとりだけ反対側を向いていたエムルくんが大きな声を出した。振り返つて見ると確かに、この国の紋章が刻まれた飛行船がこちらに向かつて飛んできている。

（た、助かつた……）

このままずつとしやほん玉でふわふわしていたら、さすがに冷静ではいられなかつたかもしれない。

「ん？」

笑しながら声を告げる

「また幼なじみくんに感謝しないといけないみたいよ」

本気で笑っているのだった。

卷之二十一

【第4章】いちばん強い魔符術・1

お城での発表大会を翌日控えた今日、あたしたちはエムルくんの屋敷で最後の作戦会議をしていた。丸いテーブルを囲んで、優雅に紅茶を飲みながらゆっくりと思考できるなんて大変ありがたいことだけど、ひとつ問題だったのは

「あのー、エムルくん？ ちょっと言いにくんだけど、砂糖と塩間違えてないかな？」

「なんだべがつ？」

「いろいろとやつてもらえるのはありがたいのだけど、できればじつとしていてちょうだい」

「ぬぬう」

屋敷のなかに人がいることが嬉しいらしく、いろいろと世話を焼いてくれようとするとんだけど、ローディナの言つとおり今はおとなしくしてしてくれたほうがありがたかった。なにしろ、あたしたちの魔符づくりはまた振り出しに戻ってしまったのだから。

「エムルくん、良い魔符が完成したらちゃんと遊んであげるからさ」シコンと下を向いてしまった頭をなでてやると、それでも元気を取り戻して部屋を出ていく。その残像に花が舞つていてるように見えたのは、あたしの気のせいではないだろう。

（ほんとに嬉しいんだろうなあ）

そしてそれだけ、よっぽどさみしい思いをしていたということだ。（あの子がガイト以上に強い魔力を持つてるなんて、全然信じられないけど）

あたしたちが国王陛下直属の飛行船に助けられたあと、詳しい話を教えてもらえたんだ。

エムルくんがこの国に来ることになつた理由は、本人が言つていたとおり魔力が強くなりすぎたからだつた。南のイーサリカでは手に負えなくなつて、優秀な魔力士や言語学者のいるこのアステイス

王国に助けを求めてきたのだという。しかし当然、高位の魔力士を欲しがっている国はたくさんあって。だからこそ魔力を封印され誰でも近寄れる状態のエムルくんを、狙う者がたくさん出てきた。（それさえなければ、エムルくんは一時的にでも普通に暮らせたかもしれないのに）

完璧に守る必要があつたから、力がなくとも結局は隔離されることになり。いつもは過剰なほどに警備で守られていたけど、ここ数日は特別に少し緩くなつていた。

それはガイドが、エムルくんに書き送つた手紙のせいだ。あたしが来るかもしれないと知つたエムルくんが、無理を言つて減らしたらしい。あまりに厳重な警備だと、あたしたちがびっくりして近寄らないかもしれないからつて。

しかし他国のやつらには逆にそこを狙われ、今回の誘拐事件が起きてしまつたのだった。

「でも良かつたわね、とりあえず『最強のハンコ』をもらつ権利は得られたもの」

淡い花柄のティーカップを口もとに運びながら、改めてローティナがほつとしたように呴ぐ。その眉間に思い切り深いシワが刻まれていたけど、見なかつたことにしよう。

「問題は、そのハンコが最強すぎてめつたな魔符はつくれないつてことよね……」

そう、エムルくんを無事に助け出したあたしたちは、特別にエムルくんのハンコをもらえる権利を得ていた。ただし条件がひとつつて、エムルくん自身が捺してもいいと思えるような魔符でなければ、捺してもらえないんだ。

あたしも塩からい紅茶を飲みながら、ない頭を働かせる。

「まず攻撃魔符はとてもじやないけど無理でしょ？　こことお城とじや距離が近すぎるもの、本当に死人が出ちゃうよ」

ガイドのハンコで一マスずれでもあの威力だった。エムルくんのハンコがそれ以上の威力をもたらすことは確定事項なのだから、無

茶はできない。

「そうよねえ」

いつもならすぐに案を出してくれるローディナも、今回ばかりは思
い浮かばないのか視線は宙を舞っていた。

(『いちばん強い魔符術』で、かつ、攻撃的なものでないとなると

)

あたしにどうして、いちばん強いものってなんだろう?

そもそも、強いつてなに?

どうじうじうと?

「おねえちゃんたちつ、なんがジノラットつて人が来てらんだけど、
入れでもいいの?」

考えるあたしを遮断するように、さつきエムルくんが出ていった
扉の向こうから声がした。この屋敷にはエムルくん以外の人間はない
から、当然エムルくんのものだ。そうじやなくとも、独特のな
まりは他の人には出せないだろうからすぐにわかるけど。

ローディナに目を向けると、「いいわよ」というふうに軽く頷いた
から、あたしは椅子から立ちあがつて扉のところへ向かう。そして
あけてやると、門番のようにかしこまつて立つているエムルくんの
姿があつた。

「入つてきたつていいのに」

その姿があんまりかわいくて、笑つて言つたら。

「おら、行儀の良い子さなりてえして。『入つて』つて言われでが
ら、入るんだ」

(さみしいから、誰にも嫌われたくないつて?)

小さい姿に、研ぎ澄ました心が痛い。

「じゃあ、ジノラットを連れてきてくれるかな?」

「あいつ、行つてくるだ!」

敬礼するようにびしっとひたいに手をあてて、それからくるりと
方向転換すると楽しそうに走りはじめた。やっぱり残り花が見える。
(ま、本人が楽しんでるならいつか)

テーブルに戻ると、珍しくローティナが穏やかな笑みを浮かべていた。

「うちの弟たちも、軍隊じつにみたいの好きなのよね。今度連れてきてあげようかしら」

「それいいよ！ 絶対喜ぶから」

そこからは一時考えるのをやめて、ジノラットの到着を待つた。ジノラットが来ると騒がしくなるのは必至だけど、その分閃きも生まれる。金だらいの魔符を思いつけたのはジノラットのおかげだったし、なにより昔から一緒にいるからなんとなく落ちつく、という側面もあった。あたしにとつてはある意味、両親の次に家族みたいな存在だ。

（あしたちが誘拐に巻きこまれたって、国に通報してくれたのやつぱりジノラットだつたし）

ロティナがそう予想していたとおり、ジノラットは相変わらずあしたちのあとを追つていって。あしたちが眠らされてから現場にたどりついたものの、魔符術戦では勝てずに逃してしまった、という話だった。ジノラットがどんなに魔符術戦に慣れていると言つても、やはり大人と子どもの差は大きい。こないだみたいに逃げるための戦いならまだしも、本気で勝とうとするのはさすがにきついんだろう。

「どうだ？ 良い魔符思いついたか？」

部屋に来るなり尋ねたジノラットの表情が、珍しく沈みきつているのは。

「あんたと同じで、まだなにも考へついてないよ」

「そ、そつか……でもおまえたちはこいつのハンコがある分有利だよなあ」

ジノラットがあいてこる椅子に座ると、ヒムルくんがすかさずトレーを運んでくる。

「お、ありがとな」

さつと手を伸ばして受け取り、口に運ぶジノラット。

「一応忠告しておくけど

「ん？」

声をかけたロディナのほうを見る、ジノラットの動きがまだぎこちない。あたしがロディナと一緒にいるせいで、以前に比べてずっと接する機会が増えたのに、一向に慣れないようだ。

「なにが入っているか、わからないわよ」

ロディナが続きを告げたとたんに、ジノラットは「ううう」と紅茶を吐き出す。

「ちょ、ひつひつに向かって吐かないでよ！」

「ロディナに向かって吐くわけにいかないだろー。つかこれ、なに？ なに入ってるんだ！？」

みんなの視線がトレイで顔を隠すよつよつこむエムルくんに注がれる。

エムルくんはそつと皿だけ見えるよう『アーリントン』。

「えつと……おらにもなんだがわがんね……」

「わかんねえものを入れるなよーー！」

きつと砂糖が見つけられなかつたんだね！

ジノラットに怒鳴られて、ぴゅーんとすごい勢いでエムルくんが部屋を出でていつた。それでもやっぱり花が見える気がするのは、こうこうとすらも楽しんでいるからなのかもしれない。

（誰も怒つてなんかくれなかつたんだろうな）

エムルくんは国の未来を担う大事な存在なのだと、理解している人ばかりがそばにいたら。きっと誰も叱れないし、手出しなんかできない。それはエムルくんにとつて、どんなにかつまらないことだつたうづ。

ジノラットがそこまで理解して行動しているのかは、わからないけど。

「ジノラット。怒るものいいけど、あとでちゃんと遊んであげなさいよ」

「ええつ？ 僕、子供もそんなに好きじゃないんだ。おまえのせい

で子どもに対するトラウマがいっぱいあってだな……」

「あら、人のせいにする気？　だいいち、あたしが子どもの頃ならあんたも子どもじゃないのぞ」

ジノラットを簡単操るには、ロディナに協力してもう一つのがいちばんなんだ。

ロディナも当然そのことに気づいているのか、あたしの視線を受けとめると軽く頷いて。

「ジノラット＝ダクシャン、わたしからもお願ひするわ。今度わたしのきょうだいもここに連れてこようと思うの。良かつたら一緒に遊んでやつてくれない？　女のわたしじやつしあえることに限度があつてね」

まるで女神が降臨したような、改心の笑みだつた。

（うわあ……ロディナ本気出しすぎ！）

うつかりあたしまで惚れそうになつた。やばいやばい。

当然ジノラットなんかイチコロで、目の前で大きく両手を振つていた。

「いつ、今の嘘！　子どもが嫌いってのはそつ、言葉のアヤで、嫌いなのはリューアイだけだから！　喜んで遊ばせていただきますっ！」

「

（……なんか腹立つけど、まあいつか）

ジノラットにとつては、ロディナの笑顔がいちばん強いものなん

だ。

「！」

そう考えたあたしは、ピンときた。

きてしまつた。

思わず椅子から立ちあがる。

（いちばん、強いもの……？）

それは誰にもダメージを与えない、ただ胸のなかをあたためるもの。

すべての人が心のどこかに抱える、本人も気づかないかもしれない想いを。

そつと癒すための、言葉すらいらない不思議な力。

「？ どうしたのよ、リューイ＝ルーン」

不思議そうにあたしを見あげるロディナの胸もとに、一度はあたしに託したペンドントが見えた。

（そう、ロディナだつて、そうだよね）

あのあと話を聞いてみたら、やっぱりロディナは幼い頃にあたしの両親と出会つていて。まだ他のきょうだいが小さくて、ロディナだけが自由に動けた頃、父親に連れられて飛行船の初飛行記念式典を見にいったのだという。そしてたつた一度きりのわがままを言つたんだ。

『あの飛行船に乗りたい』

ところが当然そんなお金はなく、父親は必死に娘をなだめていた。そこに声をかけたのが、あたしの両親だつたという。

（あのとき、あたしは熱を出していけなかつたのよね）

だからもともと席はひとつ空いていた。

あたしの両親はあたしのかわりにロディナを連れて飛行船に乗り、ロディナといろいろな話をしたんだつて。

『どうすればこういう船に乗れるの？』

『どうすればお金持ちになれるの？』

『どうすれば、家族のみんなが幸せになれるの？』

他の大人が聞いたら適当な返事に逃げてしまいそうなことでも、丁寧にわかりやすく答えてくれて嬉しかつたんだと、ロディナは言つていた。

実父をさしあいてあたしの両親と撮つた写真が、なによりの宝物になつてしまつたんだ。

その写真から、まつすぐに向けられる笑顔が。

「ロディナ、思いついたよ！ 世界で『いちばん強い魔符術』

！』

「えつ？」

「本当か！？」

「うん。わあ、卒業を勝ち取つてしゃましょー。」

【第4章】いちばん強い魔符術 - 2

発表大会の会場は、お城に併設されている円形闘技場だった。

「普段はここで武術大会やつてるんだよね？」

受付で入場許可をもらい、円形闘技場の入り口へと足を運びながら、詳しそうなロディナに振つてみる。

「ええ、そうよ。いくら魔符術が便利なものといつても、魔符を読む前に攻撃されたのではひとたまりもないもの。だから強い魔力士や良い魔符術士だけではなくて、強い武術士も必要なの」

それを見極めるための大会が、一年を通して開催されている。

その会場でこれから始まるのは、『いちばん強い魔符術』を決める発表大会

（やつぱりそれって、エルバティン王国を意識してるんだろうな）
西にあるその大国は、このアステイヌ王国をかなり狙つていると聞く。国一の魔力士であるガイトが西寄りに置かれているのも、そのせいだとロディナが言つていた。

（国王陛下は、この国を守るために強い者を求めている）

でも、国を守れるのは本当に強い者だけなんだろうか

そんなことを考えながら、あたしはあたりを見まわした。

受付のあつた門から会場までは、あたしの足で百歩くらいだらうか。そのあいだには多くの大人たちがひしめきあつていていたけど、きっと彼らはすでに発表を終えた人たちだ。

（全員が集まつていつせいに発表をするわけじやないつて、言つてたもんね）

『いちばん強い魔符術』と思われるものをその場で実行するのだから、当然危険が伴う。だから今回は、発表をする者がひとりずつ入つていつて、会場の中央でそれを披露するという形が取られていた。当然受付のタイミングも人により違い、あたしたちが来たときは他の発表者がいなかつたから、そのまま会場に入つていいと言わ

れたんだ。

「先に言つておくれビコニー＝ルーン。あなた、会場に入つたとたんに奇声をあげるのはやめてちょうだいね」

迷わないようにとレンガが敷きつめられた道を歩きながら、不意にロティナが口をひらいてきたから、あたしは顔を向けて。

「いい加減フルネームで呼ぶのはやめてよ、ロティナ。あと、奇声つてなに？」

「『うわあああ、すつ』に豪華！ めつちや広い～！』とか、そんなの」

「……」

あまりに言つて、しかも似ていて、言い返せなかつた。

（いいもん、目をつむつて入るからー。）

視界の先にたくさんのかわいい花で飾りつけられたアーチが見えてきて、あたしはそう決心する。左手を伸ばしてロティナの右手に重ねると、自分の行く先を委ねた。

「なに？」

驚いたような声音のロティナに、

「恥ずかしい思いをしたくないなら、なままで連れてつよー。」

「……しようがないわね」

ロティナはため息にその言葉をのせたけど、きつと顔には苦笑を浮かべているんだろう。口で言つほど本氣で思つてこるわけじゃないことを、あたしはもう知つている。

それを肯定するかのように、ぎゅっとあたしの手を握り返してきたロティナ。お互いの緊張が、手のひらを通して行つたり来たりする。

でも足は、とまらない。

（あたしたちは卒業するために來たんだ）

ここで怖じ氣づくわけにはいかなかつた。

ひたすら、転ばないようにと足もとに集中して歩く。

やがてコツコツというレンガから、音のない土へと変わつたその

とき、聞こえてきたのはひときわ大きな声の紹介だった。

「おおつとー？ 今度はふたりの少女がやってまいりました！ どうやら今回の最年少で、現役魔符術学校生のロディナ＝ルーンとリコーア＝ルーンのようです！！」

それに反応するように、四方からわきあがる歓声。

（な、なに！？ 一体どうなってるの？？）

目をあけたかったけど、あけてしまったからそれ以上進めないような気がして、ためらう。

ロディナもさすがに驚いたのか一度足をとめたものの、

「行くわよ」

冷静に心を落ちつけると、こつもの凜とした聲音であたしを導いてくれた。

「う、うんっ」

手を繋いで歩く制服姿のあたしたちはおつと、こぢばんこの会場に似合わない存在かもしれない。

それでも ファイルブックのなかに携えてきた魔符には、誰よりも自信があつた。

近くに魔力士がいるわけでもないのに、全身に感じる強い視線の圧力を搔き分けて、探るような足取りで中央に向かっていく。やがてたどりついたんだら、先に足をとめたロディナがあたしの耳もとで囁いた。

「さあリコーア＝ルーン。あの魔符を」

あたしはまだ目をつむったまま、手探りで左肩から斜めに提げたファイルブックを取り出す。今日このなかに入っている魔符は、たった一枚だけだ。間違うことはない。

「いい加減目をあけなさいよ。大丈夫、魔符だけを見ていればいいのだから」

「わ、わかった」

ロディナに促されて、あたしはやっと目を開いた。

でも、魔符だけ見るのはさすがに無理だった。あたしの身体はち

やんと観覧席にいる国王陛下のほうを向いて、ぱちり視界に入ってしまったから

『おぬしの両親を、まだ見つけてやれなくてすまないな』

エムルくんの誘拐に巻きこまれた数日前、お城で感謝とともに告げられた言葉を思い出す。

(陛下はまだ、あたしの両親を捜してくれている)

他の誰よりも、あたしにとつて強い威力を持つふたりを。たとえそばにいなくても、いくらでもあたしを支えてくれる、笑顔を。

「リューイ＝ルーン、心の準備はいい？ 読みあげるわよ」
まだ手は繋いだまま、残りの手で互いに魔符を挟んで。促したロティナにあたしは大きく頷いた。

そして「セーのっ」のかわりに大きく息を吸い、声をそろえる。「アオマ・イッセンイットオーラインピー・ウイスマッ…（魔符術・笑顔よ、すべての大切な者へ届けッ！…）」

(本当は)

心に思つたことをそのまま綴つたら、魔符におさまらないくらいになつてしまつた。

それをここまで短くできたのは、まぎれもなくロティナのおかげだった。

あたしたちの最後の共同作業、その結晶はこれ以上ないほどに光り輝き、会場を包みこむ。周囲のすべてが見えなくなり、やがて自分が残つた。

隣にいるはずの、まだ手を繋いでいるロティナさえ見えない。

(な、なにこれ！…)

効果が強すぎる、ような気がした。

実際に試したことはないし、エムルくんの力ならこれが普通なのかもしれないけど。

光が強すぎて、とてもじやないけど田をあけていられない。

かといつて田をつむっていても、田蓋の上から透き通る光で闇は

訪れない。

「――！」

そんななか、見えるはずのないものが見えた。

ギヒシー（パパ）が立っている。

バートチャ（ママ）が立っている。

夢よりもずっとリアルな笑顔で、あたしに手を振っていた。

その後ろにはジノラットやロディナが。

一緒に勉強してきたクラスメイトたちが。

みんなあたしに笑顔を向けていた。

（だからきっと、あたしも笑顔だ）

自然にわきあがる笑顔は反射する。

大切な人の笑顔を思い浮かべて、沈む人なんかいない。

一步踏み出す勇気になる。

手を休めて、なぜ自分はここにいるのかと、考えるきっかけになる。

（これは、攻撃するための魔符術じゃない）

誰かを守るための魔符術でもない。

ただ我に返るための。

自分の存在を確認するための魔符術。

笑顔の強さを実感するためだけの、魔符術。

（あたしはそれがいちばん強いものだと思ったんだ）

そしてロディナも賛成してくれたから、この魔符術が生まれた。

この、『いちばん強くてやさしい魔符術』が。

やがて静かに光が消え去ったとき、魔符のかわりに残つたのは、意外にも。

「！？ エムルくんつ？」

本来ならばここにいるはずのない、ハンコを捺してくれた当人だつた。

（ど、どうりでなんか威力が強かつたはずだよ！）

境界をひとつも隔てていない以上、ほぼ百パーセントの力が發揮

されたところ。そのせいか、さつさまでのぞわめきが嘘のように、会場はしんと静まりかえっていた。

「おひね、ちやんとおねえちやんだがの顔浮かんだよ。あど、ガイトの顔もー。つこでにジノラシトにーちやんもー

恥ずかしそうに、でも嬉しそうに、はにかんだ笑顔を見せたエムルくんが抱きついてくる。

あたしはそれをしゃがんで抱きとめながら、観覧席にいる国王陛下のほうに手をやつた。

（エムルくんはいずれ国を背負わなきやならない魔力士なのに、自由に歩いているなんて）

陛下が知つたら怒るかもしけないと、思つたんだ。

「え？」

しかし視線の先の陛下はひどく穏やかな表情をして、こちらを眺めていた。

にわかにぞわめきを取り戻した場内だつたけど、陛下がすつと立ちあがるとまた静けさを取り戻す。

「いぢらへく

結構な距離があるにも関わらず、ちやんと声が届いたのはそのおかげだつた。

ロティナに顔を向けると力強く頷いてくれたから、今度はあいだにエムルくんを挟んで手を繋ぐと、観覧席のほうへと向かって歩き出す。

（なにを言われるんだろ……）

不安がないわけじゃない。

だつてきつと、あたしたちが出した答えは陛下が望んだものとは違うはずだ。

繋ぐ手のひらにも、汗がにじむ。

「おらのいとなら、心配いらねえべ。ガイドが陛下のおつちやんば説得してくれだして、外さ出られだのさ」

それがエムルくんにもわかつたのか、一生懸命にいぢらへくを見あげ

て教えてくれた。

「ガイドが」

「腹の立つ相手ではあるけれど、良いところもあるのね」

「あははっ」

ロディーナの率直な感想に、エムルくんが笑った。

おかげで気持ちが落ちついてきた。

やがてたどりついた、国王陛下のまん前。

陛下もわざわざ下のほうまでおりてきてくれていた。

すでにまつ白になつていい髪を後ろになでつけ、聰明さを讃えた

瞳で静かにこちらを見据え、

「　良い、魔符術だつた」

シワの多いその口もとが、ゆつくりと動く。

「いちばん大切なことを、思い出せせてもらつたよ。ガイドの言つたとおり、おぬしらは面白いな」

そうしてくれようと、笑つた。

笑つてくれた。

とたんにあたりも色めき立つ。

(「…、これは認めてもらえたと思つていいの…？」)

一度は去つた緊張が、再びよみがえる。

視線は陛下に集中するけど、しかしその陛下の視線がなぜか少し
さがり。

「エムルよ」

「んん？」

今度はあたしたちにではなくエムルくんに話しかけた。

「そのふたりの願い」とを聞いてきなさい」

「！」

(やつぱりそうだ！)

陛下はあたしたちの願いを叶えてくれる氣があるらしい。おまけに、願いごとを人に聞かれない配慮までしてくれている。おそらく魔符術学校にチラシを貼つた時点で、こういう願いごとが来るかも

しないことを予想していたんだね！」

「リューイ＝ルーン、お先にどうぞ」

ロディナも嬉しさを隠しきれない声音で、それでもあたしに先を譲ってくれた。

「ありがと！」

それがロディナのプライドだとわかつてゐるから、あたしは遠慮なくしゃがみこんでエムルくんの耳もとで願い」とを囁いた。

（何度も、考えたの）

あたしが本当に叶えたい」とてなんだろう？
自分の卒業はもちろんんだけど、他にもあるんじゃないかな。
両親の帰還を願い」とにできないことはとっくにわかつてゐた。
一国の王さまに叶えられる範囲のことでなければいけないから。
だからあたしは、これを選んだんだ。

あたしのあとにロディナも囁いて、エムルくんは「うそうそ」と聞いていた。

（ロディナはなにを願うのかな？）

やつぱり自分の卒業？

それともロディナも、新しい願いを見つけられたかな。
さつきまでとは違う意味で、緊張する。

やがてふたつの願いごとを聞きおえたエムルくんが、あたしたちを交互に見比べてにんまりと笑つた。

（えつ？）

今のはどういう意味だろう？

それからあたしたちの手を離れて、陛下のもとへと走つてゆく。
陛下は意外にも力強くエムルくんを抱えあげると、耳もとに近づ

けて

「……はつはつは

聞いたとたんになぜか笑いはじめた。

（あ、あれ？）

なにか変なこと言つたつけ？

もしかしたらエムルくんが変に脚色して告げたんだらうか？

ローティナも戸惑つたように顔をしかめていた。

「リューイ＝ルーン、あなたまさかバカなことを願つたんじゃないでしょうね？」

「バローティナから見たらバカなことかもしれないけど、あたしにとりては重要なことよ。ローティナこそ、似合わないと言つたんじゃないの！？」

「気持ちが高ぶつているせいが、言い返してみたらローティナは珍しく。

「……そうね、らしくない、かもしれないわね」

否定をせずに、口もとだけで笑つた。

「？ なんのよ……」

みんな気になる反応をしている。

「この空間は、どこか変だ。

「よろしい。結果はあとで学校のほうに届けさせよう」

国王陛下は一方的にそつ終えると、またもとの席へと戻つてしまつた。

（え？ えつ？）

あたしたちも、係りの人に促されて会場をあとにする。

「なんのよ、このモヤモヤ感は！」

出口で改めて口にしたけど、やつぱりなにも変わらず。

こうしてあたしたちの発表大会は、なんとも言えない嬉しさと微妙感を残して終わつてしまつたのだった。

【第4章】いちばん強い魔符術 - 3

それから日常に戻り、あたしは卒業式までの一日一日をまったく落ちつけずに過ごしていた。

（出られないかもしれない卒業式なんて、近づいてきても全然嬉しい！）

一応最後の悪あがきとして必死に補習を受けてはいるんだけど、結果は芳しくない。

いつもはからかってくるジノラットだつて、あたしがあんまりにも殺氣立つてはいるせいか近づいてこなかつた。

おかげで今日も厭味なくらい平和だ。

平和に『癒しの大樹』を相手に愚痴りまくつてはいる。

「お城からの連絡がまだこないってどういうことよー？ あたしをやきもきさせて楽しむ気なの？ あたしが卒業できないのはもう決まつたも同然のことだからどうだつていいんだけど、もつと大事なことがね！？」

そう、あたしが国王陛下に託した願い」とは、実のところ自分の卒業ではなかつた。

そしてだからこそ、結果が気になつていたんだ。

（自分のことならすぐにわかるのに……）

情報源のジノラットだつて自分のせいとはいえあまり近寄つてこないから、気が気じやなかつた。

「ロディナ、大丈夫かな……」

「呼んだかしら？」

「ふえつ！？」

木に向かつて告げたひとりごとに、返る声があつたから飛びあがつた。とつさに振り返ると、そこにはロディナの姿が。

「ふふ、初めて話した日とは、逆みたいね」

目の前でふわりと笑うロディナは、少し印象が変わつたような気

がする。

(表情がやわらかくなつた?)

しかしそれ以上に気になつたのは、手もとの紙の束だ。

あたしの視線から疑問を読み取つたのか、さらに近づいてきたロディナは苦笑して。

「悪いのだけど、リューラーン。あなた、論文の清書を手伝つてくれないかしら?」

「えつ? それつて

」

「代筆が認められたの」

「ほんとに?」

(叶えてもらえたんだ!)

あたしの願いごと。

『ロディナの論文提出を、自著ではなく代筆でも可にしてほしい。あたしでよければ書くから』

あたしはそう、エムルくんに囁いた。

(ロディナと数日間一緒に過ごして)

その知識の豊富さを実感したから。

あたしはともかく、ロディナが卒業できないなんておかしいと、思つてしまつた。

ロディナに、憧れたとおりの言語学者になつてほしいつて。

だからあたしは、自分のことはどうあえずおいておいて、ロディナのことを願つたんだ。ロディナ自身もそれを願うかもしれないと思つていても、譲れなかつた。

「それからね

」

嬉しくて胸がいっぱいで、やつと数口ぶりに幸せな気分を味わつ

ていたあたしは、さらに続いた言葉に思わずそう応えてしまつた。

するとロディナは眉尻を上げて、

「あなたって、あまりわたしのことを信用していないのね」

「そんなことないよ? なんで?」

今度は少し意地悪そうに唇をゆがめた。

「卒業式の前日に、あなたの卒業をかけた最終試験をやつてくれる
そうよ」

「えー？」

（もう一度、チャンスをくれるつて？）

それは本当にありがたいことだ。

でもひとつだけ、どうしても解決できない問題がある。

「う、嬉しいんだけどさ……今までと似たような試験だつたら、あ
たし多分受からないよ……」

勉強を頑張つていなければいけない。

それでもあたしは、どうしても文法を覚えられなかつた。
文法を覚えるための場所がきつと、すべて単語で埋まつているん
だ。

そこまでもうつても期待に応えられそうにないあたしは、こ
の巨木から離れられそうにない。

「大丈夫よ」

しかしそんなあたしを、導いてくれるのは、
「わたしの持ちこみを、認めさせたから」

通りのいいロディナの聲音。

「え？ どうこうこと？」

「だから、あなたが試験を受けるときに、隣に座つていってもいいの
ですつて。そして答え以外ならば教えてもいいと」

「……はあつー？」

（教科書を持ちこむみたいに、ロディナを持ちこむつてことーー？）

それはまた大胆な許可を出してくれたものだけ……でも普通な
ら、そんな許可を出すはずがない。だつて学校側にはあたしを卒業
させなくてもなんの問題もないんだから。

つまり、考えられることは

「も、もしかしてロディナ、陛下にそれを願つたの……？」

（あたしをどうにか卒業させるために）

ロディナも自分のことをおいて、あたしのことを願ってくれたんだううか？

交わされる視線。

しかしロディナは、しばらくなにも答えなかつた。

ただ風だけがあたしたちのあいだをすり抜けて、これからあたしが向かうであろう卒業の向こう側へと飛んでゆく。

やがてロディナは、ふつと表情をゆるめると。

「わたしたち、結果的にエムル＝トルドを会場に持ちいだことになつたでしょ？ それで思いついたのよ」

「ああ」

（確かに、そうだ）

あれはあたしたちが意図したことではなかつたけど、エムルくんが会場にやつってきたことでそういう状況になつてしまつたんだ。そしてロディナはそれを見て、あたしが卒業するためにはどうすればいいのかを、思いついたと。

「ロディナ、あ」

「待つて」

お札を言おうとしたあたしを、ロディナは遮ると手もとの紙を押しつけてきた。

「感謝の言葉は、お互に卒業できてからにしましょ？ とりあえづ今は、わたしに協力して」

「…」

（あれが最後の共同作業になるんだって思つて）

なんとも言えないさみしさを感じていたあたしは、

「……喜んで！」

まるで賞状をもらひた子供もみたいに、両手でそれを受け取つた。（もう一度、始めよ？）

「の場所から。

あたしたちの卒業をかけた戦いは、もう少し続きをそつだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3721z/>

ハンコくださいっ！

2011年12月25日20時56分発行